ゐると、あにはからんや急に逃げ出して、『お氣の毒だが私はそんな者とは違ふ、もつと變つた者だ、』と云ふ。……辛抱だ、そのまゝに委かして置け。客間から入口に飛んで行く婦人の速い流行のやうな社會主義の議論もあるであらう。」[14]

トルストイは斯うして、自由主義者と社會主義者を攻撃したが、これは專制政治のために自由な天地を與へるためではなかつた。――それどころか全く反對なのである。不規律な、危險な物は總て追拂つた後で、新しい世界と古い世界の戰爭が起るのであつた。彼も同樣に革命を信じてはゐたのだが、たゞ彼の革命は、他の革命黨のものとは大分變つてゐたのである。彼の革命は來るべき日の――恐らく今日の、神の支配を望む中世紀の神秘な信者のやうな革命である。

「私は實にこの時に、基督教の世界に二千年の間準備されてゐた大革命が起つて來つゝあると思ふ――それは腐敗した基督教や、それから生れる統治に代へて、眞實の基督教、人類の平等を思ひ理性のある人は誰でも望む、眞實の自由の根抵を持つた革命である。」[15]

豫言者的の先見者である彼は、愛と幸福の時代を告げるのに、何んな時を選んだか。露西亞の最も甚だしい闇黑時代、災難と汚辱の時代、創造的信仰の雄大な力、その周圍のものは總て光を持つてゐる――闇の夜も。トルストイは死の中に改新の表徵を見た――滿洲の戰爭の慘狀の中に

露西亞の敗戰の中に、怖ろしい流血の階級戰の中に改新の表徵を見た。彼の夢想的の推理は露西亞は總ての戰爭から退かねばならぬと云ふ驚くべき結論を、日本の勝利によりて演繹した。何故と云へば、戰爭の時には、非基督教國民は、「奴隷的屈從の狀態を超えた」基督教的の國民よりも何時も便利の地位に立つてゐるからである。これは其の國民に對しては謙讓どころか却つて立派な誇りである。「大革命」を成しとげなければならぬから、露西亞は總ての戰爭より退かねばならない。

「殘酷な壓迫から人民を放つべき千九百五年の革命は正に露亞西に起らねばならぬ――今起つてゐる。」

露西亞は何故選ばれたる國民の役を演じなければならぬか。それは新しい革命は何よりも先づ「大きい惡魔」卽ち僅か數千の富豪の利益の爲めの土地の專有や、數百萬人の殘酷な奴隷制度[16]を改革せねばならぬからである。そして露西亞の國民は、他の何れの國民にも優つてこの不公平を意識してゐるのである。[17]

總ての國民の中で露國民は最も眞實の基督教に浸されてゐて、今後の革命は、和合と愛の法則を、基督の御名によりて、實現すべきものである。そして此の愛の法則は、惡に對しての無抵抗

に18よりてのみその完成の基礎が得られるのである。此の無抵抗（私たちは無抵抗と云ふことを、トルストイ其他少數の夢想家に特有の理想鄕と誤認しやすい）は何時も露西亞の國民の本質的の性質で、今までも左樣であつた。

「權力に對しての露國民の態度は、他の歐羅巴諸國民の態度とまるで違つてゐた。彼等は權力に對して反抗しようともしなければ、それに加はらうともしない。だから從つて權力の爲に汚されることもないのである。彼等は權力は高いもので避けねばならぬと考へてゐた。傳說を見れば、露西亞人は昔、ワリアーグ人に、自分たちの支配を乞ふたことが解る。大抵の露西亞人は暴力を振つたり、それに對抗したりするよりも、寧ろそれに服從するのを好んで來た。だから彼等は何時も服從して來たのである……」

奴隷的の服從とは全く違つた自爲的服從。19

「本當の基督敎徒は服從することが出來るもので、何んな暴力に對しても躊躇することなく服從するより他ない。けれども彼等はそれに順ふことは出來ない。卽ち、それを正當なことだと認めることは出來ない。」20

この條を書いて居た時に、トルストイは、この英雄的無抵抗の最も悲壯な一事實に依つて起さ

れた情緒に打たれてゐた。それは民衆が千九百五年一月二十二日聖彼得堡に於ける血腥い事件の中に表はした。武裝を解いた一團の群衆は、神父ガポンに導かれて呪ひの一聲も立てず自ら衞らうともしないで銃殺されたのである。

永年の間、セクタテェルと呼ばれる舊信徒等は露國に於て迫害を物ともせず國家に對して頑强に不從順であつた。22 そして正當な權勢を承認する事を拒んでゐたのである。日露戰爭の不條理と共にこの精神狀態は、些の困難もなく田野の民衆の間に擴まつた。兵役拒絕は一層盛になり、殘忍に拘束される程、叛逆は心の底に高まつて行つた。且又地方の州は、全種族を通じてトルストイを知らず、國家に對する從順に向つて絕對的受動的の拒絕を實際に示してゐた。千八百九十八年後の高架索のドウホボル派、22 千九百五年頃のグウリイのヂョルヂアン族、これ等の運動に對してトルストイは餘り影響もしなかつた。で彼の著作の興味は、革命の一味である文士の說——ゴールキイの如き23——があつたにも拘はらず、實に舊露國人の聲で有つたと云ふ事に歸する。

生命を賭しても、トルストイの宣言してゐた主義24を實行する人々に對して彼の保持する態度は、極端な謙遜と尊嚴とであつた。ドウホボル派、グウリイ族、我儘な兵士に對して彼は決して自ら敎訓的な態度に出でなかつた。

「如何なる苦難にも堪へない人は、その苦難を堪ふる人に何事も教へる事は出來ぬ。」[25]

彼は自分の言葉や自分の作物のために苦を受けた人々に對して、寛恕を乞ふてゐる。[26] 彼は何人にも兵役を拒むことを勸めはしなかつた。決心だけは其の人たちに任せねばならぬ。彼は思ひ煩つてゐる人に逢つた時は、「何時もそれが道德的に不可能でなければ、兵役に服せよ。」と忠告した。思ひ煩つてゐるのは、まだ成熟してゐないからであつて、また「僞善者や背敎者が一人多くなるよりは、兵士が一人多くなつた方が增しである。斯んな僞善者や、背敎者は、自分に出來ないことを仕ようと思つてゐる人たちである。」[27] 彼は逃走兵のゴンチヤレンコの決斷を信じなかつた。彼は「この若者が、神の愛でなく、自愛と虛僞の名との爲に引きづられてゐはしないかと心配した。」彼はドウホボルに書いた——彼等は高慢や、人間の尊敬のために、從順を何時までも拒絕してはならぬ。けれども「若し左樣することが出來るなら、其の弱い女や子供を助けることを誰も非難しはすまい。」彼等は「內部に基督の靈が宿る時だけ」固持すべきである。「さうすれば苦しむことは幸福であらうから。」[28] 彼は何時も迫害される人たちに「何んな事を犧牲にしても迫害する人たちと親しくあること」[29] を願つた。彼は或る友人に與へた手紙に、人間はヘロデをさへ愛しなければならぬと書いてゐる。

君は『ヘロデを愛することは人間には出來ないことだ』と云ふが、私はその意味が解らない。私は(君も同樣に)彼をも愛さなくてはならぬと思つてゐる。私は(君も同樣に)若し自分が彼を愛しないなら、自分が苦しく、自分の內部に生命がないと云ふことを知る。」[30]

この純潔な神聖、この愛の不退轉の熱情は、「汝自身の如く、汝の隣人を愛せよ」と云ふ福音書の中の言葉にさへ滿足出來なかつた。彼は此の言葉の中にさへ、利己主義の影を見たのである。[31] 或る少數の人たちが云つてゐるやうに、此の愛は餘り大きすぎて、また總ての人間の利己心から離れてゐるから、空虛になつてゐる。けれどもトルストイほど「抽象的愛」を疑つた人もあるまい。

「現代の一番大きい罪業は、抽象的の人間の愛、遠く離れた處の何處かにゐる人たちに對する非人格的の愛である……逢ふた事すらない、未知の人を愛するのは易いことである。何物も犧牲にする必要はない。だのにさうしながら人は自分で悅んでゐる！ 良心が愚弄されてゐるのだ——いや、隣人を愛さなくてはならない——一緒に住む人、人を惱ます者を愛しなくてはならない。」[32]

トルストイの作品を取扱つた論文には大抵彼の信仰と哲學が獨創的でないことが書てあるが、

それは本當である。これらの思想の美しさは、新しい流行と見るには、餘り永遠的なものである……或る人たちはその思想が餘り理想鄕的の性質を持つてゐることを責めるが、これもまた本當である。理想鄕的であるに違ひない。新約全書と同じやうに理想鄕的である。豫言者は理想鄕の人である。彼は現世に生きながら早や永遠の生命に生きてゐるのである。そして我々は、斯んな豫言者が我々の間に生れるのを許されたこと、生きた豫言者を見得たこと、我々の持つ最大な藝術家がこの輝く光の冠を頭に頂いたこと――この點に一つの完敎を加へたい、一つの新しい哲學を加へたりするより、一層世界にとつて獨創的で、一層大切な事實があると思ふ。この偉大な靈の奇蹟、憎惡の血に染まつた世紀と人間のまん中に立つ同胞愛の化身を見ないものは盲者と云はなければなるまい。

1　ル・タン紙、千九百二年十一月二日。

2　トルストイは此の書を自分の大切な作の一つに數へてゐる。

自分は「『一日一言集』を大切なものと考へて滿足してゐる。」（千九百九年七月二十七日――八月九日、ジヤン・スチカ宛の手紙。）

3　これらは大抵トルストイが死んでから發行された。ピアンストック氏はその佛蘭西譯を出したが、その多くの目錄の中の主なるものは、「フョードル・クズミッチ老人の遺稿日記」「神父セルゲイ」「ハヂョムラド」「惡魔」「生ける屍」（六幕十二場）「贋の手紙」「アレキシスの壺公」「痴人の日記」「闇に輝く光」（五幕）「凡ての性質はそれから來る」（通俗小說）その他優れた話の一部、「舞踏會の後」「私が夢に見たもの」「ホディインカ」など。けれども根本的の作物はまだ發行されもせず、また今後も暫らくは發行されないことであらう。それはトルストイの「日記」である。それには高架索時代から死ぬる前日まで、即ち四十年の彼の生活が描かれてゐる。そしてまた同時にこの「日記」は偉大な人が書いた最も嚴格な懺悔になつてゐる。

4　この書の露西亞名は、「唯一のもの必要なり。」（聖路加十一章四十二節。）

5　神聖宗敎會議は千九百一年二月二十二日にトルストイを破門した。それは「復活」の中のミサと聖餐を描いた一章が原因になつたのであるが、不幸にも此の章は佛蘭西譯では拔いてある。

6　土地の國有について。（「大なる罪惡」參照千九百五年）

7　舊モスコウの純露西亞人にはフイン族の血が混つてゐる。そしてスラヴの血を持つ大露西亞人の中では、肉體的に云つて、餘り貴族的でない型である。（ルロア、ボワリウ氏の話、千九百十年十二月十五日、ヴユ・デ・デウ・モンド。）

8　「世界の終末」(千九百五年――六年)

米紙宛てのトルストイの電報參照、「ゼムストヴォは專制權力の制限と、代議政府の設立とを熱望してゐる。その結果は、成功不成功に拘らず、必ず社會の眞の改善の停滯を來すであらう。政治的の運動は、外部の方便によつて、斯んな悲しむべき改造の幻影を生じて、本當の進歩を遮る。それは佛蘭西、英國、米國などの立憲國の列を見ても解ることだ。」(「露西亞に於ける社會運動」ピアンストック氏は「大なる罪惡」の序文にこの文を紹介してゐる。)トルストイは自分に「國民讀書普及委員會」の一人になるやうに頼んだ或る婦人に對して送つた長い面白い手紙の中に、改進黨員に對する他の異議を認めてゐる。人民は何時も瞞される方で恐ろしまぎれに專制の加擔者となるのだ。彼等が政治に加擔することは、自由主義者に道德的の權力を與へて、妥協させるやうにするつもりである。彼等は此の妥協の爲に早速權力の道具になつてしまふ。アレキサンドル二世は、總ての自由主義者は金の爲でなく、名譽のために自分を賣らうとしてゐる、と云つた。アレキサンドル三世は、何の危險にも逢はないで、父の改造を絶滅し得た。「自由主義者たちは小さい聲でこれは面白くない事だと呟き合ふが、彼等は其の癖、相變らず法廷に出で、政治に參與し、新聞紙を出してゐる。彼等は其の新聞に、許可されてゐることは諷刺するが、禁止されてゐることは默つてゐる。そして他の人たちが吹き込んだものを、總て自分も吹き込んでゐる。」彼等はニコラス二世の世でも同じことをした。此の無智な、理解のない若者が人民の代表者に對して、無遠慮に、不完全に答へる時に、改進主義者は反抗するであらうか。否、決してしない……若い皇帝に對して彼等は、卑法な追從の辭をいろ〳〵な方面から捧げるのである。(「不刊行書信」二百八十三――三百六頁。)

9　「戰爭と革命」

「復活」のマースロヴの元老院に於ける控訴の裁判の時に、最も烈しく修正案に抗辯した人は、唯物論者のダーウイン主義者であつた。それは彼としては、ネフリエドフが娼婦などと結婚すると云ふのを心中驚かざるを得なかつたからである。總ての義務や、一層進歩した宗教的の感情の現れは、彼に取りて人格的の侮辱と云ふ結果になるのである。(一、三百五十九頁。)

10　この種の型の例として「復活」の革命黨の主謀者、ノヴォドヴォロフをあげることが出來る。彼の過分の虚榮心や、利己心は、偉大なる理智を無効にしてしまふ。何の想像もなく、「疑惑を起こす道德的な、審美的な性質を全然無くしてしまふ。」コルケルは彼の足跡を影のやうに追つてゐる。彼は恥辱と復讐の希望を以つて、革命家になつた勞働者である。彼は憚らぬながら科學の熱心な信仰者で、狂信的の反對論者でまた修行者であつた。

「再び三つの死」または、「神と人」(千九百六年「革命主義」と云ふ名で發行された佛譯の中にある。)の

中に革命的熟時代の例が二つ三つある。ロマーネと其の友達がそれだ。彼等は在來のテロリストを輕蔑して、工業家を百姓に變へることによりて、其の目的を科學的に果たさうとしてゐる人たちである。

11　日本人阿部磯雄氏宛の手紙、千九百四年末、(「不刊行通信」)

12　テネロモのLes paroles vivantes de L. N. Tolstoy の中の「社會主義」の章。

13　同上。

14　ポール・ボアイエ氏との會話(ル・タン紙、千九百二年十一月四日。)

15　「世界の終末。」

16　「殘忍な奴隷制度はこの地上から追拂はなければならぬ。何故と云ふに一人の主人の奴隷は一人の奴隷ですむが、土地の權利を奪はれた人たちは、全世界の奴隷であるから。」(「世界の終末」第七章。)

17　事實露西亞は特別の地位にあつた。たとひトルストイが過つて、露西亞から判斷して歐羅巴全體を一つに見たとしても、我々は彼が自分の手近なものゝ苦痛の最も強く感じたと云ふ事實を不思議がつてはならない。「大なる罪惡」の中で彼がツーラの路で百姓と交した話を見るがよい。百姓たちは土地のないために麵麭を得ることが出來ないのだが、それでも土地が何時かは自分たちのものになると考へてゐる。露西亞人の中の八割は農民であるが、一億人の者は地主の土地專有のお蔭で餓死しつゝある。誰かゞ彼等を助

けようと彼等の許に行つたり、新聞紙の自由や、教會と國家の分離や、國會議員のことについて意見を主張する時には、それが早や彼等を嘲弄したことになつてゐる。勞働時間は一日八時間だと主張してさへ彼等を嘲弄したことになつてゐる。

「民衆の集まる狀態を改造する方法を、至る處で搜してゐる人は、芝居を見に行くことを聯想させる。一人の隱れた役者と、見物人が皆見て居り、他の役者もそれを明らかに見てゐる時に、それを見ない風を裝つて、見物人の心を他に導かうとつとめてゐるやうなものである。」

勞働者に土地を戻してやるより他に彼等を助ける方法はあるまい。トルストイは土地問題の解答として、ヘンリー・ジョージの主張と、その地價單稅の企てを褒めた。それは彼の經濟學的の福音であつた。彼はよくそれを味はつた。よくそれに同化されてゐたので。彼の作物の中には、ヘンリー・ジョージの文句が盛に出てゐる。

18　「惡に對する無抵抗は、一つの建築の要石である。無抵抗を誤解して、相互扶助の法則を許さうとするのは、丁度中央の要石を固めないで、圓天井を造るやうなものである。」(「世界の終末」)

19　彼が千九百年に或る友人に宛てゝ出した手紙(「不刊行通信」三百十二頁)の中に、無抵抗主義の誤解を喫いてゐる。「人は、『惡に抗するに惡を以つてする勿れ』と『惡に抗する勿れ』

即ち、『惡に平氣であれ』と全同じ樣に考へてゐる……だのに却つて、惡に對する爭ひは基督敎の唯一つの目的であつて、また同時に、惡に對する無抵抗の戒めは、爭ひの一番有効な方法として許されてゐるのである。」

20 「世界の終末。」

21 トルストイは、「復活」の終りと、「再び三つの死」の中とに、セクタテールの二つのタイプを描いてゐる。

22 ドウホボルは千八百八十五年頃露西亞から高架索に追放された一派。

23 トルストイがゼムストウオ運動を攻擊した後で、ゴルキーは他の不滿な人たちの代表者となつて斯う書いてゐる。「彼は自分の奴隷になつた。國民の聲を聞かずに長く露西亞を離れ、露西亞を超越して、高い處を飛んでゐる。

24 迫害されなかつたのは、彼に取つて苦痛であつた。彼は殉敎者を憧憬してゐた。けれどもそれを滿足させないやうに政府は巧みに注意してゐた。

「害をする者があるとすれば、それは自分なのだが、政府は自分を許しておいて、周圍の友人を迫害する。實際自分は迫害される價値がないのだ。そして自分はその事を恥ぢてゐる。」(テネロモ宛の手紙、一千八百九十二年「不刊行通信」百八十四頁。)

「實際自分は迫害される價値がないのだ。自分は斯うして、肉體の苦痛で眞理を證明することさへ出來ないので死んでしまふのだらうか。」(テネロモ宛の手紙、千八百九十二年五月十六日、「不刊行通信」百八十六頁。)

「自由で思ひ通りになるのは苦しいことだ」(テネロモ宛、千八百九十四年六月一日、「不刊行書信」百八十八頁。)彼がそんな事をされ、何もなかつたことは、神のみが知つてゐよう。彼は皇帝を辱しめ、國家を非難した。「人々が生命も、自由も、理性も、何もかも犧牲にしてしまふあの怖ろしい呪物」を非難した。(「世界終末」)「戰爭と革命」の中に露西亞史を示す撮要を見よ。まるで怪物の陳列である。「狂人の怖ろしいイワン王、酒飲みのピーター一世、文盲の料理人カタリン一世、亂行者エリサベス、放蕩者ポール、親殺しアレキサンダー一世(トルストイが心窃かに愛してゐた唯一人の人)無學で殘忍なニコラス一世、善人と云ふより惡人に近い頑固なアレキサンダー二世、無學で殘忍な評判の馬鹿者アレキサンダー三世、酒落た家來と共にゐて、何も知らないのに驃騎兵の青年士官であるニコラス二世。

25 逃亡兵、ゴンチヤレンコ宛の手紙、千九百三年一月十九日、(「不刊行通信」二百六十四頁。)

26 或る人宛の手紙、千九百年「不刊行通信」三一八——九頁。)

27 ゴンチヤレンコ宛、千九百五年二月十二日、(同上、二百六十五頁。)

28 高架索のドウホボル宛、千八百九十七年、(同上、二百四十頁。)

29 ゴンチヤレンコ宛、千九百五年一月十九日、(同上、二百六十四頁。)

30 或る人宛、千九百一年十一月、(同上、三百二十六頁。)

31 「丁度空氣の機械の響のやうなものであつて、我々が人間の精神から吸ひ出さうと努める利己主義の息は、そのためにまたは入るのである。」彼は原書が誤解されてゐることゝ、第二の戒めの眞意は「彼自身(神の如く)の如く、汝の隣人を愛せよ、」といふのであることを證明したと思つた。(テネロモとの對話。)

32 テネロモとの會話。

第十七章

老年

くつきりとした皺が彼の顏に刻まれた。彼は其の皺によりて人々の記憶に殘らうとする。二本の曲つた皺がある廣い額、白い荆棘のやうな眉毛、ディジョンのモーゼを思はせる族長のやうな顎髯、彼は晩年になるに從つて、彼の相貌は一層穩に、一層優しくなつた。其處には病と悲しみと愛に溢れた親切の跡がある。二十代のある動物的な殘忍さと、セバストーポリの士官としての高慢な剛情さと比べて、何と云ふ變り方であらう。けれども澄んだ眼差には相變らず深刻な影がある。自分を詐らうとせず、何物からも詐られない誠實な影がある。

トルストイは死に先だつこと九年、千九百一年四月十七日に、神聖宗教會議に與へた答へに斯

う云つてゐる。

「私は平和と悦びの中に生きることを、私の信仰に負うてゐる。それからまた、平和と悦びの中に、死に行くことも、信仰に負つてゐる。」

私はこの言葉で昔の諺を思ひ出す、「誰でも死なねば幸福とは云はれない。」彼が誇つてゐた、この平和と悦びは、何時までも彼の所有であつたであらうか。

千九百五年の「大革命」の希望は消えた。待ちうけてゐた光は未だ昇らないのに、眞つ黒い暗が押しかぶさつて來た。昂奮した革命家は失望した。今までの正しからざる事は、少しも改められなかつた。困窮は增すばかりであつた。トルストイは千九百六年に早や、スラヴ民族の歴史的の天職に對して疑ひを抱いてゐた。不撓の信仰の抱く彼はこの使命をスラヴ民族以外の民衆に期待しはじめた。彼は「偉大でもあり、賢こくもある支那の國民」を思つたり、「西方の人たちが永久に失つた自由を、東方の人が恢復する使命を持つてゐる」のではないかと思つたりした。そして支那が亞細亞人種の先頭に立つて、永遠の法則であるところの道教に導かれて、人類を改進するのではないかと思つたりした。[1]

けれども彼の希望は直ぐに裏切られてしまつた。丁度日本が歐羅巴を眞似る爲に、[2] 前に先蹤

を開いてゐたやうに、老子と孔子を持つ支那は、其の過去の知識を失なひつゝあつたのである。迫害されたドウホボルは其後カナダに移住して、其の地でトルストイに非難されながら、財産制度に戻つた。[3] グウリイ族は國家の羈絆を脱すると直に彼等と異なつた思想を持つ人たちの剿滅を始めた。露西亞の軍隊は召集されて、總ては元の通りの秩序に歸つた。「その頃に至るまで、人間が持つ一番美しい聖書を自分の祖國としてゐる」[4] 猶太人に至るまでも、虚僞の國家主義的運動なるシオニズムの惡疫に罹らない譯に行かなかつたのである。——あの「現代の歐羅巴主義の肉の肉たる根本でもあり、其の佝僂の幼兒でもあるシオニズムに襲はれない譯には行かなかつたのである。」[5]

トルストイは悲しんだが、失望はしなかつた。彼は神を信じ、未來を信じてゐた。

「若し一時に一つの森を拵らへることが出來るなら、立派なものだが、そんな事は不幸にして出來ないことである。種子が萌えて、枝が出て、葉が出て、幹が伸びるまで待たねばならぬ。」[6]

森を拵へるには澤山の木が必要であるのに、トルストイは一人であつた。壯嚴に孤獨を守つてゐた。彼は全世界から手紙を受け取つた。彼は回々教國から、支那から、日本から、「復活」が飜譯されて、「民衆へ土地の還附」に就いての彼の意見が擴がつてゐる日本から手紙を受け取つた。[7]

亞米利加の新聞記者は彼に面會を乞ふた。佛蘭西人は、國家と云ふものと切り離して藝術や教會に對する彼の意見を聞かうとした。8

けれども彼は三百人の弟子を持つてゐもしなければ、自分でもそれを知つてゐた。また事實彼は弟子を努めて作らうとはしなかつた。彼はトルストイ主義の團體を結ばうとした友人の企てを斷つた位である。

「吾々はお互を訪ね合ふべきではない。神を訪ねなければならないのである……『一緒にした方が容易だ』と君たちは云ふ。何を。勞働したり、收獲をするにはその方が容易だらう。けれども神を訪ねるのは――一人になつて始めて出來ることである……世の中は一つの大きな殿堂のやうなものだ。その眞ん中に高い處から光が差し込んでゐる。皆が一緒になる爲には、その光に向はなければならぬ。其處で吾々が方々から一緒に集まつて、初めて豫期しなかつた集團が出來るのである。其處にこそ悦びは見出されるのである。」9

殿堂の圓頂閣から差し込む光の下に、何んなに多くの人々が集まつたであらう。けれどもそれは何でもないことである。神と一緒でありさへすれば、微々たる孤獨の人でも充分なのである。

「他の物に火をつけ得るものは、唯それ自身に燃えつゝあるものに限られてゐるやうに、他の

人たちに信仰と其の生命を傳へ、眞理を擴め得るものは、眞の信仰と生命を持つた人に限られてゐるのである。」10

とは云へ、此の孤立したトルストイの信仰は、何れだけ彼の幸福を固め得たであらう。晩年に於ける彼が、何れほどゲーテの從容たる自適と離れたであらう。恰も彼自身が其の自適を避け怖れてゐたと思はれる程である。

「出來る事なら、人間は自分の不滿を神に感謝すべきである。何れほど幸福であらう。それと生活の不調和は生活の符號である。小さきものから大なるものへ、惡るきものから善き物へ、この活動こそ生活なのである。この不調和こそ善きもの〻狀態である。穩やかに自分から滿足してゐるのは惡である。」11

彼は次のやうな小說の題材を想起した。――それにはレウインや、ピエル・ベズーホフのやうな人の不斷の不滿が、彼の心の中にも潛んでゐたことを語つてゐる。

「私は斯んな人のことを思ふ。始めは革命的な周圍に圍まれて育つて革命主義者であつたが、後に平民主義者になり、社會主義者になり、次に正教信徒になつて、アトスの山の僧になり、それからまた無神論者になつて、一家の善良な父となり、それから最後にドウホボルになる人のこ

とを思ふ。彼は總ての事を始めて、總ての事を棄てる。人は彼を嘲笑する。彼は何事も成し遂げなかつた。そして人に忘れられて彼は或る病院で死ぬる。自分の生涯の無駄だつた事を思ひながら死ぬる。けれども彼は一人の聖者である。」12

これほど信仰に滿ちてゐた彼が、また疑ひを持つてゐたのであらうか。それを誰が知つてゐよう。靈も肉も年を取つて尙ほ丈夫な人に取つて、何うして思想が一階段に止まつてゐよう。生活は進展しなければならぬ。

「活動、これが生活である。」13

彼の最後の數年の間に、いろ〳〵のものが變化しなければならなかつた。彼が革命主義者に對して抱く思想は變らなかつたゞらうか。惡に對する無抵抗の考へも少しは變りはしなかつただらうか。「復活」の中の、ネフリユドフが罰せられた政治論者に對する關係は、彼の露西亞の革命黨に對する思想を變へてゐる。

「彼は其の時に至るまで、彼等の殘忍や、犯罪の假託や、暴行や、滿足や、忍び難い虛榮心に對して一種の反感を抱いてゐたのだが、一層精細に彼等を觀察して、彼等が何んなに官吏に取扱はれてゐるかを知つた時に、彼は他に方法のないのを感じた。」

そして彼は、彼等の中に含まれた高尙な義務の觀念を褒めた。

千九百年以來、革命の氣分が漲つて來た。理智から生れた其の思想は、民衆の間に擴がつて、多くの貧民の間に默々の中に浸み込んだ。其の示威運動の列の前頭は、ヤースナヤ・ポリアーナのトルストイの窓の下を通つた。それを眺めて彼が何んなに悲哀と困惑を感じたかは、メルキユール・ド・フランス1　の中にある三つの記事を見れば明らかである。この話はトルストイが書いた最後の數頁の中にあつた。何時あの單純で敬虔な巡禮が、ツーラの田舍を通つたであらう。それが今は飢え死しかけた漂浪の民の侵入になつたのである。彼等は毎日彼の處に來た。トルストイは彼等と話してみて、彼等が嫌惡の念に燃えてゐるのに驚いた。最早や彼等は富める者を、これまでの樣に、「施與物を與へて靈を救つてくれる人とは思はず、勞働者の血を吸ふ泥棒」と思つてゐた。其の大多數は教育のある者であつて、生命の破滅に陷つて、絕望してゐる人たちであつた。人は絕望すれば何んな事でもする。

「フン族や、ワンダル族が昔遣つた事を、文明の今の世に行はうとする野蠻人が威張つて歩くのは、沙漠や森の中ではなくて、都會の陋屋や、大道の上である。」

斯うヘンリー・ジョージが云つた。トルストイもそれに付いて云ふ。

「早やワンダル族は露西亞で用意をしてゐる。露西亞の宗教的觀念の深い國民の間では、彼等は實に恐ろしい。歐羅巴の民衆の中に見事に發達したあの「止め手綱」即ち便宜と輿論は、吾々の間では少しも知られてゐないからである。」

トルストイは何度も、これらの叛徒たちから手紙を受け取つた。その手紙には彼の理想の惡に封する無抵抗は認められず、支配者と富める者が民衆に對して行つた惡事は、「復讐、復讐、復讐、」の聲のみで答へることが出來ると書いてあつた。それでもトルストイは彼等を非難したであらうか。それは解らない。けれども數日後、彼の村で、村人がその羊やサモワルを、殘忍な官吏の眼の前で奪はれて泣いてゐるのを見た時に、彼もその盜賊に對して復讐を叫ばざるを得なかつた。「大臣や、その下の官吏たちは、ウオトカの賣買や、人殺しを教へたり、流刑監獄や、徒刑場や、絞首罪に陷れたり、そんな事ばかりしてゐる。また大抵の人たちは、彼等が貧民から盜んだサモワルや、羊や、犢や、麻布は、人を害するウオトカを蒸溜すべき第一の資本となり、その强奪品は殺人の武器を製造し、監獄や徒刑場を立て、ことに彼等の助手や、彼等自身に役目をあてがふのに最上の利得となると云ふことを、よく信じてゐるのである。」トルストイはこの種の人たちに對して復讐を叫んだ。

愛の宣傳と、其の支配を期待しながら生活を送つた後で、斯んな感傷的な現象の中で死なゝければならず、それを悲しんでゐることを感じてゐると云ふことは、哀れむべき事である。トルストイの如き眞の良心を持つ人に取つて、自分の生活と、自分の信仰が、まるで異つてゐると云ふことを意識するのは、一層辛いことであつたどらう。

我々は此處で彼の晩年、最後の三十年の一番悲慘な點に觸れる。我々は敬虔で、畏懼的な手を以つてのみこれに觸れることが出來るのである。何故と云ふに、トルストイがその秘密を嚴守したこの悲しみは、死んだ人のみでなく、他の生ける人——彼が愛した人、彼を愛してゐる他の人々にも屬してゐるからである。

彼は自分の最も親しい者——自分の妻や子等に、其の信仰を傳へることをしなかつた。我々はトルストイの生活を助け、藝術を生み出すのを助けた夫人が、自分には解らぬ道德上の信仰で、トルストイが藝術を否定したのをひどく心配したことを見て來た。トルストイも自分が周圍の最も親しい人たちに誤解されてゐるのを彼等に劣らず苦に病んだ。

彼はテネロモに斯う書いた。

「夫婦は離れてゐるべきでなく、一つであるべきだと云ふことは、私もよく知つてゐる……私は自分に生活の悲しみを超越さしてくれるあの宗教的な良心を、自分の妻に少しでもいゝから分け與へ度いものだと、始終思つてゐる。それは私を通じてゞはなく、神を通じてゞあることは云ふまでもないことである。尤もこの良心は女にはとても持ちがたいものではあるけれど。」15

けれどもこの希望は容れられなかつたらしい。トルストイ伯爵夫人は、自分と「一つ」であるべき偉大な魂の善良で、公明で、ヒロイックで、純潔な心を持つてゐるのを悦びまた褒めた。彼女は「彼が群集のまつ先に立つて進みつゝ人を導いてゐる」16のを見た。神聖宗教會議が彼を破門した時にも、彼女は彼を護り、彼と共に危險を忍ばうとした。けれども彼女には、自分の信じないものを信ずるやうな風に裝ふことは出來なかつた。トルストイもまたそれを裝はせるべくあまりに眞面目な人であつた。彼は信仰と愛を否定することよりも以上に、それを裝ふことを憎んでゐたのだ。17だのに何うして、信じない彼女の生活を變へさせ、彼女とその子たちの運命を犠牲にするやうなことが出來よう。

子供等に對しては一層折合ひが惡るかつた。家族と共にあるトルストイをヤースナヤ・ポリアーナに訪れたルロア・ボーリウ氏は云ふ、「食事中には父が話をしてゐるに、息子たちは不信の色

を見せて退屈を表してゐた。」18彼の信仰の感化を受けたのは三人の娘に過ぎなかつた。その中のマリーは死んだ。彼は家庭で道德的に孤立してゐた。「末の娘と、彼の醫者の他には、誰も彼を理解しなかつた。」19

彼はこの思想の孤獨に苦しみ、地上の係累に煩はされた。彼は世界の各方面から集まる五月蠅い來訪客や、亞米利加人や、妄想者の來訪に苦しめられた。それからまた家庭生活が餘儀なく彼をして味はせる「贅澤」に苦しめられた。きちんとした家具のある、單純な彼の家、寢臺、粗末な椅子、紙を貼らぬ壁のある小さい部屋を訪問した人の言葉によれば、それは愼しみ深い贅澤であつた。けれどもこの安慰も彼の心を重くして、彼は始終後悔に煩はされた。Mercure de France で出版された第二の話で彼は其の周圍の貧乏な有樣と、自分の家庭の贅澤を苦々しげに比べてゐる。

彼は千九百三年に書いた。

「或る人たちが私の活動力を何んなに有意義に見ても、私の生活と、私の主張が一致してゐないかぎり、それはあまり價値のあるものではない。」20

何うして彼はこの一致を實現しなかつたのだらう。彼が自分の家族を世間から切離すことが出來なければ、自分が其の家族から去ればいゝではないか。さうすれば彼を非難する人たちが何時

も嘲笑する僞善の名は免れることが出來たであらう。トルストイが其の敵に示す態度は、敵のために餘りに好都合で、敵はそれをトルストイの主張を否定するものと認め、彼を僞善として非難し、嘲笑してゐたのである。

彼もそれに就いては頭を惱ましてゐた。ずつと昔から彼は心を定めてゐたのだ。最近彼の立派な手紙が一つ發見されて公表されたが、21 それは千八百九十七年六月八日に彼の妻に宛てゝ出されたものである。その手紙を全部掲げねばならぬ。此の手紙に優つて愛しながらも苦しんでゐる彼の心の秘密を鮮に示してゐるものはない。

「愛するソフィー。私は長い間自分の信仰と實生活の不調和の爲に惱まされて來た。私はお前の生活や、習慣を無理に變へさせようとも思はないし、またお前を棄て去る氣にもなれなかつた。それは家出の爲にまた幼い子供たちから、私が與へ得るかも知れない感化を奪つてしまひはしないかと思つたからである。それとも一つは皆んなが大變悲しがるだらうと思つたからである。けれども最う私は今まで十六年の間22 生きて來たやうに生きて行く譯には行かない。私は今までお前と爭つたり、お前に氣を揉ませたり、私を圍んでゐて私に靡れてゐる感化と誘惑に自分と云ふものを屈從さして生活して來たのだが、私は最う長い間、自分が遣つて見たいと思つてゐた事を

遣り得るやうになつたつもりだ。卽ち私は此の家を出て行くことが出來るやうになつたつもりだ……丁度あの印度人が六十になると森に去るやうに。丁度大抵の宗教的の老人が晩年になると冗談や、洒落や、無駄話や、テニスを止めて、其の生命を神に捧げようとするやうに。七十になつた私の靈は頻りに穩やかな寂しさを望んでゐる。たゞ完全な調和だと云ふことは出來ないにしても、少くも私の全生命と良心の間にある不斷の不調和ではないと思ふ。私が公然家を去つたなら多分皆んなの懇願と爭ひになるであらう。そして私は皆んなの意見に從はなければならなくなつて成し遂げねばならぬ事にも拘らず、成し遂げることが出來ないで終ふであらう。若し私の行爲が惡るかつたら、何うかお願ひだから、私を許してお呉れ。そして誰よりもお前、ソフィーよ——私を行かしてお呉れ。私を捜さないでお呉れ。私を惡く思はないやうに。そして私を責めないやうに。私はお前に不快な感じを抱いてゐる故に家を去るのでは決してない……私は、お前が私と共に考へたり見たりすることが、決して出來ないと云ふことをよく知つてゐる。だからお前は今までの生活を變へることも出來なければ、お前の理解し得ない物に對して犧牲になることも出來ないのである。私はいさゝかたりともお前を責めないどころか、却つてお前と共に過した三十五年の長い生涯を、愛と感謝を以つて思ひ出してゐるくらひだ。ことに私は、お前が母として

見事に凛々しく自分の使命を果たした前半の生涯を思ひ出す。お前は自分が與へ得るものを世界と私に與へたのだ。お前は母として深い愛を捧げ、深い犠牲を捧げた……けれども我々の生活の後半期の十五年間には二人の道が互に離れて來た。私は自分が罪を持つ爲だとは考へられない。私は自分が變つてゐることは知つてゐる。けれどもそれは、自分の都合でもなければ、世間の爲でもなく、仕方がないから左様なつたのである。私は私に從はなかつたと云つてお前を非難しはしない。私はお前に感謝する。私は何時までもお前が私に與へたものを愛を以つて思ひ出すだらう。……左様なら、愛するソフィー。私はお前を愛してゐる。」

「私がお前を棄て去つたこと……」彼は彼女を棄て去りはしなかつたのだ。憐れな手紙。彼は決心を實現する爲には、それを書きさへすればいゝと思つてゐたのである、……書いて仕舞つた時には、早や彼の決心は消えてゐたのだ。「私が公然家を去つたなら、多分皆んなの懇願と爭になるであらう。そして私は皆んなの意見に從はなければならなくなり……」懇願の必要も爭ひの必要も其處にはなかつた。彼は一瞬間の後に自分が棄て去らうと思つた人たちを見るだけで充分であつた。彼はとても皆んなを棄て去ることは出來ない、決して出來ないと覺つた。彼はこの手紙をポケットに入れ、斯う書いたまゝ道具の中に入れてしまつた。

「私が死んだらこれを妻のソフィー。アンドレイウナに渡してくれ。」

彼が家出を考へたのはこれが最後であつた。彼の力はそれだけであつたのだらうか。彼は自分の愛を神の爲に犠牲にすることは出來なかつたゞらうか。基督敎の記錄の中には彼よりも强い心を持つた聖徒が澤山あるが、彼等は自分の愛や他の人の愛を踏み躙つて進んだ。……それは確である。これを何う考へたらいゝだらう。彼は決して彼等に比べ得べき人ではなかつた。彼は弱い人であつた。彼は人間であつた。そして我々は其の點を愛するのである。

これより十五年前に彼は懊惱に滿ちた或る頁に自分で斯う訊ねてゐる。

「レオ・トルストイよ、ではお前はお前の主張する說に從つて生きてゐるか。」

彼は當惑して答へる。

「私は愧死しようとしてゐる。私は罪の人だ。輕蔑すべき人だ。……けれども私の昔の生活と今の生活を比べてみてくれ。さうすれば私が神の法則に從つて生きようと焦つてゐることが解るだらう。私は仕なければならぬ事の千分の一も仕なかつた。そして今何を仕ていゝかに迷つてゐる、けれども私が仕なかつたのは、仕る氣がなかつたのではなくて、出來なかつたのだ……私を非難するのは、構はないが、私が踏んでゐる道だけは非難してくれるな。私が自分の家に歸る路

をよく心得てゐながら、醉拂ひのやうにひよろ〳〵その路を歩いてゐるとしても、それは路が惡と云ふことを示してゐるだらうか。他の路を示してくれ。でなければ本當の路まで導いてくれ。私は何時でもお前を守る。然し私に失望させてくれるな。私が悲しんでゐるのを喜んでくれるな。『見よ、あの男は家に行かうとして溝の中に落ちようとしてゐる。』と夢中になつて叫んでくれるな。悅んでくれるな。私を助け、私を支へてくれ……私を助けてくれ。我々は誰も迷ふことを恐れ、心に深い絶望を抱いてゐるのだ。そして私が其處から逃げようと一生懸命に努力してゐるのに、お前は私が迷ふのを見て同情するどころか、却つて『見よ、彼も我々と一緒に溝に落ちようとしてゐる、』[23]私を指さしながら叫んでゐる。」

死ぬる時の近づいた彼はまた繰り返してゐる。

「私は聖徒でもないし、また自分でも聖徒を以つて任じた事は一度もない。私は誘惑される人間である。自分の心に感じたり思つたりすることを皆は口に出さない人間である。それが嫌だからではなく、出來ないからだ。動もすれば誇張したり、過失を犯したりするからである。私の行爲はそれよりも一層惡くて、私は惡い習慣を持つた、非常に弱い人間、本當の神に仕へようとしながら、何時も躓いてゐる人間である。若し私が過失を犯さない人間だとすれば、私の過失は必

ず虛僞か僞善に見えるはづだ。けれども弱い人間として認められるなら、私は實際の通りに見えるであらう。私は善良なる人間、善良なる神の下僕となることを今までも、今も、專心に望んでゐる、憐れな、眞面目な人間である。」

彼は斯んなに後悔に惱みながら、彼よりも根氣の强い、一層人間的でない追從者の默つた叱責を忍んでゐたのである。[24]彼は自分の弱點と自分の不決定な心に苦しみつゝ、神の愛と家庭の愛の間を迷ひつゝ彷徨してゐたのである。彼は長い間、斯んな狀態で苦しんでゐたが、遂に絶望の發作と恐らくは死の前によく起る燃えるやうな熱との爲に、とう〳〵自分の家を飛び出してしまつた。彼は路に出て當てどもなくさ迷ひ、僧院の扉を叩いたり、またさ迷ひ出ては或る淋しい村で永久に倒れてしまつたのである。[25]彼は死につゝも、自分の爲にではなく、不幸な人たちの爲に涙を流した。そしてその涙の中で斯う云つた。

何萬の人がこの地上で苦しんでゐるのに、お前たちは何故私のことばかり考へてゐるのだ。」

軈てそれが來た。——千九百十年十一月二十日の日曜日の午前六時過ぎであつた——それが來た彼の云ふ「解脫」が來た。「死、祝福された死」が來た。

1 千九百六年十月、支那人に與へた手紙、(「不刊行通信」三百八十　頁以下。)

2 トルストイは千九百六年の手紙でこれに就いての心配をのべた。

3 「財産制度を許すために、兵役や警察の勤めを拒むのは無意味なことである。何故と云ふにこの二つの勤めによりてのみ、財産が保つて行かれるからである。この勤めをして、財産を利用する者は、總ての勤めを拒んでもまだ財産を保つ者より善い行ひをする者である。」(カナダのドウホボルへ與へた手紙、千八百九十九年「不刊行通信」三百四十八——二百六〇頁。)

4 「テネロモとの對話」の中に「聖書に恥つて、自分の頭の上で崩れる世紀や、地球の表面に來たり去つたりする民衆に目も與れなかつた贅い猶太人」に就いて、美しい頁が割かれてゐる。

5 「血にまみれた國家である近代の國家の恐怖の中に、歐洲の進歩を認めて、新しい猶太を創立しようとするのは輕蔑すべき罪惡である。」(同上。)

6 千九百五年「政治家に對する訴求。」

7 「大なる罪惡」の附錄と「被統治者の勸告」の佛蘭西譯の中に(露西亞語では「勞働者へ」と云ふ題)土地の自由の再興に關する一日本協會の訴求がある。

8 千九百六年十一月七日、ポール・サバティエへの手紙(「不刊行通信」三百七十一頁。)

9 千八百九十二年六月、及び千九百一年十二月、或る友人への手紙。

10 「戰爭と革命。」

11 或友人への手紙(「不刊行通信」三百五十四——五十五頁。)

12 多分これは「或るドウホボルの歴史」を指したのであらう。その題はトルストイの公にしなかつた作の目錄中にある。(同上)

13 「眞理を持つ總ての人たちが一緒に集まつて、或る一つの島の上に住んだとすれば、それでも生活と云へるだらうか。」(千九百一年三月、或る友人への手紙、(不刊行通信」三百二十五頁。)

14 千九百十年十二月一日。

15 千八百九十二年五月十六日、其の時のトルストイは、妻が子供の死を悲しんで泣いてゐるのを見ながら、彼女を慰めることすら出なかつた。

16 千八百八十三年一月の手紙。

17 「私は宗教を持たない故を以つて人を攻擊することは決してしないつもりだ。私は人が僞つたり、宗教を持たぬのに持つた風をする時だけ、攻擊する。」

「神の愛を僭することを止めやうではないか。それは惡惡よりも惡いことである。」(「不刊行通信」三百四

十四頁及び三百四十八頁。)

18 Revue des Deux mondes. 一九百十年十二月十五日。

19 同上。

20 或る友人への手紙、一九百三年十二月九日。

21 千九百十年十二月二十七日、フイガロ。 この手紙はトルストイが死後、女婿なる公爵オボレンスキーが伯爵夫人に渡したもの。(トルストイはこの手紙を數年前からオボレンスキーにあづけて置いたのだ。伯爵夫人家の他の手紙がこれに續いてゐるが、それは家庭の内密な問題を書いたものである。夫人はそれを讀んだ後に破つてしまつた。(トルストイの長女、タチアーナ・スホチン夫人の傳へし註。)

22 この苦しみは千八百八十一年トルストイがモスコウで社會的窮乏を發見した冬からはじまつてゐる。

23 或る友人への手紙、(アルベリン・カミンスキー氏の佛蘭西譯は「信仰の披瀝」と云ふ題で、千八百九十五年「慘酷な快樂」の中で公にされた。)

24 彼は最後の數年の間に、殊にその數ヶ月の間に、親友のウラジミル・グリゴリッチ・チェルトフの影響を受けたらしい。彼は永い間英國に住んで、自分の財産をトルストイ全集の出版のために費した人である。チェルトフはトルストイの一人の息子のレオに烈しく攻撃された。一歩も退かぬ彼の剛情は非難すれば非難出來るが、彼の絶對の信服を疑ふ者はなかつた。トルストイの行爲の中の人間味を缺いた苛酷なものは、チェルトフの忠告によりてなされたものと信じられてゐるやうだが、それは云ふまでもなく信じられないことである。(トルストイが自分の妻から自分の手紙などの一切の著作の所有權を奪つた遺言などがそれである。)彼がトルストイ自身よりも、トルストイの名譽を氣にしてゐたことは信じられることである。

25 「眞理の僞の團結」の「通信」は千九百十一年一月一日の誌上に、この出奔の面白い話を掲げてゐる。千九百十年十月廿八日(十一月十日)午前五時、トルストイは唐突にヤースナヤ・ポリアーナを去つた。醫師のマコヴエツキーも一緒だつた。チェルトフが「彼の一番親しい協力者」と叫んだ娘のアレキサンドラも彼の家出の祕密を知つてゐた。彼は其の日の午後一時にオプテイマの僧院に着いたが、これは彼が巡禮をする時によく訪ねたことのある、露西亞でも名高い聖所の一つである。彼はその夜を其處で過ごして、翌朝は死の苦しみに就いて、長い論文を書いた。十月二十九日(十一月十一日)の夜、彼は自分の妹のマリイが尼になつてゐるチアモルデイノの僧院に行つて、妹と一緒に晩餐を食べた。そして彼女に自分はオプテマで生涯を終りたいと話した。「彼が强ひて教會へ行かせられないと云ふ條件で、最も下賤な勤めをしながら」暮さうと云ふのである。彼は其の夜はチアモルデイノに眠て、翌朝、彼が住みたいと云ふ隣村

に散歩した。午後妹の處に歸つた。五時頃意外にも娘のアレキサンドラが來た。云ふまでもなく彼女は隱遁が公になつたことや、彼が出求せられてゐることなどを告げた。一同は夜中に出發した。「トルストイとアレキサンドラもマコヴェツキーはコセルスク驛へ行つた。恐らく彼等は南露西亞かまたは高架索のドウホボルの殖民地へ行かうとしたのであらう。」その途中トルストイはアスタポヴオの停車場で病に罹り、仕方なく、病床についた。そして彼は其處で死んだのである。

第十八章

エピログ

八十二年の生涯の戰ひは了つた。悲劇的で同時に光榮ある其の戰ひには總ての力と總ての罪惡と美德が加はつた。——總ての罪惡——たゞ一つ、彼が斷えず最後の隱遁所まで追窮した虛僞を除くの他は。

初じめ——亂醉した自由。嵐の夜に猛り狂ふ情熱。その暗を時々照らす眩ゆい光——愛と恍惚の危機、永劫の幻影。高架索やセバストーポリの數年、混沌とした、不安な青年時代——それから結婚早々の靜かな風。愛と藝術と自然の幸福、——「戰爭と平和。」人間の總ての地平線を抱く天才の自由な光りと、この靈魂にとつては早や過去の事物となつたそれ等の戰ひの光景。彼はそ

れらのものを支配してその主となつた。それらのものは最早や彼を滿足させなかつた。彼は丁度公爵アンドレイのやうにアウステルリッツの空に眼を仰向けて、限りない空を見てゐたのである。彼はその空に心を惹かれたのであつた。

「力の強い翼を持つた人たちを、快樂が群集の間に降らせる。彼等の翼は其處で破れる。私は丁度そんな者であつて、破れた翼で羽ばたきはしても、飛んだと思へば、直ぐ落ちてしまふ。翼を修理しなければならぬ。私は高く飛ぶであらう。神よ、私を助けたまへ。」1

これらの言葉は怖ろしい暴風雨の最中に認められたものである。彼の「懺悔」はその暴風雨の記念であり、また反響である。トルストイは地上に投げ落され、その翼を破られたことが一度だけではなかつた。けれども彼はそれを忍んだ。そして新しく飛び上つた。我々は彼がその二つの翼を擴げて、「限りなく廣い大空」を飛んでゐるのを見る。その翼の一つは理性であつて、一つは信仰である。けれども彼は、求めてゐた平和を其處に見出しはしない。天國は我々の外にあるのではなくて、却つて內部にあるのである。トルストイは彼の熱情の暴風雨を其處で吹き出した。彼は其處で脫離の使徒を認め、彼が嘗て生きるために齎したと同じ赤熱をその脫離に齎したのである。そして彼が戀人の如く焦りながら緊く抱きしめてゐたものは生活であつた。彼は「生活に狂つてゐた。」彼は「生活に醉つてゐた。」彼は醉はずにはとても生きて行かれなかつたのである。2 彼は幸福と不幸とに同時に醉ふた。死と不死に同時に醉ふた。個人生活から彼が脫離したのは、たゞ永久の生命に向つて高められた熱情の叫び聲に他ならぬのである。けれども彼の掴んだ平和彼の求めた靈の平和は、死の平和では決してなかつた。それは無限の空間に於て、引力に支配されるところの、烈しい炎の此の世の平和である。彼にありては、怒りも靜であるが、靜かなものもまた燃えてゐるのである。4 彼が處女作以來、近代の社會の虛僞に對して反抗して止まなかつた戰ひを一層强くするべき、新しい武器を、彼は信仰によりて得たのである。彼は最う小說の型の中に自分を限定するやうなことはしなくなつた。彼は總ての大きい偶像に出會つたのである。宗教、國家、科學、藝術、自由主義、社會主義、通俗教育、仁惠、平和主義の僞善5……彼はこれらのものに反抗して戰つた。

世界には時々この種の偉大な叛逆者が現れて來る。そして彼等は豫言者ヨハネのやうに、腐敗した社會を呪ふ。これらの人の中の最近のものはルソーである。ルソーは其の現代の社會を憎むことによりて、6 その嫉妬的の獨立によりて、その福音書と基督教の道德を熱心に讃美することによりて、トルストイを豫言したものと云つてよい。トルストイは彼の事を斯う云つてゐる。

「斯うした彼の言葉は私の心に泌みる。まるで私自身が書いたやうな氣がするほどだ。」7

けれども彼等二人の心には何と云ふ差別があつたことだらう。何んなにトルストイの方が純粋に基督教的であつたことだらう。何んなに謙遜が缺け何んなにパリサイの徒の高慢があつたことだらう。ジュネエヴの人の「懺悔」から來るこの高慢な響きの中には、

「悠久なる者よ、出來ることならたとへ一人でも、私は彼より善良であつたと汝に告げしめよ。」

また世界に對する斯んな侮蔑の中には、

「私は憚るところなく大聲に斷言する。私を不正直な人間だと思ふ者は何人に拘らず、其の人自身すでに抑壓せらるべき人間である。」

トルストイは其の過去の「罪」の生活の上に血の涙を流した。

「私は地獄に陥ちたやうに苦しい。私は總ての自分の過去の卑劣を想ひ出す。その想ひ出がなか〳〵私を離れない。それらは私の生活を害するものだ。人は大抵、死後に何の記憶をも殘し得ないことを悲しむ。若し記憶が斯んなものであるなら、何んなに幸福であらう。若し私たちが他界でした總ての惡事を記憶することが出來るなら、何んなに苦しい事であらう……。8」

彼も丁度、ルソーと同樣に、其の「懺悔」を書いたのはトルストイ自身ではなかつた。

「善が惡より强いことを感じた時、私は總てを語るのが自分の利益であることを知つた。」9と

ルソーが云つたやうに、トルストイはそれを企畫した後で、覺え書きを棄てゝしまつた。ペンを手から棄てゝしまつた。彼は自分が讀者の攻擊の的になるのを好まなかつたのだ。

「人々は云ふだらう——見よ、これが皆んなの有難がつた男だ。何と云ふ下らない男だ。是れでみると我々のやうな凡人の中では、下らない男になるやうに定めるのは神樣自身にかぎられてゐるのだ、と。」10

ルソーは基督教の信仰については何も知らなかつた。美しい道德的の謙遜などについては何も知らなかつた。あの老いたるトルストイに不滅の誠實を與へた人道については何も知らなかつた。ルソーの背後——シイニエ島の像のまはり——にはカルヴインの都の羅馬が見える。トルストイの背後には巡禮や、罪のない人たちが見える。彼等の淸い懺悔の涙こそは、彼の幼年時代を動かしたのである。

けれどもトルストイの晩年の三十年間には、彼とルソーに共通な世界に對する爭ひより一層多くの戰ひが見られる。それは彼の心中の二つの高い力の間に起こつた勇ましい戰——眞理と愛の戰ひであつた。

眞理――「端的に心に喰ひ入る洞察」――人を洞察するあの灰色の鋭い眼差し……眞理は彼の一番古くからの信仰であり、彼の藝術の女王であつた。

「私の作物の女主人公であり、私が心から愛し、何時も美しかつた、今も美しい、これからも美しかるべき女は、眞理である。」[11]

彼の兄の死後、その破船から彼が拾つた唯一つのものは[12] 眞理であつた。眞理こそは彼の生活の中心であり、太洋の眞ん中の岩であつた……

けれどもやがてこの怖るべき眞理は、彼にとつて物足らぬものとなつた。愛が眞理に代つたのである。彼の幼年時代の潑溂たる泉はこの愛であつた。それは「彼の靈の自然な狀態」にすぎなかつたのである。彼は千八百八十年に、道德的の危機に襲はれた時にも、決して眞理を棄てはしなかつた。彼は眞理を愛に分けて開いたのである。[13]

「精力の根本」[14] は愛である。愛は「生活の理性」である。[15] 美と共に唯一つ理性である。生活によつて熱したトルストイの本質は愛である。「戰爭と平和」や「神聖宗教會議へ與へる書」を書いた人の本質は愛である。[16]

彼が半生に書いた澤山の傑作に比類なき價値を付けたものは實にこの愛による眞理の透徹であ

る。――NEL MEZZO DEL CAMMIN（道の眞ん中で）――そして彼の現實主義をして、フローベルの現實主義と違はしめるのである。フローベルはその人物を決して愛すまいとしてゐる。何んなに偉大でも彼は FIAT LUX「光あれ」――を缺いでゐる。日の光が不充分である。心の光が缺けてゐる。トルストイの現實主義は總ての中に現れてゐる、そして彼等を彼自身の眼で見つゝも、彼等の中の最も憎むべき人物の中に愛すべきものを見てゐる。總ての人たちを一つに結びつける同胞の鎖を感ぜしめる。[17] 彼は愛によりて生命のどん底に浸み込んだのである。

けれどもこの一致を支へることは容易でなかつた。生活の樣子と、生活の苦しさが、甚だしく烈しいが爲に、愛を侮蔑してゐるやうに思はれる時もあるものだ。自分の信仰を救ふためには、それを世間より非常に高い所に置かねばならぬ。その爲にはまた、此の信仰が世間との總ての交渉を失ふと云ふ危機に瀕することもある。高尚で運命的な、眞理を見る天分を宿命によりて與へられた者は何うしたらいゝだらう。眞理を少しも顧りみることの出來ないやうな天分を與へられた者は、トルストイが、現實の怖ろしさを見た烈しい眼と、愛を望み、愛を肯定しようとして止まなかつた熱烈な心の爭ひから、その不斷の晩年の爭鬪を何んなに苦しんだか知ることは出來ない。

我々はこれらの悲劇的の爭鬪を見て來た。我々は幾度もこの二つの中の一つを見て來た。――

見ないが、憎むか。そしてまた何んなに度々藝術家、その名を恥かしめない藝術家、書かれた文句の偉大な恐ろしい力を知る藝術家が、眞理に筆を染めた時に苦悶を覺えたことであらう。[10] 此の健全で、生々した眞理、この近代の文明の虚僞の中にあつて無くてはならぬ眞理こそは、トルストイに取つては、實に呼吸する空氣のやうに思はれたのである……けれどもこの空氣は大抵の人の肺には堪へることが出來ない。文明に疲れた多くの人、または善良な心のために弱くなつてゐる多くの人は、この空氣にはとても堪えることが出來ない。それにも頓着しないで、彼等をして飽くまで、彼等を殺すこの眞理の中に飛び込まうべきであらうか。トルストイの云ふ、「愛に開いてゐる」眞理はないものだらうか。またはあのベア。ギントがその話の中で、死にかけた老母を眠らせるやうに、虚僞の慰安で人を慰めることを許すことが出來るだらうか……社會は何時もこのデイレンマに面してゐる。デイレンマ、即ち、眞理か愛かと云ふ問題に面してゐる。そして社會はこの二つを一時に犧牲にすることによりて、このデイレンマを解決してゐるのである。

トルストイは其の二つの信仰の何れをも裏切らなかつた。成熟期に於ける彼の作の愛は眞理の松明で、晩年に於ける愛は高い處に輝く光であつた。生活の上に下つても、それと混合しない惠の光である。それは「復活」の中にも見える。其處では現實が信仰を征服してゐる。けれどもそれ

は表面だけのことである。トルストイが一人の人物を見る時に、平凡なつまらぬ人物として描いても、それを一度彼が抽象的に考へると、すぐ神秘な尊さを持つて來る。[19] 彼が其の藝術に於て示した爭鬪は、彼の日常生活にも見られるが、それは一層烈しい爭鬪である。彼は愛が自分から求めるものをよく知つてはゐたが、それにも拘らず、彼は他の行動を取つた。彼は神について生活せずして、世界について生活してゐたのである。けれども愛は何處に求むべきであつたか。何うして其のいろ〳〵の姿、その矛盾した階級の差別を認めるべきであつたか。家族の愛か、人間全體の愛か……彼は死ぬるまでこの選擇を論じてゐた。

彼はその解決を何處に見出したか——私は決してそれを見出さなかつた。輕々しくその事を判斷するのは、知者にまかせようではないか。彼等はそれを發見してゐるにちがひない。彼等は眞理を持つてゐる。そして安心しながらその眞理を握つてゐる。トルストイも彼等に取つては、かゝる弱い模範とするに足らぬ感傷家にすぎなかつた。彼は決して彼等が追ひつける手本ではなかつた。彼等は充分に生きてゐない。トルストイは倨傲な選ばれたる人ではなかつた。彼は何の教會にも屬してゐなかつた。彼の言葉で云へば、彼は法律學者でもなければ、いろ〳〵の信條に從ふパリサイの徒でもなかつたのだ。彼は自由な基督教徒の中で最も高い型の人であつた。其の生涯に斷

えず遠のき行く理想に對して、一生懸命に努力した最も高い型の人であつた。2)

トルストイは思想の特權者に對しては何も言はず、何時も通常の人たちに話した――HOMINIBUS BONAE VOLUNTATATIS（良き心を持つ人たち）に話した。彼は我々の良心である。彼は我々のやうな平凡な者の心を語る。我々が我々の中に讀むことを恐れてゐること語る。彼は我々に對して驕慢な師ではない。人類より高い處に座して、自分の藝術に智慧の玉座に踏み止まつてゐる傲慢な天才ではない。彼は――その手紙の中で最も美しい、最も悅ばしい名として好んで使つた通り――「我々の兄弟」である。

千九百十一年一月

1　千八百七十九年十月　十八日の日記。その中の最も美しい處。

「翼を持たぬ體の重い人間が下界で活動してゐる。その中にはナポレオンのやうな強い男もあつて、人間に怖ろしい痕を殘す。彼は不和の種を蒔きながら始終地上を掃蕩する。――翼を成長さして、靜かに飛び上つてかける人たちがゐる。桑門の徒がそれだ。――譯なく昇つてすぐ落ちる輕快な人たちがゐる。善良な理想主義者がそれだ。――強い翼を持つ人たちがゐる……天上の人たちがゐる。天上の人たちは人間を愛し、人間のために地上に降りて、飛ぶ方法を敎へてゐるのである。彼等は必要がなくなると、また天上

に飛び上る。基督がこの種の人である。」

2　「人は生活に醉つてゐる時だけ、本當に生活することが出來る。」（「懺悔」千八百七十九年。）

「私は生活に狂氣のやうになつてゐる……今は夏、悅ばしい夏。私は今年、長い間爭つてゐたが、私はとうゝ自然の美に征服されてしまつた。「私は生活に悅んでゐる。」（フェット宛の手紙、千八百八十年七月。）

これは彼の宗敎上の危機の絕頂に於て書かれたものである。

3　千八百六十五年十月の日記。「死の思ひ……」「私は不死を望み、不死を愛する。」

4　「私は怒に燃える激情に驅られてゐた。私は心に怒りを抱くのを好む。私がそれを感じてゐる時でさへ、起てる怒りである。何故と云ふに、怒りは私を靜にし、少くも暫くの間は私に不思議なほどの彈力を與へるからである。總ての肉的、心的の、火と力を與へるからである。」（公爵ネフリユドフの日記、リユセルン、千八百五十年。）

5　千八百九十一年、彼が倫敦の萬國平和會議について書いた「戰爭」に關する論文は、國際の仲裁を信ずる平和論者に對する、率直な皮肉である。

「一握りの鹽を尾につけて鳥を捕る話である。始めからそんなことをせずに捕るのは易いことだ。それは

各國の認めてゐる仲裁と武裝解除を說くと云つて、人々を嘲笑するのと同じである。それは饒舌のみである。各國の政府は當然贊成する。い、氣の使徒たちよ。彼等はその承諾が、心一つで纔萬の人を屠殺場に送ることさへ出來ることをよく知つてゐるのである。（「神の國は我等の中にあり。」）

6　自然は彼もよく云つてゐた通りトルストイの「一番よい友」であつた。

「友達はよいが然し彼は何時かは死ぬる、何處かへ去る、そして彼に從つて行くわけにはゆかない。けれども實却によつて一緒になり、または相續によつて所有する自然は一層よいものである。自然に私　對して、冷たく、排斥的で、要求的で、阻止的であるが、死ぬる時まで共にあることの出來る友である。そして死ねばその中に入るのである。」（千八百六十一年五月十九日、フェット宛の手紙、「不刊行通信」三十一頁。）

彼はその生命を自然と共にした。彼は春になると甦つた。（千八百八十七年三月二十三日、フェット宛の手紙に「三月と四月は私にとつて最も仕事の仕よい月である。」と云つてゐる。）私が暮れる頃には頽くなつた。（千八百六十九年十月二十一日、フェット宛の手紙に私に取りては死んでゐる季節である。私は何も考へず、何も書かず、たゞ心地よい馬鹿になつてゐるやうな氣がする。）

けれども彼の心に最も深く浸み込んだのはヤースナヤ・ポリアーナの彼の家であつた。彼は瑞西を旅行した

時にジュネエヴ湖について少しばかりの美事な記錄を殘してはゐるが、そこでは外來の旅人の感を覺えたゞけであつた。そして彼の故國のことが一層深く懷く思ひ出されるだけであつた。彼は云ふ。

「私の四方を自然が取りまいて、遙か限りない處から來る空氣が私を包む時に、私は自然が好きになる。私が地上に座つて、自分の下に敷かれた草が、端もない綠の野となつて擴つてゐる時に、私の顏の上に風に吹き落された木の葉が、遠くの黑々とした森につゞいてゐる時に、私は自然が好きになる。私が吸ひ込む空氣が限りない青空とつらなつてゐる時、自然を樂しむのは私一人でない時に、私は自然が好きになる。私の身のまはりに數へられない程の昆蟲が唸りながら飛び廻り、澤山の鳥が唄つてゐる時に、私は自然が好きになる。自然の悅びの主なるものは、自分が自然の一部分となつてゐることを感ずることにある。——此處（瑞西）では遙か遠遠くに美しいものはあるが、自分はそれと何の緣もないのである。（千八百五十七年五月）

7　ポール・ボアイエ氏との話（千九百一年八月二十八日のル・タン紙。）

ルソオとトルストイは時々違つてゐた。頽死のジュリイの信仰の告白でも。「私は信ずることが出來なかつたのに、信じてゐたと云ふわけにはゆかない。また私は信ずると云つたものは何時も信じて來た。たゞそれだけが私のものであつた。」

神聖宗教會議に宛てたトルストイの手紙を比べてみると。

「私の信仰は苦しくて不愉快なものかも知れないが、それを變へることは自分の肉體を變へると同じやうにとしても出來ないことである。私は自分が其處から離れた神の處へ歸る準備をしてゐる時にあたつて、自分が信じてゐるものゝ他には何も信ずることが出來ないのである。」

それからまたあの本當にトルストイらしい、「クリストフ・ド・ボーモンへの答」の中の句と比べて見る。

「私はイエス・クリストの弟子である。吾が主は、兄弟を愛するものは律法を成就する者なり、と私に話されたことがある。」

それからまた、

「主の新禱の總ては次の言葉に含まれてゐる。即ち爾の御心のまゝになしたまへ。」

次のものと比べると、

「私は總ての新禱を、吾等の父に變へてゐる。私が神にする總ての要求は、この言葉の爲に一層大きい道德的奥齎を以つて現はされる。それは即ち、爾の御心のまゝになし給へ。」（高架索に於けるトルストイの日記、千八百五十二年——五十三年。）

宗教に於けると同じやうに、藝術に於いても思想に通つたところがあつた。

ルソオ云ふ」

文藝の第一の法則は、明瞭に、正確に自分の思想を表すことである。

トルストイ云ふ。

「何んな事を考へようとそれは勝手だが、總ての人に理解されるやうな言葉で話さなければならぬ。易い言葉ばかり使へば、惡いものが書けるはづがない。

私は何時か、ルソオのヌウヴェル・エロイズの巴里の樂劇の諷刺的な描寫が、トルストイの「藝術とは何ぞや」の批評とよく似てゐるのを示したことがある。

8　千九百三年一月六日の日記、（「トルストイの生涯と作品」の第一卷の中「その追想に對するトルストイの序文」の中に出てゐる。これはビルコフ氏が公にした。）

9　「カトリエヌ・ムプロムナアド。」

10　ビルコフ宛の手紙。

11　「千八百五十五年のセバトーポリ。」

12　「眞理……私の道德觀念の中で、今に殘つてゐる唯一つのもの、私がこれからも一緒に伴なつて行かうとする唯一つのもの、（千八百六十年十月十七日。）

13　眞理は愛の爲に路を開いてやるであらう……（「悔悟」千八百七十九年――八十一年）

眞理を愛の統一の中に置いた私……」（同上。）

14　「あなたは何時も精力のことを云ひますが、精力の源は愛ですよ。愛は勝手に湧くものぢやありません。」とアンナが云ふ。（「アンナ・カレニナ」第二卷二百七十頁。）

15　「美と愛、この二つの生命の理性」（「戰爭と平和」第二卷二百八十五頁。）

16　「私は神を信じる。神に私にとつて愛である。（千九百一年、神聖　教會議へ。）

「左樣、愛だ……利己的の愛ではない。私が身のまはりに死にかゝつてゐる敵を見た時に、生れてはじめて知つたやうな愛……これが靈の本質なのである。隣人を愛すること、敵を愛すること、總ての者を愛すること、――これが神の總ての現れを愛することなのである。……親しい者を愛するのは、人間の愛だ。けれども敵を愛するのは、神々しい愛である。……」（瀕死のアンドレイ公爵、「戰爭と平和」第三卷百七六頁。）

17　「藝術家の題目に對する烈しい愛こそ藝術の生粹である。何んな藝術品でも愛がなければ生れるものではない。」（千八百八十九年の手紙。）

18　「私は自分で本を書いてゐるから、本の害をよく知つてゐる。（千八百九十七年十一月二十七日、ドウホボルのヴェリグイン宛の手紙、「不刊行書信」二百四十一頁。）

19　「地主の朝」を見よ――または「懺悔」の中の運命に滿足して、靜かな生活の意味を知る單純で善良な理想的の人たちを見よ――または「復活」の第二部の終で勞働から歸る勞働者に出會つたネフリユドフに現れた「新人道、新しい世界」の幼を見よ。

20　基督敎徒は、自分が他の人より道德的に優れてゐるかどうか、知るべきものではない。其の人が或る時期に何れだけの道程を辿つてゐるにしても、完全に近づく道を急げば急ぐほど、一層彼は基督敎的なのである。だからパリサイの徒の定まつた德が必ずしも、盜人の德より基督敎的ではないのである。――理想に對する運動に溢れて、十字架の上に後悔悔するあの盜人よりも基督敎的ではないのである。（「殘酷なる快樂」アルベリン・カミンスキイ譯。）

附　錄

トルストイの遺作

トルストイは死後に未だ發表されない作を澤山殘したが、その中の大部分は其後出版された。佛蘭西ではビアンストックによりて三冊に譯されたが、これらは總て彼の全生涯の各期に書かれたもので千八百八十三年から始まつてゐる。「痴人の日記」が最も初期のものであるが、大部分は晩年の作に屬してゐる。その中には短篇や、長篇や、戲曲や、對話などが含まれてゐるが、未完の作が多い。私はそれらを、トルストイが道德的衝動によつて書いたものと、藝術本能によつて書いたものゝ、二つに區別したい。けれども或る少數のものは、この二つの傾向が混合してゐる。

悲しむべきことには、トルストイは文學上の名譽と云ふものに對して、餘りに冷淡であつたか

ら——それにまた多分控へ目にしようと云ふ考へもあつたものか——無比の美しいものとなるに違ひない作を、終ひまで書き終らなかつたのは、惜しむべきことである。

例へば皇帝アレキサンドル一世の有名な傳說を書いた、「フョードルのクズミッチ老人の遺稿日記」などがそれだ。皇帝は死を裝つて出奔して、名を詐つて自分から罪を負つて西伯利で老いてゆく。その事柄にトルストイが熱中して、その主人公と一つになつたことはよく解る。この「日記」が初めの數章しか殘つてゐないのは、實に惜しむべきことである。けれどもその數章は力のある生々した描寫に於て「復活」の中の一番優れた頁にも比べることが出來るほどだ。その中には年を取つた女王カテリン二世のやうな忘れられない人物も澤山ゐる。それからあの神秘で獰猛で傲慢な性質が、靜穩な老人の中に、目醒めやうとしてゐる躍動を保つてゐる皇帝の力のこもつた描寫。

「神父セルゲイ」(千八百九十一年——千九百四年)もトルストイの偉大な手によつて描かれたものであるが、餘り短かく縮めてあつて、傲慢に失敗し、一人苦行をしながら神を求める人の話を取扱つたものである。この人は他人の爲に生きてゐる中に、人間の間に神を見出すのであるが、其の野蠻で獰猛な頁の如きは息をもつかさずに讀ましめる。其の主人公が愛する女の下劣なことを

知る場面ほど端的に悲壯な描寫はあるまい。――（彼がまるで聖徒のやうに崇拜してゐた許嫁の女は、彼が尊敬してゐた皇帝の妾であつた。）口說の夜の描寫もこれに劣らず人の心を捕へる――（僧侶は亂れ切つた自分の心を鎭めるために斧で自分の指を一本切り落す。）こんな慘酷な挿話と共に、結末の陰氣な話、貧しい、年を取つた、小さい、少年時代の友人との陰慘な對話と、終りの平氣で靜かな簡潔な描寫は、いゝ對照を作つてゐる。

「母」もこれに劣らず人の心を動かす。一人の好い賢い主婦が、献心的に四十年の間、家族の爲に生活して來た後で、最早や仕事もなくなつて、寂しい力ない暮しの中から、信者ではないが僧院に隱れて自分の日記を書くのである。尤もこれは切めの部分の他は殘つてゐない。

短篇も澤山あるが、その大部分は立派な藝術品である。

「アレキシスの壺公」は美しい傳說から思ひついて書いたもの、何時も自己を犧牲にして謙遜に滿足して死んで行く素朴な人の話である。

「舞踏會の後」（千九百三年四月二十日）は二人の老人が或る若い女を愛するやうになり、急にそれを思ひ切るところを書いたものである。彼は娘の父の大佐が、兵士を鞭打たせてゐるのを見て急に娘を愛することが出來なくなる。始めには青年時代の思ひ出を非常に面白く語り、それから

現實に見るやうな確實さがある、傷のない作である。

「夢に見たもの」（千九百一年十一月十三日）は一人の公爵が墮落して家を出た大切な娘を許さなかつたが、一目娘を見ると直ぐ自分から許しを乞ふ。けれども（トルストイの優しさと理想主義は誤らない）娘が產んだ子供を見ると彼は何うしても不快の感を押さへることが出來ない。

「ホディンカ」は千八百九十三年の或る出來事を取扱つた短篇で、一人の若い女がモスコウの市民の祭に自分で加つたが、熱狂した群集に揉まれ踏まれて死にかゝつてゐる時に一人の勞働者が助けてやる。其の勞働者もひどく押されてゐた。一瞬の間に二人は親しい友愛を感ずるが、また永劫に別れてしまふ。

ハヂ・ムーラド　（千九百十二年十二月）は千八百五十一年の高架索の戰爭[2]中の挿話を取扱つたもので、其の量は他の作に比べて遙に大きく、敍事詩小說となるべきものであつた。これはトルストイが藝術的の技巧の最も熟してゐた時期に書いたもので、眼に訴へる幻も、心に訴へる幻も完全である。けれども不思議なことは我々は其の話說には何の興味も起こさない。それはトルストイ自分で其の話說に興味を持つてゐなかつたことが解るからである。トルストイはこの話の中に現れる總ての人間に、皆同じやうな同情を持つてゐる。そして總ての人物が、たゞちよつ

と讀者の眼に觸れるだけの人物でさへ、皆完全に描かれてゐる。けれども總てを愛してゐるトルストイは彼等の間に差別をつけなかつた。彼は多分何の内的の衝動も感ぜずに、身體的の要求からこの驚くべき小說を書いたであらう。他の人たちが自分の筋肉を動すやうに、トルストイは理智的の機關を動かすのである。彼は創作の要求を持つてゐて、創作したのである。

＊＊＊

其の他の作には個人的の調子が高くて、苦しみとなる位である。「痴人の日記」（千八百八十三年十月二十日）「惡魔」（千八百八十九年十一月十九日）などは自敍傳風のものである。前者は彼の千八百六十九年の危機の前の怖ろしい夜の記憶を呼び起こしたもので、後者は話も長く優れた部分も少くないが、結尾が不合理なのが傷になつてゐる。或る田舍の地主は、自分の領地内の百姓娘を愛してゐたが、結婚した後娘を忘れようとつとめながら（正直な彼は自分の若い妻を愛した）其の女が「血の中に宿つてゐて」其の女を見ると何うしても愛着の念を去ることが出來ない。女は彼を追求して彼はまた女のものとなる。女を振切ることの出來ない彼は遂ひに自殺してしまふ。

お人好しで、氣が弱く、頑強で、近視で、賢くて、眞面目で、勤勉で、煩悶してゐる男の描寫、それから男を理想化してゐる憧憬的な愛に滿ちた若い妻の描寫、それから美しくて、健康で、熱情的で、愼しみを知らぬ百姓娘の描寫——これらは實によく描けてゐる。トルストイが現實よりも、その小說の終りに多くの道德を殘したのは殘念である。彼は事實に於て、この話のやうな冒險を經驗してゐるのであるから。

「闇に輝く光」（五幕物）の藝術の力は弱いが、トルストイの隱れた晩年の悲劇を思ふ時、このトルストイと其の家族を舞臺に見せる作は、實に感動すべきものである。ニコラス・イワニッチ・サリンツエフは「吾等何を爲すべきか」の若者と同じ信仰を持つて、それを實行しようとするが、何うしても出來ない。眞實の涙か虛僞の涙かは知らぬが、彼の妻の涙は彼の意志を遮り、彼を家出させない。彼は家にあつて細工物をしつゝ憐れな生活を續け、妻や子供は贅澤に何時も宴會を開いてゐる。彼はそれにはあづからないのだが、人は彼を僞善者と云つて責める。けれども彼の道德的の感化と、彼の人格の單純な光は、彼の周圍に崇拜者を集める。不幸な者を集める。或る僧は教會を棄てるほど彼を信仰する。或る可なりの家庭の男は兵役を拒んで懲罰隊に送られる。斯うして可哀さうなトルストイのサリンツエフは疑惑の虜となり、自分は誤つてはゐないだらうか、

誤つて他人を苦しめ、他人を殺してはゐないだらうかと心配する。そして結局彼は自分の苦痛を逃れるために、彼が思はずも滅亡さした若い男の母親に殺して貰ふのが唯一の解決だと信ずるやうになる。

トルストイの晩年の生活は短い話の中にも見える。

「罰すべき者はない」(千九百十年十一月)は前の作と同様、自分の地位を怖れながら、それから脱し得ない人のみじめな告白である。何事も爲さない富める人に對立して、虐げられた貧しい人兩方とも斯んな社會狀態の恐ろしさに氣がつかない。

二つの戯曲は眞の價値を持つてゐる。一つは「あらゆる性質はそれから來る」(多分千九百十年と云ふ酒精に苛められる短かい、田舍者を描いた脚本で、其の人物は頗る個性的であつて、類型的の性質や面白い言葉の云ひまはしなぞが巧みに描かれてゐる。自分を盜んだ泥棒を赦す百姓は自分でも知らずにゐる道德的の偉大さと、素朴な自愛心とによつて、滑稽でもあれば、神々しくもある。

第二の戯曲たる「生ける屍」は十二場の戯曲で全々異つた意味で重要なものである。この作は頑迷な社會制度に壓倒された、弱くて、善良な人たちを取扱つたもので、主人公のフェージャは、

其の放蕩生活の下に蔭してゐる深い道德的の感情と、深い親切な心のために、遂に自らを滅亡さしてしまふ。彼は自分や世間の汚辱を忍び難きほど苦しみながら、而もそれを防ぐことが出來ないほど弱い人であつた。彼に愛されてゐた妻は善良でもあれば、優しくて賢くもあつたが、林檎酒を泡立たせるべく其に入れ注ぐだけの葡萄も持たない、生活の生々した點も持たない女であつた。彼女は忘れる事を知つてゐもしたがまた彼女に取りては忘れる事が必要でもあつたのだ。

彼は云ふ、

「我々は社會で誰でも三つの路を持つてゐる。三つの他にはない。役について、お金を儲けて、それから世間並に自分も卑しい事に手を出すこと、私はこれが大嫌ひだ。私なんかとてもそんな事をする氣にはなれない。……第二の路はこの卑劣と戰うやつだ。この路を進むのは英雄でなくちや駄目だが、私は英雄ぢやない。殘りの三番目の路は、何もかも忘れてしまつて、酒を飲んで道樂をして、唄を唄ふことだ。私はこの路を擇んだのだ。この路が私を何んな處に引つぱつて行くか、まあ御覽の通りだ……」[3]

また他の頁で云ふ。

「私が何うしてこんなに墮落したかと訊ねるのか。始めは酒だよ。酒が好きと云ふ譯ぢやない

のだが、私は自分の周圍で出來ることは皆これではいかんと思つてゐる。そして私は恥ぢる。それに公爵になつたり、銀行の取締になれたりするのは恥かしい。本當に恥かしい……ところが酒を遣ることの恥かしさを忘れることが出來る。それからまた音樂だ。音樂もオペラやベートーフェンではなく、ジプシーの音樂だ。こいつは生命のやうに精力を心の中に注ぎ込んでくれる……それからあの美しい黑い眼、微笑……けれどもこれが美しければ美しいほど後で恥しくなるのだ」。4

彼は自分も妻に對して惡いことをし、妻も彼に善いことをしないのを感じて、妻を棄てゝ家を出る。彼は自分の友人に妻をまかせる。妻はその男に愛されてはゐるが、妻は隱してゐるのだ。友人は彼に似てゐる。彼は無賴漢になる。これで萬事の始末がつく。殘つた二人は幸福、彼も——皆可なりに幸福。けれども社會は承諾なしに人が行動することを許しはしない。二人の友が重婚罪に陷るのを好まないために、彼は自殺してしまふ。露西亞的でもあれば、革命に對する野心が失敗した善良な人たちの失望を現してゐるこの作は、單純であり、簡單であつて、浮薄な文句が少しもない。第二義的の人物にいたるまで其の性格が皆眞實に描けてゐる。(愛と結婚道德の觀念の固い熱情のある妹。尊敬すべき濟ました善良なカレニン。貴族的な偏見にかたまつた、保守的で、言葉は烈しくても物越しの優しいカレニンの老母など。)ジプシーや辯護士たちの微々たる人

物までよく描けてゐる。

＊＊

私は道德教義の意思が中に漲つてゐる或る種の作については何も云はなかつた。その意志はトルストイの心理の明晰を少しも害なひはしない。「贋の手形」は長編と云つてもいゝ程の長い作であるが、これは善惡に關せず、世間の總ての個人的行爲の連鎖を示したものである。二人の大學生が犯した贋造は、次第に怖ろしいものになつて順々に罪惡の鍵を經て行き、或る惡漢に殺される一人の貧しい女の淸い諦めか暗殺者を感化し、その感化が段々溯つて行つて、終ひに總ての惡事の本元たる二人の學生に及ぶ。二人の學生は自分を犧牲にして罪を受ける。主意は莊重で、叙事詩のやうである。この作は宿命的の偉大なものに於て、古代の悲劇に似たところはあるが、餘りに長たらしく、餘りに斷片的で、眞實に描かれた人物が皆冷たいものになつてゐる。「子供の智慧」は宗教、藝術、科學、教育、國家などの問題を子供たちが集つて、論ずる二十一の對話であるが、それには生氣が缺けてはゐないまでも、何しろ餘り度々繰り返されるので讀む者をして

疲勞させる。

「若き皇帝」は若い皇帝が思はずも不幸に逢つたことを夢に見るのであるが、最も力の缺けた作の一つである。

最後に斷片的の原稿を數へれば、

「二人の巡禮」「僧侶ワシリー」「暗殺者は誰ぞ」など。

＊＊＊

これらの作の總てに現れてゐる、トルストイが死の日まで抱いてゐた強い知力は、我々を驚かせる。彼が自分の抱く社會的思想を現すのは無益と思はれるかも知れないが、彼が一つの行爲一つの生命のある人物に對すれば、人間的な夢想家でなくなつて彼は一目見て總てを洞察する驚のやうな鋭い藝術家になるのである。彼は何時もこの最も高い明徹性を持つてゐた。私が藝術について認める唯一つの力を弱くするものは熱情の方面にある。時々の短かい期間の例外の他は、トルストイに取つて書物を書くことは彼の生活の根柢をなすものではない。それは彼の爲には道

樂か、活動のための道具であるに過ぎない。彼の目的は活動にあつて藝術にはない。彼はこの烈しい幻に捕へられた時に恥かしく思つたであらう。彼は短かく切りすてる。でなければ「フョードル・クズミッチ老人の遺稿日記」に於けるが如く、新たに自分を藝術に結びつけるやうな著作を棄てゝしまふ。……創造の力に滿ちた偉大な純一な藝術家——而もその力は彼に反し、彼を苛め彼を神の犧牲にしたのである。

千九百十三年四月

ロマン・ロラン

1 トルストイの長女、タチア・ーナスホチン夫人は、私にトルストイの正しい綴り方は佛蘭西語ではYを一つつけるのだと敎へてくれた。トルストイから來た手紙には事實さう署名してあつた。

2 「私はその一部を實際見た」とトルストイも云つてゐる。

3 第五幕、第一場。

4 第三幕、第二場。

5 彼の精神のたしかさはトルストイの最後の病床に立會つた醫師やチエルトフも證言してゐる。彼は死ぬる時まで毎日「日記」を書いたり述したりしてゐたと云ふ。

——終——

ハヒガーナーゾ

序

『自分は正しい、貴い行ひをするものには、それだけでも不幸が忍べるといふことを證明したいと思ふ。』

ペートーヴェン

（一八一九年二月一日、維也納市廳に宛てゝ）

空氣が我々の周圍には籠つてゐる。世界は濁つて、汚れた大氣に包まれてゐる――政府と個人との仕事を等しく妨げて、人の智情を壓する淺い物質主義に包まれてゐる。我々は息が詰つてゐる。神の自由な空氣を入れて、英雄等の氣息の下に息がつけるやうに、我々は窓を開かう。

人生は酷薄である。心を惹くに足らない靈の凡庸さに滿足しないものに取つては、それは日毎の戰ひである。且つ多數には、それは悲しい戰ひでもある――卽ち孤獨と沈默とのうちに戰はれる。偉大も、幸福もない爭鬪である。貧や、一家の心遣ひや、一縷の希望もなしに、力があてど

なく消耗される過度な、無意義な勞働やに依つて、多數の靈は互ひに引き離されてゐる。彼等はその不幸に沈む兄弟に手を差し延ばす慰めも持つてゐない。彼等は存在を認め合はない。彼等は餘義なく自己にのみ頼らされてゐる。かくて世には最も強いものですらその艱難の重荷に屈する刹那がある。彼等は呼ばゝる――左の助けを。

さらば彼等をしてヒロイックな過去の友等――世界人類の福祉のために惱んだ偉大な靈魂への周圍に寄り集はしめるがいゝ。偉人の傳記は高慢なものに向つても、野心あるものに向つても書かれるのではない。それらは寧ろ不幸なものに捧げられる。で誰れか眞に不幸でないものがあらう？　惱めるものに、我々は彼等の聖なる惱みの香ひ油を捧げる。何人も一人で戰つてはゐない。世界の暗は英雄等の靈の指導する光明に輝やかされる。

自らは無限な思想や、單なる肉體勞力やに依つて打ち克つたものに英雄の名を與へない――たゞそれを與へるのは心の善良さを以て偉大になつたものにである。ベートーヴェンはかう書いた。『自らは人間のうちに善に優る何等の記號をも認めない』と。品性が偉大でないところには、偉大なる人物はない。偉大なる、藝術家と雖もなく、又偉大なる實行家と雖もない。あるのは多數人民の安價な、命の短い喝采を浴びせに堀り出される偶像ばかりである。時はそれらを全く拭ひ

消すだらう。外面の成巧は何でもない。たゞ必要なのは偉大であるといふことである。偉大に見えることではない。

偉大な英雄等の生涯は長い殉教の一生涯であつた。悲劇的な運命が彼等の靈を身心の不幸や、貧困と病苦とやの鐵床で鍛ふことを欲した。彼等は彼等の不幸に依つて偉大になつた。何故ならこれらの強大な靈は己れの不幸を訴へなかつたのである。人生の最善なものが彼等と共にあつたのである。我々をして勇氣を彼等より得來らしめよ。彼等の偉大な心胸からは靜かな力と、生氣を授ける善との瀧つ瀨が漲り溢れる。我々は彼等の作名を調べずとも、又彼等の聲を聞かずとも、その生涯の祕密を彼等の眼のうちに讀む――苦しみ惱んだことは有益である。そこから性格は更に偉大と、幸福と、成熟とを得さへするところがあると。

＊＊＊

強い、純潔なベートーヴェンもその惱みの中には、彼の例が不幸な他人の助けとなるべきことを望んだ……『あらゆる障碍に面しながらも人の名に價するものになるに可能な一切な事を

なした。已れと不幸さの等しい他人があることを不幸なものが見て慰められるべきこと』を望んだ。その惱みに克つて、その生涯の仕事を果さうとし――哀れな弱い人類に今少しの勇氣を鼓吹しようとして、殆んど超人的ともいふべき努力を擧けて多年に亘つてした戰ひの後、この打ち克つたプロメトイスは神をあまりに呼び過ぎたある友にいつた。『おゝ、人よ、汝自らを助けよ！』

我々は彼の貴い言葉に鼓吹されたいものである。我々はこの人の人生に持つた信仰と、その自身を恃んだ靜かな確信との例に勵まされて勇氣を再び更に鼓さう。

ロマン・ローラン

Wollten, wo man kann
Freiheit über alles lieben,
Warheit nie, auch sager am
Throne nicht verleugnen.

なし得るあらゆることをなし
如何なるものにも優つて自由を愛することかくて王國のためであらうとも
眞理を決して裏切らないこと

ベートーヴェン（譜本、一七九二年）

彼は廣い肩をした、逞しい體格の、小柄な痩せた姿であつた。顏は大きくつて、色が赤かつた――但し晩年には、特に各野外に出ないで室内に籠つてゐると、病的な黄いろい色になつたけれ

ども。彼は大きな頑丈な頭をして、毛が眞黑で異常に濃く、櫛の目が一度も通つたことがないやうに見えた。常に亂れて、眞に逆立つ『メッサの蛇』のやうであつだ。1彼の眼は驚くべき力を以て輝やいてゐた。それは初めて彼に會つて、人が一番氣の着く主な點の一つだ。が多く……ものはその色を見誤つた。それは悲痛な、慘とした容貌から黑く尖つて輝やきなす時、概して黑色のやうに見えた。が實は青味を帶びた灰色だつたのであつた。2それは小さくつて、深く落ち窪んでゐて情熱や亢奮を感ずると激しく尖つた。そして靈感を得てゐる時には、驚くべくはつきりと彼の思想を反映して、獨特に擴がつた。3屢々それは憂鬱な表情を泛べながら上を向くことがあつた。鼻は獅子のやうな鼻孔をしてゐて、短く、平たかつた。口は優美で、下唇がやゝ突き出てゐた。彼は胡挑も容易に嚙み碎けさうに思はれる、非常に強い顎を持つてゐた。頰には大きな凹みがあつて、顏を變に不均整にした。『彼は快い微笑をした。』とモシエレスがいつた。『そして話をしてゐると、よく愛嬌があつて、打ち開ける氣持にさせることがあつた。がそれに反して、彼の笑ひは聲が高くつて、不釣合で、甲走つてゐて、不愉快極まるものであつた』――幸福に慣れない人の笑ひ聲だ。彼がいつもする表情は憂鬱のそれであつた。レルスタッブが一八二五年にいつた。彼はベートーヴェンの悲しみをかたる柔しい眼を見た時、涙に咽ぶのを押しとゞめるに

は全身の勇氣を鼓さなければならなかつたと。ブラウン・フォン・ブラウンタールは、一年後にある宿で彼に會つた。ベートーヴェンは眼を閉ぢて、――その死に近づくにつれて益々募つて行つた癖である――長いパイプをくゆらしながら、一隅に座つてゐた。ある友が彼に話した。すると彼は悲しげに微笑みながら、ポケットから小さな捻へを取りを出して、金功聲によくなる細い聲をして、その問ふことを書きつけてくれといつた。彼の顏は俄かに變ることがよくあつた。通りでも、通行人を驚どかすほど、不意に靈感が泛ぶ時とか、或ひはピアノに對してゐて、突然に大思想を思ひつく時とかには、『彼の顏の筋が立つて、血管がふくれたり、荒はしい眼が倍ほども恐ろしくなる。彼の唇は震えた。彼はまるでその呼び出した鬼神を鎭める魔法使でゞもあるやうな態度をしてゐた。』……シエークスピヤにでもありさうな顏――『キング・リヤ4』――とはサー・ジュリアス・ベネディクトがいつたところであつた。

1 ジエー・ラッセル（一八二二年）。カール・ツエルニーは子供であつた、一八〇一年に、四五日煩髯を刺らないで、髮を逆立たして、山羊の毛のチョッキとズボンとを着けた彼を見て、ロビンソン、クルーソーに會つたのかと思つた。

2 畫家のクレーベルが、一八一八年の頃に彼の肖像を描いた時の言。

3　ヴエー・ツエー・ミュルレル博士は、特に『彼の時には實に柔しく、情け深いが、時には實に荒々しく、脅かすやうで、恐ろしくなる、美しい雄辯な眼』に氣を着けた。（一八二〇年）

4　クレー！ベルは『オツシアンの顏』だといつた。これらの細かい點は皆ベートーヴエンの友の記錄に據るか、或ひは彼を見た旅行者の言に從ふかしたのである。例へばツエルニー、モシエルス、クレーベル、ダニエル・アマドウス・アツテルボーム、ヴエー・ツエー、ミュルレル、ジエー・ラツセル、シユリアス・ベネディクト、ロホリツツ等。

＊＊＊

ルドウイツヒ・ファン・ベートーヴエンは、一七七〇年十二月十六日に、コローニユに近いラインの岸である大學所在地の小都會、ボンの貧家の狹い質素な屋根裏に生れた。彼はブランドル出であつた。1父は無學な、怠けものゝテノル歌ひで――『役に少しも立たない』、大酒呑みであつた。母はある料理人の娘であつた。彼女は下女をしてゐたことがあつて、ある從僕に初め嫁いで寡婦になつたのである。

1　彼の祖父ルドウイツヒは、一家のうち誰れよりも非凡な人物で、ベートーヴエンは一番その人に

よく似てゐたが、アントワープの生れで、二十歳の時選擧候の唱歌團長となつて初めてボンに定住した。我々はベートヴエンの性質中の熱烈な獨立心と、その他にも被の性格中に多くある眞の獨逸風でない特質をよく理解するのにはこの事實を忘れてはならない。

ベートーヴエンは、遙かに幸福であつたモツアルトと違つて、家庭の慰安がない不幸な少年時代を送つた。早くから人生が彼に取つては悲しい、殘酷なともいつていゝ、生存のための戰ひであつた。父はこの子の音樂的才能を利用して、神童だといつて賣物にしようとした。四つの時に、父はこの子に丸四時間もハープシコードを彈かせたり、又そんな風にヴアイオリンを持たせきりにして、無理に演奏させたりした。この子が音樂が大嫌ひにならなかつたといふことは驚ろくべきことである。といふのに父は幾年もこの通りにして行つて、事實暴力に訴へることが屢々だつたのであつた。ベートーヴエンの青年時代は、負擔が年に比べて重過ぎる仕事に依つて日毎の麵麭を得るに勞と不安とに曇らされた。彼は十一の時に劇場のオーケストラに並ばされた。十三で小會堂のオルガン彈きになつた。一七八年に、彼は愛慕してゐた母を失つた。『母は自分には實に善かつた。實に愛せられる資格があつた。自分が持つてゐたうちの最上の友であつた！　自分に母の親しい名が呼べ、母にその聲が聞いてゐられた頃はどんなに幸福であつたちう！』1彼女

は肺を病らつて死んだ。それでベートーヴェンも同じ病氣に摧つてゐると思ひ込んだ。その頃からもう彼は不斷に苦しんだ。そして内體の苦痛より數層も恐ろしい精神の鬱沈が常に彼の上に襲ひかゝつた。2彼は十七の時、事實上家長であつた。そして二人の弟の教育を引き受けてゐた。彼は父のために年金を乞はしめられる屈辱を忍んだ。それも父は酒に費消し盡すので、自分に支拂つて貰ふやうにと。これらの悲しい經驗は若者に深い印象を與へた。とはいへ、彼は後までいつも親しくしたボンの一家族――ブロイニング家から非常な愛と同情とを得た。柔しい『ロールヘン』、エレオーレ・フォン・ブロイニングは、ベートーヴェンより二つ若かつた。彼は彼女に音樂を教へた。そして彼女は詩の魅力を彼に手ほどきした。彼女は彼の青年時代の友であつた。そして彼等の間には更に柔しい情緒が存してもゐたであらう。後にエレオノレは、ベートーヴェンの最善な友の一人なるウエゲレル博士に嫁いだ。そしてベートーヴェンが世を終はるまで、三人の間には深い、變らない友情が結ばれてゐた。このことはウエゲレルとエレオノレとの常住愛の篤る手紙や、その古い信實な友(alter treuer Freund)から親しい善いウエゲレル(guter lieber Wegeler)に與へた手紙やを見れば解る。これらの友誼の絆は、老年に及ぶにつれて、更に一層深まつた。そして彼等の心が依然として溫い情を湛えた。ベートーヴェンは又音樂の師、クリスチャン・ゴ

ツトロープ・ネーフエをも確實な指導者として、善い友誼を結んだ。この人の高い道德的性格は、その厳い、理解に富む藝術的了解に劣ない影響を若い音樂家の上に與へたのであつた。

1 一七八七年九月十五日附、アウグスブルグのシャーデ博士家の手紙。

2 その後、一八一六年に、彼はいつた。『彼はどうして死んだらよいかも知らない哀れむべき男だ！自分もやつと十五で、さういふことを知つてゐた。』

ベートーヴェンの幼年時代では悲痛ではあつたけれども、彼はさういふ時代を送つた場處の柔しい悲しい記憶を常に心に銘じてゐた。彼はボンを離れさせられて、不活潑な周圍をしてゐる、不眞面目な維也納市で殆んど一生を送る運命になつたとはいへ、美しいラインの谷間と、その莊大な川とを決して忘れることがなかつた。彼の所謂 Unser Vater Rhine（我等の父なるライン）は、同情がある點に於て彼には殆んど人間と等しかつた。人の考へ及ばない深い思想を持つある巨大な靈の如きものであつた。流れが古いボンの大學所在地の凉しい、花の咲き亂れてゐる傾斜を撫でゝ行くところほど美しい、力强い、靜かなところはいづこにもない。そこにベートーヴェンは生涯の最初の二十年を過したのである。傾斜が霞むポプラーや、藪や、柳や、根が急に押し

默つて行く流れに浸る果樹やのある水際に綏く降つて行くところ――そこに彼の目醒めた心の夢は生れたのである。そして不思議なほど物穏かな岸には、町々や、寺々や、尙塞地までが靜かに沿つて横はつてゐて、彼方の地平線上には七つの山々の青岱が古城の跡の柔しく、ほつそり、夢のやうに立つシルエットの著しい背景を畫きつゝ、空に巍峨たる峰を向けながら現はれてゐる。彼の心は幼年時代の美しい、自然な環境にいつまでも信實でゐた。そして最後の瞬間に至るまで彼はもう一度この景色を見ることを夢みてゐた。『自分の故國、自分が初めて日の光りを見た美しい國、そこは自分が立ち去つた時と同じく明らかに、美しく眼についてゐる。』1 彼はそこを二度と見なかつた。

1　一八〇一年六月二十九日附、ウエゲレル家。

＊＊＊

一七九二年、十一月、ベートーヴェンは獨逸の音樂的首都、維也納に引き移つた。1 革命が勃發した。それは方に歐羅巴全體に擴がらうとしてゐた。ベートーヴェンは戰爭がボンまで及んだ

時に方つて、そこを去つた。彼は維也納への途上で、佛蘭西に進軍するヘッセ大公國軍に行き會つた。一七九六年と一七九七年とに、彼はフリードベルヒの戰爭詩『別離の歌』と、愛國的コーラス、Ein grosses dentc e: Volk sind wir（我等は一大獨逸國民）とを譜に合はせた。けれども彼が革命の敵を歌つたことは徒勞であつたのである。革命は世界を征服した――ベートーヴェンをも共に征服した。一七九八年以降には、墺佛間の關係が緊張してゐたに拘はらず、ベートーヴェンは佛蘭西大使や、恰かも維也納に着いたばかりのベルナドット將軍やの佛蘭西人等と親しく交はりを結んで行つた。ベートーヴェンには、この交はりの間に強い民主的同情が現はれて來た。かくて時と共にこの感情が一層強くなり優つた。

1　彼は一七八七年の春、既に暫らく維納也にゐたことがある。その際彼はモツアルトに會つた。がモツアルトは彼に注意を拂はなかつた。ハイドンには、彼は一七九〇年にボンで會つたが、この人からはある教へを受けた。ベートーヴェンはヌアルブレヒトスベルゲルと、サリエリとをも師に持つた。後者は彼に施律配合法と走法とを教へ、後者は彼に聲音記入法を練習せしめた。

その項シュタインハウゼルが彼を寫したスケッチに據ると、當時の彼の概觀がはつきり解る。こ

のベートーヴェンの肖像と彼の肖像との對比は、ゲランのナポレオン像が他のナポレオン像に於ける對比と同じである。ゲランの描いた顏は粗暴で、野蠻といつてもよいほどで、野心に荒んでる。ベートーヴェンは年より遙かに若く見えて、痩せて眞直ぐで、高い襟飾りの中に固くなつてて、その眼には傲然として緊張した色を泛べてゐる。彼はこれの眞價を知つてゐる。そして力を持んでゐる。一七九六年に彼に雜記帳に書いた。『勇氣を勵ませ！　たとへ自分の肉體は弱くとも、尙自分の天才は打ち克つだらう……二十五歳！　それが今の自分の年だ……自分が壯年に既に達してゐるこの年にこそ、自己を飽くまでも發揮しなければならない。』1 コダム・フォン・ベルンハルトも、ゲリンクも、彼は粗野な不恰好な樣子をして、極端に傲慢であつた。そしてひどい田舍辯で語つたといつてゐる。たゞ彼の親しい友のみが、この粗野な外面の下に如何に優れた器量が隱れてゐるかといふことを知つてゐた。ウエゲレルに成功を告げるに方つて、彼のにも最初に起つた考へは次ぎの通りである『例へば僕が困つてゐる友達に會つたとする。もし僕の財布が直ぐにその人を僕に助けさせないとすれば、自分の仕事机は僕は座りさへすればいゝのだ。さうすれば直きにその人の困難が除けるのだ……どんなにかうすることに持のいゝことだかを思つて見給へ。』2 それから尙少し先きに、彼はいつてゐる。『僕の藝術は貧者を救ふ以外の目的には

捧げられることがないだらう。』
(Dann soll meine Kunst sich nur zum Besten der Armen zeigen.)

1　これは彼の初舞臺だといへない。維也納に於ける彼の最初の演奏會が開かれたのは、一七九五年三月三十日であつたから。

2　一八〇一年六月二十九日附、ウエゲレル家へノール編　書簡集一十四)。『僕が何かを持つてゐるうちは友達に困らせはしない。』と彼は一八〇一年頃にリースに宛てゝ書いた。

困難が既に戸口を訪れてゐた。それが這入つて來た——もういつかな彼の許を去るまいとして一七九六年と一八〇〇年との間に、耳が聞えなくなり出した。彼は絶えず耳鳴りがして苦しんだ。1 彼の聽力はだん〳〵に弱くなつた。數年間、彼は最も親しい友にさへこのことを隱してゐた。彼はその苦難を氣着かれまいとして、交遊を避けた。然し一八〇一年にはもう彼は默つてゐられなくなつて、二人の友、ウエゲレル博士と牧師アメンダとに絶望して打ち明けてゐる。『僕の親しい、善良な、愛するアメンダ。僕は君の傍にゐたいと幾たび願つたか知れない！　君のベートーヴェンは實に不幸だ。君は僕の最上な部分、卽ち僕の聽覺が非常に弱くなつたことを知らなけれ

ばならない。僕等が一緒にゐた時でさへも、僕は祕密にしてゐたが、悲しい徴候があつたことを知つてゐた。が今では狀態がずつと惡い……僕はよくなれるだらうか。僕は自然の情としてよくなることを望んでゐる。がその望みは極めて微かなのだ。といふのにこの病氣は望みの一番少ないものなのだから。僕の生活は何といふ悲しいのであらう！　何故といふのに僕は愛するあらゆるものと、自分に大事なあらゆるものとを避けさせられてゐるのだから、而もかうまで悲慘な、かうまで私慾に耽ける世の中でかうなつてゐるのだから！……僕の隱れ家を得てゐるかういふ諦めは何といふ悲しいものだらう！　僕がかういふ一切の不幸に勝たうと決心したのは元よりである。だがどうしたらこのことが可能になるだらう？……[2]又ウエゲレルにはかういつてゐる。

『……僕は實に悲慘な生活を送つた。過去二年間、僕はあらゆる社會と全く絕つて來たのだ。僕は人間と話が出來ないのだ。僕は聾だ。僕の專問の職業が何か幾のことであつたのなら、このことは尙忍べたらうが、然しさうでないのだから、僕の境遇は恐ろしい。僕の敵は何といふだらう？　而も敵は少なくないのだ！……劇場では僕は俳優のいふことが解るやうに、オーケストラの直ぐ傍にいつでも席を取つた。僕には一寸でも離れては、器樂のも肉聲のも高い調子が聽き取れない……靜かに人が話すと、聞くのはやつとのことである……然るに又、大聲をして呼

ばれるとそれも堪らないのだ……よく僕は自分の存在を呪ふことがあつた。プリユタルクが僕を諦めの精神に導いてくれた。結局出來ることならば、僕は自分の運命を勇敢に忍ばう。が僕の生涯にはあらゆる神の造られものゝうちで悲慘を極めるのは自分だといふ氣のする瞬間がある……諦め！　何といふ悲しい隱れ家だらう！　而もそれこそたゞ一つ自分に殘されてゐるものである！』

1　一八〇二年の遺書で、ベートーヴエンはその聾疾が六年以前に始めて現はれたといつてゐる――卽ち一七九六年頃に方つて。で我々は彼の作品目錄中で、一七九六年以前に書かれたかの第一作（三つの三部合奏）のみであるのに序でに注意するといゝ。第二作たる、最初の三つのピヤノソナータは、一七九六年三月に現はれた。だから、ベートーヴエンの作品全體は聾者の作つたものだといつていゝのである。

一九〇五年五月十五日の『醫學時報』所載、クロツツ・フオレスト博士のベートーヴエンの聾疾に關する論子を見よ　この論子の記者は、疾患がその源を遺傳の苦痛（多分は母の結核）に發したのだと信じてゐる。聾疾は度を增したが、全然聞えなくはならなかつた。ベートーヴエンには高い音よりも低い音の方がよく聞えた。晚年には、彼は木の棒を使つて、その一方の端をピアノの音函に入れ、

一方の端を齒にくはへたといふことである。彼は作曲する時、音を聞くのにかういふ方法を取つたのである。

（尙同じ問題に關しては、ツエー・ゲー・クン（『維也納醫學週報』一八九二年二月――三月號）ナゲル（『音樂』一九〇二年三月十五日號）テオドル・フオシ・フリンメル（『審判者』一九一二年七月號）參照。

ボンのベートーヴエン博物館には、一八一四年頃に、器械師のメールツエルがベートーヴエンのために作つた聽音器が保存されてゐる。

この悲劇的な悲哀はこの時期のある作品、第十三作『悲曲』（一七九九年）とに、特に第十作の三『二調ピヤノ・ソナータのラルゴ』（一七九八年）に現はれてゐる。我々がこれを總べての作品中に見出さないことは驚ろくべきである。かの輝く『七部合奏曲』（一八〇〇年）と、澄み渡る『第一シンフオニー』長ハ調、一八〇〇年）とには共に若か〳〵しい悅びの精神が漲つてゐる。疑ひもなく、この靈魂を彼は悲哀に慣らす決心をしたのである。人の精神は幸福を持たない時には、これを創造せしめられるほど強い慾望を幸福に射して懷いてゐる。現在が苦痛に過ぎる時には、靈魂は過去に住むのである。幸福な日は一筆に掻消されない。その光輝は消え去つた後までも長く殘

つてゐる。維也納にたゞ一人不仕合はせでゐて、ベートーヴエンは故國の思ひ出に隱れ家を求めた。いつでも彼の思ひはボンに走せてゐた。『七部合奏曲の變アンダンテ』の樂想はラインの歌である。『長ハ調シンフオニー』も亦ラインに靈感されてゐる。それは己れの夢想に微笑む青春の詩である。それは快活で、又憂鬱である。人は喜ばうとする望みと願ひとがそこにあるのを感ずる。然し序曲のある數節や、アレグロの沈重なベースの節の蔭影や、この若い作曲家の幻想的なスケルツオーやには、來るべき大天才の面影があることを感じて動かされる。その表現は『聖母子』の繪にあるボチチエリの『バンビー』の眼を思はしめる――人が近づく悲劇を悟るかの幻な子の眼を思はしめる。

と間もなく彼の艱苦が彼の肉體の苦惱に加はつた。ウエゲレルは、ベートーヴエンが極度に走る戀愛の情熱を脫却するのを見たことがないといつてゐる。これらの情事は常に最も純粹なものであつたやうに見えた。彼に取つては情熱と快樂との間には關係が些かもなかつた。方にこの二つのものゝ間に起つた混雜は、情熱に就いて、又それが極めて稀なことに就いて知るものが少ないことを示すのみである。ベートーヴエンはその天性中に清教徒らしいところを持つてゐた。淫ちな會話や、思想が彼には厭はしかつた。彼は戀愛の神聖に對しては、常に不變な觀念を懷いて

ゐた。……彼はモツアルトが『ドン・ジヨヴアンニ』を書いて、その天才を賣つたことを許せなかつたといはれてゐる。彼の親しい友であつたシンドレルは我々に保證していふのに、『彼は些の弱點に對しても自ら責められるところなく、清淨な眞潔のうちに生涯を送つた。』と。かういふ人は戀に欺かれて、その犧牲となる運命を持つてゐた。かくて果してその通りになつた。彼はいつも激しく戀に墜つた。そして不斷にその幸福を夢みながら、而も欺かれて、深甚な苦痛に投ぜられるのみであつた。この戀と熱烈な悲哀と、若い確信と傷けられた誇りとの交互に起る狀態中に、我々はベートーヴエンの靈感のうちで最も豐かな源泉を見るのである。遂には彼の猛烈な、熱情的な性質に憂鬱な諦めとなつて靜まるに至るまでの。

一八〇一年には、彼の情熱の對照がギユリエツタ・ギユイツチアルディであつたやうに見える。彼はその名高い（所謂）『月光曲』、第二十七作（一八〇二年）を捧げてこの人を不朽にした。『僕は今ずつと善い光りで物を眺めてゐる。』と彼はウエゲレルに宛てゝ書いてゐる。『そして更に人と親しんでゐる……この變化は可愛らしい娘の魅力が起させたのである。彼女は僕を愛し、僕は彼女を愛してゐる。これはこの二年間のうちに初めての幸福な時である。』1 彼がそれに對して拂つた價は高かつた。初めからして、この戀は彼を襲つた病氣の悲慘と、彼に愛するものとの結

婚を不可能ならしめた不安な生活狀態とを更に鋭く感ぜしめた。その上、ギユリユツタは媚を賣る、子供のやうな、利己的な性質であつた。彼女はこの上なく冷酷にベートーヴエンを苦しませた。そして一八〇三年十一月に、ガルレンベルグ伯爵と結婚した。2 かういふ情熱は靈魂を荒ませるものである。實際ベートーヴエンの場合のやうに、精神が既に病氣で弱められてゐる時に方つては、全然の破滅に陷る危險がある。これはベートーヴエンの生涯中で、彼が屈せんとし掛けたやうに見える唯一の時である。とはいへ、彼は恐るべき危機を越した。『ベスの詳細は自分の死後に讀んで、果すこと』と指定してある、彼の弟のカールとヨハンとに宛てた『ハイリゲンシユタット遺書』として知られる手紙に記されてゐる。3 それは最も痛切な悲哀に充ちる反抗の叫びである。人はその叫びを聞いて心を打たれずには居らない。その暗黑な際に方つて彼は自殺をしかけてゐた。たゞ彼の強い道德の力のみが彼を救つた。4 彼の健康を恢復しようとする最後の希望は消滅した。『これまで自分を與へて來てゐた高い勇氣すら今は去つた。おゝ神よ、眞に幸福なたゞ一日をでも、今一たび自分のものとならしめ給へ。自分は久しく喜びの身震ひを知らなかつた。何時、おゝ神よ、何時自分はもう一度喜びを感じるでせうか……もう二度とは？……否、それは殘酷過ぎるでせう！』

1　一八〇一年十一月十六日附、ウエゲレル宛。

2　彼女は夫に對する愛よりベートヴエンに對する以前の愛を憚らず誇りもした。ベートーヴエンはガルレンベルグを助けた。『彼は自分の敵であつた。自分が彼に出來るだけのことをしなければならない理由はそれだからである。』と彼は一八二一年に、その會話用の雜記帖の一冊の中でシンドレルに語つた。けれども彼はその地位を利用することを賤しんだ。『彼女は維也納にやつて來ると』と彼は佛蘭語で書いてゐる。『自分を探し出して、泣きながら訪ねて來た。が自分は彼女を跳ねつけた。』

3　一八〇二年十月六日。

4　『君の子供を德が高くなるやうに育て給へ。それだけがたゞ彼等を幸福にすることが出來る。金では駄目だ。僕は經驗に依つていふのである。僕の悲慘の中心で自分を與へたものはこれである。たゞ德と藝術のみが僕を救つて、自分の生命を斷たしめなかつた。』又他の一八八一〇年五月二日、ウエゲレル宛の手紙にはかう書いてゐる。『僕は何處かで、人は善行が尙出來る限りは、己れの生命を斷つべきでないとあつたのを讀んでゐなかつたら、もうとつくに世を去つてゐたらうと思ふ。確かに己れのまで己れの生命を斷つてゐたらうと思ふ。』

これは實に破れた心の叫びである。而もベートーヴエンは尙二十五年を生き存らへる運命を負つてゐたのである。彼の强健な天性は、その痛苦の重みの下に陷ることを拒まうとしなかつた。『僕の肉體の精力は、僕の智識の力に伴つて常に進んでゐる……さうだ、僕は實際自分の靑春がやつと始まり出したのを感じてゐる。毎日僕は目的地に近づいてゐる。それが僕には明らかに定義は得ないが感じられる……おゝ、僕がもし聾でさへなかつたら、僕は世界を抱くだらうに！……無休息！　尠くとも、僕は眠りの外には何の休息をも知らない。そして僕は不幸にして以前より時を餘計に眠りに與へなければならない。僕がもし病氣の一部分をでも免がれることが出來たら、その曉きには……否、僕にはもうそれが忍び得ない。僕は運命と戰はう。運命は僕を完全には負かし切るまい。おゝ、一人のうちに千百人もの生活を送るとしたらどんなにか善いだらう！』1

1　ウエゲレル宛。

この彼の愛と、この惱みと、この諦めと、この喪心と誇りとの交錯と、この『靈魂の悲劇』とは、一八〇二年に書かれた偉大な作曲中に悉く反映してゐる――卽ち第二十六作『葬送曲のあるソナータ』と、第二十七作の一『擬幼想曲ソナータ』と、第二十七作『月光曲と呼ばれるソナー

タ』と、ある莊大な而も悽慘たる獨白のやうな戯曲的復誦のある、第三十一作の二『短ニ調ソナータ』と、アレクサンドル皇帝に捧げられた、第三十作『ヴァイオリン、短ハ調ソナータ』と第四十七作『クロイツエル・ソナータ』と、ゲレルトの言葉に附した、ヒロイツクな而も悲哀の籠る、第四十八作『六つの宗教的歌謠』とに。一八〇三年に書かれた『第二シンフォニー』には寧ろ彼の青春の戀愛が反映されてゐる。そしてこゝに、人は彼の意志が斷乎として勝つてゐることを感じる。ある打ち克つべからざる力が彼の悲しい思ひを追ひ拂つてゐる。生命の眞の沸騰がそのフィナーレに現はれてゐる。ベートーヴェンは幸福になる決心をした。彼はその不幸に絶望することを欲しなかつた。彼は健康を欲した。愛を欲した。そして絶望を傍らに投げ棄てた。1

1　一八〇二年のホルネマンの密書は、頬髯と、長い髪の毛とを生かして、當時流行つた服を着て、バイロンの主人公の一人にでもありさうな悲劇的な風彩をしながらも、頑として讓らない確固なるナポレオン式の色を泛べるベートーヴェンが描かれてゐる。

多くの彼の作品で、人が打たれるのは戰ひの精神に充ち滿ちるその力强い、精力的な行進のリズムである。これは特に『第二シンフォニー』のアレグロと、フィナーレとに於て著しい。又アレクサンドル皇帝に捧げられた『ヴァイオリン・ソナータ』の、雄大なヒロイズムに充ちる、最初の奏部に於ては更に著しい。この音樂の戰鬪的な特徴は、それが書かれた時代を思ひ起さしめる。革命は維也納にも及んだ。ベートーヴェンはそれに全く心を奪はれた。『彼は親しい友の間では、政治的事件に就いて自由に語つた。』とシュヴァリエ・ド・セーフリーはいつた。『その事件を彼は非凡な聰明さと、明らかな、落ち着いた先見とを以て評價した。あらゆる彼の同情は革命的觀念に注がれた。』彼は共和的信條を好んだ。その晩年に方つて彼を最もよく知つてゐた友、シンドレルはいつた。『彼は無制限な自由と、國民的獨立との擁護者であつた……彼は萬人が國家の政府に與かることを望んだ……佛蘭西に對しては彼は普通選擧を望んだ。そしてボナパルトがそれを敷いて、人類の幸福の適當な基礎を据えることを願つた。』ブリユタルリに養はれた革命的典型の羅馬人たる彼は、勝利の神である、第一次總督に建設される勝ち誇る共和國を夢みた。そして續いて帝國の『イリアッド』たる、一八〇四年の『エロイカ・シンフォニー、ボナパルト』1と、一八〇五年から一八〇八年に掛けて成つた、光榮の偉大な史詩、『短にシンフォニー』のフ

ナーレとを作つた。これは實に革命的感情を現はす最初の音樂である。時代の靈が再びそれの中に生きてゐる。離れて生きてゐて、現實との接觸に印象を汚されない強大な、孤獨な靈に大きな事件が與へる强烈と純潔とを以て生きてゐる。ベートーヴェンの精神は、擾亂する事件に際立ち、これらの大戰爭の反映に彩られつゝ現はれる。この證據は、(恐らく彼には無意識だらうが)この時期の作品中の到るところに現はれてゐる。嵐が情景の上に猛る『コリオラナス』のオーヴァチュア(一八〇七年)にも、その最初の奏部がこのオーヴァチュアと密切に關係してゐることを示す第十八作『第四、四部合奏曲』にも、ビスマルクが『それを度々聽いたら、自分は常に非常に勇敢でゐるに違ひない。』といつた第五十七作『ソナータ・アッパショナタ』2(一八〇四年)にも、『エグモント』の樂譜にも、又技巧すらがヒロイックで、戰士の全軍が通過する。第七十三作『變ホ調』中の一なる、彼のピヤノのコンセルトーにも亦それが現はれてゐる。我々はこのことを驚ろくには當らない。英雄の死の『葬送曲』(ソナータ、第二十六作)を書く時に方つても、ベートーヴェンは彼の音樂に最もふさはしい英雄、卽ち『エロイカ・シンフオニー』のモデルにボナパルトよりも近いオーシュが、恰かもラインのほとりで死んで、その墓が實にコブレンツとボンとの間の小さな丘の頂きに立てられたのを知らなかつた……彼は維也納にも革命が勝つのを

二度見た。佛蘭西士官が一八〇五年十一月、維也納に開かれた『フイデリオ』の第一回演奏に出席した。ベートーヴェンが『エロイカ』と、『短ハ調シンフオニー』とを捧げた。友にして保護者たるロブコーヴィッツの許にその居を定めたのは、バスチーユの勝利者たるユラン將軍であつた。そして一八〇九年五月十日には、ナポレオンがシエーンブルンに假泊した。3 ベートーヴェンは直ちに『短ハ調シンフオニー』を破り棄てゝ、いつものやうにスケッチを取らずに卽ちに『第四シンフオニー』を書いた。幸福が彼のところにやつて來た。一八〇六年五月に、彼はテレザ・フオン・ブルンスウィックと婚約した。4 彼女は久しく彼を愛してゐた——若い娘の頃から彼女は、彼の最初の維也納滯在期間に方つてピヤノを彼に敎はつてゐた。ベートーヴェンは彼女の兄のフランツ伯爵の友であつた。一八〇六年に、彼は彼等と共に匈牙利のマルトンヴァサールに行つてゐた。そして彼等が戀に陷つたのはその地に於てであつた。これらの幸福な日の思ひ出は、テレザの書いたものゝ中にある或る物語に生き〳〵と殘されてゐる。5『ある日曜の晩』と彼女はいつてゐる。『食事が濟むと、月が部屋に差し込む中で、ベートーヴェンはピヤノに向つて座つてゐた初め彼は手を鍵盤に平らに載せてゐた。フランツと私はいつもこれを知つてゐた。彼が定つてする用意だつたからである。すると彼はあるベースの音を鳴らして、莊重と神秘との調子を泛べてヨ

ハン・セバスチャン・バッハの歌を彈き出した。我れに心を與へんとならば、先づひたやかに與へ給へ。二人の胸を思はせつゝも、人にはそれを知られぬやうに。』6 私の母と、牧師とは眠つてゐた。それから兄は彼の歌と彼の表情とを悟つた。私は生命の充ちて押し寄せるのを感じてゐるうち、うつら〳〵して眼を瞠つてゐた。翌る朝私達は公園で出會つた。すると彼は私にいつた。『僕は今オペラを書いてゐる。その主な人物が何處へ行つても、自分のうちと周圍とにある。僕は以前にこんな幸福の高さに登つたことはなかつた。僕は自分のあらゆる周圍とうちとに光りを感じ、清淨さを感じ、偉大さを感じてゐる。今まで僕は美しい花が傍に咲くのを見ないで道の小石を拾ふ、お伽噺の子供のやうなものであつた。』と……私が愛する兄のフランツの同意を直ぐ得て、彼と婚約したのは一八〇六年五月のことであつた。』

1 事實『エロイカ・シンフォニー』はボナパルトのために、ボナパルトに關して書かれたものである。そして最初の原稿には尙、『ボナパルト』といふ表題が附いてゐる。その後ベートーヴェンは、ナポレオンの戴冠式を知つた。彼は怒りに驅られて、叫んだ。『彼は普通の人間に過ぎないではないか。』と。そして憤慨して、獻呈辭を破り去つて、復讐的な、痛ましい Sinfonia Eroica composta per festeggire il souvenire di un grand Uono (ある偉人の遺德を頌するために作られた英雄的

交響樂）といふ表題を書いた。シンドレルは彼のナポレオンに對する蔑視が、後年には和らいだといつてゐる。ベートーヴェンはナポレオンのうちに寧ろ憐れむべき境遇の不幸な犧牲、天から落下する一個のイカラスを認めたのである。彼は一八二一年に、セント・ヘレナのカタストロフを耳にして、いつた。『自分は十七年も前にこの悲しい出來事にふさはしい音樂を作つて置いた。』と。彼はそのシンフォニーの『葬送曲』のうちに、勝利者の悲劇的な最後の豫感を認めることを喜んだ。して見ると『エロイカシンフォニー』の、特に最初の奏部には、一種のボナパルトの像が恐らくベートーヴェンの心に描かれてゐたのである。勿論眞の人とは非常に異つた、何れかといへばベートーヴェンの想像に成るか、或ひはベートーヴェンの望んだ——革命の天才としてゞあるが。ベートーヴェンは、『エロイカ・シンフォニー』のフィナーレに於て、彼が一八〇一年に、比倫を絶する革命的英雄、自らの神たる、プロメトイスに關して既に書いた作品の主要な樂節の一を再び用ひたのである。

2 羅馬に駐在した獨逸大使の、ロベルト・ド・コイデルが著はした『ビスマルクとその家族』一九〇一年版に據る。ロベルト・ド・コイデルは、一八七〇年十月三十日に、ヴェルサイユでこのソナータを拙いピヤノに上せてビスマルクに聽かせた。ビスマルクはこの作品の終りの部分に關していつた。『全生涯の嘆息と爭鬪とがこの音樂の中にある。』と。彼はあらゆる他の作曲家よりベートーヴェンが傑れてゐるとした。そして一再ならず確言した。ベートーヴェンの音樂は、他のどの音樂よりも自分の神

經を靜める。』と。

3　ベートーヴェンの家は、ナポレオンが市の占領後に爆發させた維也納要塞の近くにあつた。『何たる恐ろしい生活だらう。周圍は總べて荒廢だ。』とベートーヴェンは、一八〇九年六月二十六日に、出版者のブライトコッフ及びハルテルに書き送つた。『大鼓と、喇叭と、あらゆる悲慘事との以外には何物もない。』

當時のベートーヴェンの姿が、一八〇九年に維也納で彼を見た佛蘭西人の、政府議員トレモン男爵に依つて殘されてゐる。それにはベートーヴェンの部屋の亂雜さが眼に見るやうに描かれてゐる。彼等は哲學、宗教、政治、『分けてもシエクスピヤ』に就いて語り合つた。ベートーヴェンはトレモンに從つて巴里に頻りに行きたがつた。彼は巴里の音樂學校でそのシンフォニーが既に演奏されたことを知つてゐた。で彼は多くの熱心な讃美者をその地に持つてゐたのであつた。（ジー・シヤンタヴオワン發行、『ナルキユール・ミユージカル』一九〇六年五月一日號所載、トレモン男爵の『ベートーヴェン訪問記』參照）

4　或ひは一層正確にいへば、テレザ・ブルンスウイツクである。ベートーヴェンは一七九六年から一七九九年の間に、維也納でブルンスウイツク家と會つた。ギユリエツタ・ギンイツチアンデイはテレザの從姉妹であつた。ベートーヴェンはある期間、テレザの姉妹の一人で初めディム伯爵に、後に

スタツケルベルグ男爵に嫁したジヨゼフインにも心を惹かれてゐたことがあるやうに見える。ブルンスウイツク一家に關するある顯著なる詳細は、アンドレ・ド・エヴエシー氏の文中に見出される。Beethoven et l'immortelle Bien-aimée（『ベートーヴェンとその永遠なる愛に』、『巴里評論』一九一〇年三月一日及び十五日號所載）。この研究に、ド・エヴエシー氏は匈牙利のマルトンヴアサールに保存されるテレザの回想錄の稿本と書翰とを用ひた。それらは總べてベートーヴェンと、ブルンスウイツク家との親交を語つてゐる。そしてテレザに對する彼の戀愛の問題を再び提起する。然し議論は避ふべからざるものではない。で自分はいつかそのことを更に論ずることゝする。

5　マリアン・テンゲル著、Beethovens unsterbliche Geliebte（『ベートーヴェンの不滅な戀』）一八九〇年、ボン出版。

6　Wist du dein Hery mir schenken (Aria di Govannini)　ベテルス版、二〇七一頁。この美しい曲は、バツハがその妻、アンナ・マグダレナのために書いた樂譜の中に出て來る。

この年に作曲された『第四シンフォニー』は、彼の一生中で最も穩やかなこの時代の香りを放つ純淸な馥郁たる花である。當時『ベートーヴェンの願ひは、先驅者等に傳へられた形式中一般に知れ亘つて、讃美されるものと出來るだけその天才を調和せしめるのにあつた』といはれたの

は當つてゐる。1

1　ノールの『ベートーヴェン傳』。

この戀愛から出る同じ和解的精神は、彼の態度にも、彼の一般の生き方にも反動を及ぼした。イグナーツ・フォン・セーフリードと、グリルパルツェルとは、彼が生命に充ちて、輝やいて、幸福で、機智に富んで、交際場裡で慇懃に、煩はしい人々をも忍べば、服裝にも意を拂つてゐたことを語つてゐる。彼の耳が聞こえないのさへ氣著かれなかつた。そして彼等は、何れかといへば弱かつた視力を除いては、彼が非常な元氣でゐたことを語つてゐる。1 これは當時コーレルの描いた肖像を見れば解る。それには彼はいつもに似ない垢抜けをして、ロマンチックに、やゝ氣取つた樣子さへして寫されてゐる。ベートーヴェンは喜ばさうと欲してゐる。そしてさうすることが自分の氣に入りもしてゐる。獅子が戀してゐる。彼はその爪を引き込めてゐる。けれども人はかうして飽くまで喜戯するうちにも、「變ロ調シンフォニー」の想像と敏感との蔭に、彼の本性の恐るべき力と、我儘な氣分と、情熱的な氣質とがあることを深く感ずる。

1　ベートーヴェンは實際に眼が近かつた。イグナーツ・フォン・セーフリードは、これを天然痘の

故だといつてゐる。そして非常に若い頃から眼鏡を掛けさせられてゐたと。彼の眼の荒々しい表情はこの近視にひどくされたに違ひなかつたのである。一八二三年から四年に掛けての彼の手紙には、屢々痛んだその眼に就いてよく訴えてゐるところがある。クリスチヤン・カリスヘルがこのことに就いて書いた『ベートーヴェンの眼と眼病』（『音樂』一九〇二年三月十五日號——及び四月一日號所載）參照。

戀愛は柔しい感化を一八一〇年まで及ぼしたが、この深い平和は永續する運命になつてゐなかつた。ベートーヴェンは疑ひもなくこの平和に、當時彼をしてその天才の最も完全な果實たる、かの偉大な古典的悲劇のあるもの、即ち『短ハ調シンフォニー』や、又かの夏の日の快い田園詩たる、一八〇八年の『牧歌的シンフォニー』1やを制作せしめた自制を負つてゐたのである。シエクスピヤの「嵐」に靈感を得て成つた『ソナータ・アッパショナタ、』2彼の自ら認めた彼の作中最も力强いものとしたソナータは、一八〇七年に現はれて、テレザの兄に捧げられた。テレザその人には第七十八作『嬰ヘ調、夢幻曲』（一八〇九年）が捧げられた。彼の『永遠なる愛人』に宛てた日附のない手紙には、『ソナータ・アッパショナタ』に劣らないほど强くその戀の激しさが現は

れてゐる。

『我が天使、我が總べてのもの、我が眞の自我。

七月（一八〇六年？）

「今日自分は少し話たい――それも（御身の）鉛筆で書いてゞある。明日まで自分の部屋ははつきりと塞がつてゐる。そんな事柄で消すのは何たる時の浪費だらう！　所詮さうある外ないのにかう深く悲しむのは何故であらう？　二人の愛は犠牲に依つて、願ひを抑へることに依つてゞなければどうして忍べよう？　御身は全く自分のものでないのに我慢出來るだらうか。又自分も全く御身のものでないのに？　おゝ！　美しい自然を眺め給へ。そして避けるに由ないことを靜かに受け入れ給へ――愛は萬事を要求する。それは尤もなことである。自分は御身に就いてさうであり、御身は自分に就いてさうである。たゞ御身は自分が己れのためと、又御身のために生きなければならないことを忘れ易い。二人が全然結合すれば、御身はかういふ悲しい事實を自分と等しく感ずるだらう。自分の旅は恐ろしかつた。自分は昨日の朝四時に漸くこゝへ着いた。それで馬が少なかつたゝめに乘合馬車は外の道を選んだ。だが何といふ恐ろしい道だつたろう！

最後の一つ手前の驛で、自分は夜旅をするなといつて勸められた。人々は自分に森を通ることを警めた。がそれは自分を却つて推し促がすにとゞまつた。而も自分は誤つてゐた。馬車は道が恐ろしくつて、まるで沼の、田舍道であるために、讓れるに決つてゐるのである。自分は駿者がゐなかつたら、途中で動けなくなるに違ひなかつたであらう。自分が四匹で行つたのにエステルハジーは八匹で行きながら、普通の道で同じ運命に陷つた――とはいへそれはどんな困難にでも首尾よく打ち勝つ時にいつでも感ずるやうな、ある快感を自分に與へた。で今や外から内に俄かな變化をした。二人は多分直き會へるだらう。その上、今日自分にはこの數日間自分の生活に就いて心に泛んだことを御身に話すことが出來ない。二人の心が密接に結合してゐるとしたら、かういふことを自分はしないだらう。自分の心は御身にいふべき、多くのことに充ち滿ちてゐる。あゝ！　自分の言葉に力のないのを感ずることが時々ある。氣を引き立たせ給へ。常に自分の眞實なるものでゐ給へ。自分の總べてのものでゐ給へ!!!　自分が御身に對してあると同じやうに。神々は休息を授け給はなければならない。二人のためにあるものは存して行かなければならない。必らず存して行くべきである。

御身の思實なるルドウイッヒ』

1　ゲーテの戯曲『エグモント』のために作つた音樂は、一八〇九年に初めて着手された。ベートーヴェンは又『カイルヘルム・テル』のためにも音樂を書くことを願つた。がそれには彼よりギローヴェッツの方が選ばれた。

2　シンドレルとの會話。

この二人をその戀愛の完成から引き離した障壁が何であつたかを推することは難かしい。それは運がなかつたからだらうか、或ひは社會上の地位が隔絶してゐたからだらうか。恐らくベートーヴェンは彼に課せられた試みの期間が長いのに堪えられなかつたか、或ひは何時までともなくその戀を祕密にして置く屈辱を厭つたかしたのであらう。恐らく、彼は情に驅られ易く、苦しんでゐると共に、又厭世的でもあつて、心ならずも愛するものゝ心を苦しめ、この結果として絶望に自分も陥つたのであらう。事實の上で婚約は破れた。何れにも不實なところがあつたとは思はれないのに。

テレザ・フォン・ブルンスウィッツは、最後に至るまで（彼女は一八六一年まで生きたが）ベー

トーヴェンを愛してゐた。そしてベートーヴェンも信實の點に於ては劣らなかつた。一八一六年に彼はいつた。『彼女のことを思ふと、自分は初めて彼女に會つた日と變らずに胸騒ぎする。』痛切な深い感情が寓されてゐる。第九十八作の六つの歌はこの年出來た。これらは『遠くにある愛人に』（Andie ferne Geliebte）捧げられた。彼は雜記帳に書いた。『自分の心は彼女の美しい天性を思ふと溢れ漲つて來る。而も彼女はこゝにゐない。自分の傍らにゐない！』テレザは『稀代の天才偉大な藝術家たる、寛大な人に贈る。テー・ベー。』と誌した、自分の肖像をベートーヴェンに贈つた。1　その晩年に、ある友はベートーヴェンが獨りでゐるところへ不意に行つた。そして彼がこの肖像を持つて、涙に暮れつゝ獨りでかういつてゐるのを見た。『お前は實に可愛くつて偉大だつた。實に天使のやうだつた！』その友は引き返した。そしてやゝあつて又行くと、ベートーヴェンはピヤノに向つてゐた。『今日は君の顏には暗い色がない。』と友がいつた。するとベートーヴェンは答へた。『それは善い天使が僕のところへやつて來たからだ。』痛手は深かつた。「哀れなるベートーヴェンよ。』と彼は自らいつた。『お前の幸福はこの世にはない。たゞ理想の世界でばかりお前は自己に打ち克つ力を見出すであらう。』2

1　この肖像は今も倫ボンのベートーヴェンの家にある。それはフリンメルの『ベートーヴェン傳』二

十八頁と、『音樂時報』一八九二年十二月十五日號とに複製が載せられてゐる。

2　グライヘンシュタイヘ。

彼に雜記帳に書いた。『服從、汝の運命への全然の服從。汝はもはや汝自身のためには生きられまい。たゞ他人のために生きられるのみである。汝に取つてはたゞ汝の藝術中に幸福があるのみである。おゝ、神よ、自分に『自己に打ち克つ力を授け給へ……』

＊＊＊

かくて戀が彼を振り棄てた。一八一〇年には、彼は又もや孤獨であつた。然し喜びが彼に來た。それと力の意識が來た。彼は血氣が壯んであつた。彼は結果を顧慮することなく、又世の思はなくも、人生の有り來りた慣はしにも無論心を留めずに、彼の激しい我儘な氣分に浸つた。實際、何を彼は恐れなければならないだらう？　又何を憚らなければならないだらう？　戀も、野心も過ぎ去つた。力と、力の喜びと、力を用ひる、殆んど力を濫用するだけが彼に殘された。『力は平

凡以上に拔んでる人々の道德を構成する。』彼はなり振りに構はない元に戻つた。そして彼の態度が今や前より一層自由になつた。彼は自分が最大なるものにすら自由に語る權利を持つてゐることを知つた。『自分は人間のうちに善に優る何等の記號をも認めない。』と彼は一八一二年七月十七日に書いた。1 ベッチナ・ブレンタノは、その頃彼を見て、『どんな國王でも、皇帝でもこれほど己れの力を自覺したものはない。』といつてゐる。彼女は彼のこの力に心を魅せられた。『初めて私が彼を見た時』と彼女はゲーテに宛てて書いた。『私からは外界といふ外界がみんな消え失せてしまひました。ベートーヴェンは私に世界を忘れさせました。そして、おゝゲーテ、あなたをさへも……私はかういつても間違つてゐるとは思ひません。この人は近代文明の眞先きに立つてゐる。』とゲーテはベートーヴェンの知己にならうとした。2 彼等は一八一二年に、ボヘミアの鑛泉地テープリッツで會つた。けれどしつくりとはしなかつた。ベートーヴェンは熱烈にゲーテの天才を讃美した。だが彼自分の性格はあまりに自由で、野性的で、ゲーテの感受性を傷けずにはゐなかつた。ベートーヴェンは彼等が一緒に歩いた下の散歩のことを語つてゐる。でこの散歩の道すがら、傲慢な共和主義者はワイマル大公の恭謙な顧問官に忘るべからざる威嚴上の教訓を與へた。

1　『心はあらゆる偉大なものゝ動力である。』（ジャンナタシオ・デル・リホへ）

2　『ゲーテの詩は自分に大きな幸福を與へる。』と彼は一八一一年二月十九日に、ベッチナ・ブレンタノに宛てゝ書いた。それからかうもいつてゐる。『ゲーテとシルレルとは、自分が不幸にして、驕譯でしか讀めないオシアンとホメロスと共に、愛讀してゐる詩人である。』一八〇九年八月八日附、プライトコッフ及びハルテル宛。ノール編『新書簡集　五十三。

ベートーヴェンの文學趣味が、碌に教育を受けないにしては非常に健全であつたことは著しい。『偉大で、莊嚴で、常に長ニ調で』ゐると彼がいつたゲーテに加へて、（且つゲーテ以上にも）彼はホメロスと、プリユタルリと、シエクスピヤとの三人を愛した。ホメロスの作品では、彼は『イリヤッド』よりも『オデッセー』を選んだ。彼は絶えずシエクスピヤを（獨逸譯）で讀んでゐた。そして如何に悲劇的な偉大さを以て、彼が『コリオラナス』と『嵐』とを音樂に作つたかといふことは我々の知るところだ。彼は革命に贊成するものが誰れも讀むやうに、プリユタルリを絶えず讀んでゐた。ミケランジエロにもさうであつたやうに、彼の英雄はプルツスであつた。彼はその小さな像を寢室に据えて置いた。彼はプラトーを愛した。そしてその共和國を全世界に打ち建てることを夢みた。『ソクラテスと耶蘇とは自分のモデルであつた。』と彼は雜記帳に書いたことがあつた。（一八一九年から一八二〇年までの會話）

『王や親王には教授や樞密顧問やを容易く造ることが出來る。彼等には稱號や勳章が授けられる。然し彼等には大人物や、この世の賤しい動搖を拔んでる精神は造り得ない。……そしてゲーテと自分のやうな二人のものが一緒にゐる時には、さういふ立派な貴紳も我々とその人々との間の相違を自覺させられなければならない。昨日、我々は歩いて歸つて來る道で皇室のもの悉くに行き會つた。我々は彼等が遠くから近づくのを認めた。ゲーテは自分の腕を執つて、路傍に群衆と共に佇む彼の傍へに引き寄せた。自分は彼にいつたが駄目だ。どういつても、自分には彼に一歩も進ませることが出來なかつた。自分は帽子を眼深く被り、外套のボタンを掛けて、人込みを分けて進んだ。親王や宮臣等は傍らに立つてゐた。ルドルフ公は自分に向つて帽子を脱いだ。皇后は向ふから頭を下げた。地上の最大なるものが自分を知り、且つ自分を認めてゐるのである。自分は行列がゲーテの傍を過るのを興味を以て見守つた。彼は帽子を手にしながら、低く頭を下げて道端にとゞまつてゐた。自分はかなり嚴しくそのことで彼を非難した。そして少しも容赦しなかつた。』1

1　ベッチナ・フオン・アルニムへ。ベートーヴェンがベッチナに宛てた手紙の眞僞は、シルドレルや、

マルクスや ダイテルスやに疑はれたが、モリツツ、カリエールや、ノールや、カリスヘルやには眞正であるとされた。ベツチナは多分少しくそれを文飾したのであらう。がそれにしても據り處がある ことはやはり信じていゝのである。

ゲーテも同じくその場のさまを忘れなかつた。1

1 『ベートーヴェンは』とゲーテはツエルテルにいつた。『不幸にして、野性的な不作法な性質を持つてゐる。勿論、彼が世界を厭ふべきだと思ふのは惡くはない。がそれは彼自分をも、他人をも愉快ならしめる道ではない。我々は彼が聾であるのに免じて彼を許さなければならない。 そして憐れまなければならない。 その後、彼はベートーヴェンには逆らひもしなければ、又そのために何事もせずして、全く無視し切つた。とはいへ、心の底では、彼はベートーヴェンの音樂を讃美した。且つ恐れた。彼は自分が幾多の艱苦を經て獲得したかの心の平靜をそれが失はしめるのを恐れた。一八三〇年にワイマルを通つた若いフエリツクス・メンデルスゾーンの手紙は 大家らしい強い智力に制されてゐるともいふべきかの荒れ狂ふ情熱的な靈魂の奥に非常な興味ある閃きを投げて見せてゐる……『最初には』 とメンデルスゾーンが書いてゐる。 彼はベートーヴェンの名が口に上されるのを聞きたがらなかつた。然し暫らくするうちに、彼は『短ハ調シンフオニー』の第一部に耳を傾けさせられた。彼は深くそれに感動した。彼は上邊には何も現はさうとしなかつたが、たゞ自分にかういつた。『それは心を動かさない。たゞ自分を驚ろかすだけだ。』 と、やゝあつて彼はいつた、『それは實際偉大である。狂亂してゐるやうである 家が粉微塵につぶされるかと思ふやうだ。』 後で 正餐の時になつても、彼は思ひに沈んで、心を奪はれながら座つてゐて、その擧句に自分にベートーヴェンの音樂に就いて聞き出した。自分は彼が深い印象を受けてゐたのだといふことをあり〳〵と悟つた。

(ゲーテとベートーヴェンとの關係に就いては、フリンメルの色々な論文を見よ)

一八一二年には、數日間のテープリツツ滯在期間に『第七及び第八シンフオニー』が書かれた。これらの作はリズムと、ユーモアの眞の躁宴である。これらのうちに彼は恐らく最も自然な、自ら稱した通り、最も『打ち寛いだ』(aufgeknofte) な氣分で己れを現はしてゐる。ゲーテをも、ツユルテルをも恐怖せしめ 1、北獨逸では『イ調シンフオニー』を以て泥醉者の作だと稱さしめるに至つた。かの巨大なる哄笑を伴ふ激情の亢奮と、惑亂する諧謔の閃きとに思ひも寄らない對稱をなす悅樂の恍惚たるさまを現はしてゐる。それは實際酩酊せる人の作であつた。力と天才とに陶醉する人の作であつた。自ら『自分は美酒を人類のために打ち碎くバッカスである。人に神聖

な狂熱を與へるものは自分である。』と稱した人の作であつた。ワグネルがかう書いた。『自分はベートーヴェンが、そのシンフォニーのフィナーレに、ディオニゾス的躁宴[2]を描かうと欲したか否かを知らないが、ともかく自分はこの情熱的なケルメッス祭の中には、彼のフランドル出である證跡を認めることが、彼の大膽な口のきゝ方と、(彼の飽くまで自由で、そして嚴しい規律や固苦しい禮儀に治められる國と飽くまで不調和な態度とにそのことを認めると正に異らない。)『イ調シンフォニーレに現はれるよりも偉大な正直さと、自由な力とは何處にもない。それは兩岸に溢れて、あたりの國を浸す河のやうに自由になる喜び以外に目的がない。超人精力の心が狂つた怒號である。『第八シンフォニー』では、力がそれほど莊大でない。とはいへ實に尙不可思議で、悲劇を滑稽劇と混じ、ヘルクレスの如き元氣を子供の遊戯と出來心と混ずる人の特性を實に現はしてゐるところがある。』[3]

1　一八一二年九月二日附け、ゲーテよりツエルテルへの手紙……一八一二年九月十四日附、ツエルテルよりゲーテへの手紙。"Ach ich bewundere ihn mit schrecken" (『自分も、亦、彼を目するに讃美と恐怖との混淆を以てした』)。ツエルテルは一八一九年に、『彼は氣が狂つたといふこと

である』とゲーテに宛てゝ書いてゐる。

2　ともかく、これがベートーヴェンの心に懷いた主題であつた。我々は彼の雜記帳、特に計畫されてゐた『第十シンフォニー』のための雜記帳の中にそれを發見するのである。

3　この頃、アコリエ・ゼーバルトと彼との間には極めて溫い親交が結ばれてゐた。それで恐らくこの親交が靈感を與へたのかも知れなかつた。

一八一四年はベートーヴェンが幸運の頂點をなす年である。彼は維也納議會に於て、歐羅巴的な名聲を得た。彼は祝宴の主賓になつた。親王等が彼に尊敬を致した。そして彼は（後にシンドレルに誇つたやうに）彼等に媚を呈さしめた。彼は獨立戰爭に對する同情に軀られた。[1] 一八一三年には、彼は『ウエリントンの勝利』を祝ふシンフォニーを書き、一八一四年の初めには、軍歌のコーラス『獨逸の再生』(Germanns Wiedergeburt) を作つた。一八一四年十一月二十九日に、彼は國王等の御前で愛國的なカンタタ『光榮の時』(Dea gearreich, Augenblick) を指揮し、又一八一五年の巴里陷落に際しては、コーラス『そは遂げられたり』(Es ist vollibracht) を作つた。これらの際物の作品は、彼のその他の音樂全部を合はせたよりも實に彼の名聲を傳播せしめるに與かつて力があつた。ブラシウス・ヘーフエルが佛蘭西人ラトロンヌのスケッチに據つて作

つた版畫と、フランツ・クライインが一八一二年に作つた野蠻に見える鑄形とは、維也納議會時代に於けるベートーヴェンの姿をさながらに現はしてゐる。怒りと惱みの皺が寄つた、がつしりとした顎をしてゐる、この獅子に似た額の目に立つ特徴は、決斷——卽ちナポレオン式に、意志である。人はイエナの戰後、ナポレオンに就いてかういつた人を認める。『自分が戰爭に就いては、音樂に就いてほど知らないといふことは何たる不幸であらう！　自分は自分が彼の主であることを知らせたく思ふ。』けれども彼の王國はこの世のではなかつた。『自分の帝國は空中にある。』と彼はフランツ・フォン・ブルンスウイツクに宛てゝ書いた。[2]

1　この點彼と異つて、シューベルトは一八〇七年に、大ナポレオンの名譽のために、『時局的作品』を書いた。そして自ら皇帝の前でその演奏を指揮した。

2　『自分は我々の君主や、彼等の王國に就いてはいはない。』と彼は議會の會期にカウカに宛てゝ書いた。『自分の心中で、何よりも懷かしいものは精神の帝國である。それこそ現世並びに靈界一切王國中の第一たるものである。』

この光榮ある時期の彼には、凡そ悲しい、慘苦を極める時代が來る。維也納はベートーヴェンに同情を持つてゐなかつた。彼は傲慢な、大膽な天才ではあつたけれども、ワグネルが彼に嘲り笑つた1世俗的な、凡庸な精神を持つ、この不眞面目な都市には落ち着いてゐられなかつた。彼は立ち去る機會を一も見逃さなかつた。そして一八〇八年に近い頃、彼はウエストフアリア王、ジエローム・ボナパルトの宮廷に趨くために墺地利を去らうと眞面目に考へた。[2] 然し維也納には夥しい音樂的資源があつた。でそこには常にベートーヴェンの偉大を感じて、彼を失ふの恥辱を故國に與へなかつた高貴なディレッタンティがあつたことを公平にいふ必要がある。一八〇九年に、ベートーヴェンの弟子、ルドルフ大公と、ロブコーヴィッツ公爵と、キンスキー公爵とのこの維也納で最も富んだ貴族等が三人して、彼に墺地利にとゞまるといふだけの條件で、四千フロリンの年金を支拂ふことを企てた。で彼等はいつた。『人はあらゆる物質的心勞に煩はされなくなつて始めて藝術に身を捧げ切ることが出來るといふことゝ、彼が藝術の光榮たる崇高な作を造れるのがたゞさうなつてのみであるといふことゝは明らかなるが故に、かれ等はルドウィッヒ・ファン・ベートーヴェンを窮乏の蔭から救つて、かくて彼の天才の飛翔を妨げる悲慘なる障害を除き去る決心をした。』が不幸にして、その結果は約束通りにならなかつた。年金は常に極めて

不規則に支拂はれた。直きに全然絶えてしまつた。且つ維也納も一八一四年の議會後には性質が非常に變つた。社會は注意を藝術から政治に奪はれた。音樂趣味が伊太利主義に害はれて、流行を追ふ人にはベートーヴェンを衒學者だとして、ロッシニを喜び迎へた。[3] ベートーヴェンの友や保護者が、或ひは散じ、或ひは死んだ。キンスキー公爵は一八一二年に、リヒノフスキーは一八一四年に、ロブコーヴィッツは一八一六年に。かくて彼が三つの立派な四部合奏曲をその人のために書いたラスモウスキーは、一八一五年二月に最後の演奏を開いた。一八一五年には、ベートーヴェンはエレオノレの兄で、彼の少年時代の友なるステフエン・フォン・ブロイニングと爭つた。[4] この時からして彼は獨りつ切りになつた。[5] 『自分には一人も友がない。自分は世界に獨りぼつちだ。』 と彼は一八一六年の雜記帳に書いた。

1 維也納といへば、何誰も指さないことではないだらう。あらゆる獨逸新敎の跡は絶たれ、國民的語調さへ失はれ、伊太利化された……。伊太利と西班牙とを本とする敎科書で解釋された獨逸の精神と、獨逸の習慣及び風俗……下落した歴史と、僞造の科學と、僞造の宗敎との國……眞理と、名譽と、獨立とに對するあらゆる愛を害はうとする不眞面目な懐疑思想！（ワグネル著『ベートーヴェン』一八七〇年）

ゲリルパルツエルは、墺地利人に生れるのは不幸だと書いた。維也納に住んだ十九世紀末の偉大な獨逸作曲家等は、ブラームスのパリサイ宗儀に明け渡されたこの都市の精神に無慘にも憐まされた。ブルツクネルの生涯は一つの長い殉敎であつた。力が屈するまでは激しく戰つたフーゴー・ウオルフは、維也納に假借するところなき批判を浴びせた。

2 ジエローム王は、ベートーヴェンに、己れに時々演奏をして　さう長くも、別に度々でもない宮中應接間の演奏會を催すなら、金貨六百ダカットの年金と、銀貨百五十ダカットの旅費とを給しようと申し出た。ベートーヴェンは熱心に行かうとした。

3 ロッシニの『タンリレディイ』は、全獨逸の音樂的建築物を搖がすに十分であつた。バウエンフエルトは（エルハルトが引用してゐるところに據れば）その日記に、一八一六年に維也納の客間で流行したかういふ批評を記してゐる。『モツアルトとベートーヴェンとは舊式の衒學者である。前時代の愚昧が彼等を喜ばした。人がソロディを眞に知つたのはロッシニが出てからである。』『フイデリオ』には音樂が全然缺けてゐる。何故人々が態々それを聽いて退屈しに出懸けるのだか解らない。ベートーヴェンは一八一四年に、ピアニストとしての最後の演奏會を開いた。

4 同年、ベートーヴェンは弟のカールを失つた。『彼は自分の命を自分が喜んで與へてもいゝと思ふほど、生命に執著した。』 とベートーヴェンはアントニア・ブレンタノに宛てゝ書いた。

5　不治の病氣に犯されて、彼と同じく絶えず讀んでゐたマリア・フォン・エルデディとの親交を除いては、彼女は一八一六年に、その獨り子を不意に失つた。ベートーヴェンは一八〇九年に、「第七十作、二つの三部合唱曲」を彼女に捧げ、又一八一五――一七年には、その傑作なる「第百二作、二つのヴィオロンセロ・ソナータ」を捧げた。

彼の耳は全く聞えなくなつた。1　一八一五年の秋以後には、彼は漸く筆談で友と交通し得るばかりであつた。2　最も古い會話帳は一八一六年の日附になつてゐる。3　一八二二年の『フィデリオ』の演奏を聞いては、シンドレルがある悲しい話を傳へてゐる。『ベートーヴェンは總稽古の指揮に當らうと欲した……第一幕の二部曲からして、彼には演奏がまるで聞こえないことが明らかであつた。彼は速度をかなり遲くして行つた。するとオーケストラが彼の拍子に從つて行くうちに、歌手が調子を早くした。次いで總體の混亂が起つた。オーケストラのいつもの指揮者、ウムラウフは、理由をまるで說明せずに、少時間休止を唱へた。そして歌手と數語を交はした後に、又やり始めた。同じ混亂が新たに起つた。又もう一度間を置くことが必要であつた。ベートーヴェンの指揮の下には續けて行かれないことが明らかであつた。がどうして人々又は彼にそのことが知らせられやう？　一人として彼に『氣の毒な不仕合はせな方よ、行つて下さい。あなたには指揮することは出來ないのです。』といふに忍びなかつた。ベートーヴェンは不安を感じて、氣を探みながら、いろんな人の顏の表情を讀んで、どういふ故障があるのか知らうとしつゝ、あたりを見廻はした。誰れも默り返つてゐた。と俄かに彼は尊大な態度をしながら自分を呼んだ。自分が彼に近寄ると、彼は手帳を渡して、自分に書けと合圖した。自分は次ぎのやうな言葉を書いた。『續けてやらないで下さい。理由は歸つて話します。』『早く行かう！』と彼は自分にいひながら、一足飛びに舞臺から飛び下りた。彼は一直線に家に走せ戻つた。家に這入つて、顏を手で蔽ひながら、ソファに身を投げ掛けた。彼は正餐の時が來るまでそのまゝでゐた。食卓に就いた際にも、彼には一言も物をいはすことが出來なかつた。彼は落膽し切つた、深い悲しみの色を泛べてゐた。食事が終つて、自分が走らうと欲した時にも、彼は自分を引き止めて、獨りにして置かないでくれといつた。別れる時に、彼は自分に彼の醫者のところへ一緒に行つてくれといつた。これは耳の病氣に掛けては評判の非常に高い醫者であつた。自分はベートーヴェンと交はつてゐた内ぢうに、この十一月の恐ろしい日に比較していゝ日を知らない。彼は心の底までも打ち碎かれた。そして死ぬまで、この恐ろしい有樣から受けた印象を忘れなかつた。4

1　彼の聾疾に加へて、彼の健康も日増しに衰弱して行つた。一八一六年の十月ぢう、彼は重態に陥つてゐた。一八一七年の夏には、醫師が彼には胸部の疾患があるといつた。一八一七――一八年の冬ぢう、彼は彼の所謂肺結核に惱まされた。それから一八二〇――二一年には、彼は急性僂麻質斯を病み、一八二三年にはいろ〳〵の病氣に罹つた。

2　『第百一作、ソナータ』に始まる彼の手法の變化は、この時からして起つてゐる

3　ベートーヴエンの會話帳は一萬一千頁以上に上つてゐる。そして今伯林の帝室圖書館に裝釘されてゐる。

4　シンドレルは、一八一九年以後にはベートーヴエンと親しくしたが、一八一四年からはさうよく知つてゐなかつた。だがベートーヴエンの方では親しみ惡くがつてゐた。彼は初めにはシンドレルを傲然として見下してゐた。

二年後の、一八二四年五月七日に、『コーラル・シンフォニー』を指揮した時（或ひは寧ろ、プログラムに據れば、『演奏會の指揮になかつた』時）、彼は喝采する聽衆の騒ぎがまるで聞えなかつた。彼は一人の歌手が彼の手を執つて向き直らせるまで、それを氣取りもしなかつた。そして俄かに聽衆が帽子を振つたり、手を組み合はしたりしてゐるのを認めた。英吉利の旅客ラッセルは、

一八二五年頃ピアノに向ふ彼を見て、彼が靜かに彈奏しようとすると、調子が響かなかつたといつてゐる。それで彼の顏だの、指の運動だのが現はれて、彼を鼓舞する感動を沈默して、見守るのは傷心の極みであつたと。自己のうちに閉ぢ籠つて1、あらゆる人類と掛け離れてゐる、彼の唯一の慰藉は自然のうちにあつた。『自然は彼の懸け換へがない信友であつた。』チャールス・ニートは、一八一五年に彼を知つたが、ベートーヴエンほど心を盡して、花や、雲や、自然やを愛したものを見たことがないといつてゐる。2彼はそれらのうちに生きてゐるやうに見えたと。『地上の誰れも自分ほど田舍を愛するものはない。』とベートーヴエンは書いた。『自分は人よりも木を愛する。』維也納では、彼は毎日城壁の周圍を歩いた。田舍では、彼は照つても、降つても、帽子を被らずに、夜明けから夜になるまで獨りで歩いた。『全能の神よ！　森の中にゐると、私は幸福です。どの木も、どの木もあなたを通して語る森の中にゐると幸福です。おゝ、神よ、何たる輝やかしさでせう！　森の中でも、丘の上でも、私を長閑さが助けてくれます。靜けさが助けてくれます。』

1　ワグネルがベートーヴエンの聾疾に關して書いた立派な記錄を參照せよ。（『ベートーヴエン』一八七〇年）

2　彼は動物を愛して、憐れんだ。歴史家フォン・フリンメルの話は、涙の頃捕へようとした蝶を悉くベートーヴェンにハンケチで追ひ拂はれたので、久しい間無意識に彼を嫌つたといつてゐる。

彼の心の落着が、ある中休みをそこに見出した。　1彼は金の心遣ひに惱まされた。彼は一八一八年に書いた。『自分は乞食になり下り掛けてゐる。而も自分は必要物を缺かない振りをしてゐなければならない』又外ではかう書いた。『「第百六作、ソナータ」は、差し迫る狀態の下で書かれた。パンのために働かなければならないといふことは辛い。』スボールがいふのには、彼は靴が破れてゐて外出が出來なかつたことが屢々であつたといふ。彼は出版者に非常な額を借金してゐる。それで彼の作曲からは何にも這入つて來なかつた。豫約で出版した『ニ調彌撒曲』は、購讀者を七人しか得なかつた。(そのうちには音樂家が一人もゐなかつた)。彼はそれ〴〵三月も掛つた、美しいソナータに對しても僅かに三十乃至四十ダカットを得たばかりであつた。彼が心血を注いで書いたと思はれる。彼の作中最深遠な『第百二十七作、第百三十作、及び第百三十二作、四部合唱曲』は、ガリチン公爵のために書かれたものであつたが、公爵はそれに支拂ひすることを怠つた。ベートーヴェンは、家事の煩ひや、彼に當然歸す年金を得るため、或ひは一八一五年

に肺病で死んだ、弟のカールの子である、甥の後見になつてゐるための果てしない訴訟やに疲れ切つた。

1　彼は『あらゆる同時代者のうちで、彼が最も尊敬した一人』なるケルビニに宛てゝ親しく書いた。

ケルビニは答へなかつた。

彼はその心に充ちるあらゆる心勞と、献身とをこの子の上に注ぎ掛けた。けれども彼は殘酷な苦しみに酬はれた。それは恰かも一種の特別な運命が、彼の天才が糧を缺かないやうに、彼の慘苦を絶えず再び新たにして、積み重ねるに腐心したかと思はれるばかりであつた。初めに彼はカールを連れ去らうとしたカールの母とそのために爭つた。『おゝ、我が神よ、』と彼は叫んだ。『楯にして、守り手なる、我が唯一の隱れ家よ！　あなたは私の靈魂の奥底を見透し給ふ。そして私のカールを、私の寶を爭ふものに苦痛を與へなければならない際に私が感ずる苦痛を知り給ふ。1私が如何に呼んだらよいかを知らない偉大な存在者よ、我が願ひを聽き屆け給へ。あなたの創造物のうちで最も不幸なものがする熱烈な祈りを聽き屆け給へ！』

1　『自分は決して復讐しない。』と彼はシュトライヘル夫人にも宛てゝ書いた。『自分が他人に遂ぼさ

るを得ないのは、たゞ自分を守るか、或ひは人を害ふことを防ぐかするに必要なことをする時ばかりである。』

『おゝ神よ、私を助け給へ！　あなたは私を人々の掌中に全く打ち棄てはなさらないでせう。何故なら私は不正と結托することを願ふものではありませんから！　私があなたに捧げる祈りを聞き給へ。せめてこの後私のカールと一緒に生きて行けますやうに！……おゝ殘忍に宿命に、無容赦な運命よ！　否、否、自分の不幸は終る時がないであらう！」

然るに、かくも熱愛されたこの甥は、伯父の信認に價しないことが明かになつた。ベートーヴェンと彼との間の通信は、ミケランジエロとその兄弟とのそれに劣らず、悲しく不快なものであつた。たゞそれよりも單純で、哀れではあるけれども。

『自分はもう一度又言語同斷極まる忘恩に酬ひられねばならないのか。あゝ、よし、約束が破られなければならぬなら、破られるがいゝ！　このことを耳にする公平なものはお前を憎むだらう。もし我々の間の契約が重た過ぎるなら、神のみ名に依つて、神のみ心のまゝにならしめ給へ！　自身はお前を攝理に委ねる。自分は出來る限りのことをした。自分は最後の審判の前に立つ

用意が出來てゐる！。』

『お前は甘やかされてゐるとしても、單純で、眞實であるやうにお前に敎るへことは難かしくはあるまい。自分の心はお前の僞善的行爲に實に苦しめられた。それで自分には忘れることは困難だ……神は自分を見たまはず。自分はお前とは千哩も離れてゐたいと望むばかりだ。あの情けない兄弟とも、この忌はしい一族ともだ……自分はもう決してお前を信じまい。』そして彼は『不幸なお前の父——といふより寧ろ、お前の父でないもの』と署名した。然し許しは殆ど直ぐに來るのであつた。

『我が愛する子よ！　もうこのことは止めよう！　自分の腕に抱かれるがいゝ。もう酷い言葉は一言もいふまい。自分は變らぬ愛でお前を迎へよう。我々は親しくお前の未來のためになすべきことを相談しよう。名譽に掛けてもう咎めない。咎めても何にもならない、お前は同情と、誰にも優つて愛するに遺ひないの外は自分から豫期しないでいゝ。來れ、お前の父親の信實な胸に來れ。この手紙を受け取つたら即刻に來るがよい。家に來るがよい。』（そして上書きには佛蘭語で書いた。『お前は來ないと、自分を死なすに遺ひない。』）

『歎いてはいけない。』と彼は乞ふた。『いつも自分の愛する子があれ、お前が既にさうしてゐる

と多くの人が主張するやうに、お前が果して自分に僞つてゐたら、それは何たる恐ろしい不調和だらう……では又。お前に生命こそ與へなかつたれ、それを保護したことは確かで、そしてお前の道德的發達に出來得る限りの注意を拂つたものは、父のより深い愛を以て、心底からお前が善と正義との唯一の眞實な道を辿ることを願つてゐる。

お前の信實なる養父。1』

1　伯林でカリスヘル氏が發見した手紙には、ベートーヴェンがどんなに心から、その甥を『國家有用の市民』たらしめようと欲したかといふことが示されてゐる。（一八一九年二月一日附）

この智識がまるでなくもない、ベートーヴェンが大學に入れようとした甥の未來に對してあらゆる夢想を掛けた舉句の果て、彼はそれを商人にすることに同意せざるを得なくなつた。然しカールは賭博場に入り浸つた。そして負債を拵らへた。人が信ずる以上に屢々起る、悲しい現象からして、伯父の道德的偉大さは、甥を善くするよりも、却つて惡くした。それはカールが『自分は伯父が善くしようとしたゝめに一層惡くなつた。』といつてゐる。その悲慘な靈を明らかに示す

恐ろしい言葉で語つたやうに、彼を激せしめて、反抗に促がし立てた。彼は一八二六年の夏、短銃で自分の頭を撃つ破目にまで陷つた。彼はそれでも死にはしなかつたが、然し命が危かつたのはベートーヴェンの方であつた。1　彼はこの恐るべき驚愕から遂に恢復せずにしまつた。カールは恢復した。彼は伯父を苦しませに生きた。彼は伯父の死を早めたことが尠少でなかつたのである。且つその死に際しても傍はらにゐなかつた。『神は自分を見て給はない。』とベートーヴェンは數年以前に方つて甥に宛てゝ書いた。『神は何にかに自分の眼を閉ぢさせ給ふであらう。』而もこれは彼が『我が子』と呼んだのでないものがすることになつてゐた。

1　シンドレルは、その時彼を見てかういつてゐる。彼は全然打ち碎かれて、意力を斷たれ、俄かに七十歳の老人のやうになり果てゝしまつたと。カールが死んだら、彼も死んだかも知れなかつた。彼はその後間もなく死んだ。

＊＊

ベートーヴェンがその不抗な『歡喜の頌歌』をうたひに掛つたのは、この深淵の深みからであつた。それは彼の一生の目論見であつた。早く一七九三年にも、彼はボンにゐてそのことを思つた。1 彼は喜びを祝つて、それを彼の大作中一篇の讃歌たらしめようと一生涯願つた。彼は頌歌の正確な形式と、彼にそれを入れることの出來る作品とを得ることに常に努めてゐた。彼はその『第九シンフォニー』に於てすら、決定を得てゐなかつた。極めて最後に至るまで、彼は『歡喜の頌歌』を『第十或ひは第十二シンフォニー』に延ばして取つて置かうとした。『第九シンフォニー』は現今必らず呼ばれるやうに、『コーラル・シンフォニー』とは題されないで、『歡喜の頌歌の最後の合唱あるシンフォニー』と題されてゐることに注意しなければならない。一八二三年七月にも、ベートーヴェンは尙それに器樂のフィナーレを向けることを考へてゐた。でこれを彼は彼に『第百三十二作、四部合奏曲』に用ひた。ツエルニーも、ゾンライトネルもいつてゐるが、ベートーヴェンは一八二四年五月の演奏後に方つてもこの考へを棄てなかつたと。

1 フイスシエニッヒよりカーロット・シルレルへの手紙（一七九三年一月附。）シルレルの歌は一七八五年に書かれた。實際の樂想は一八〇八年に、第八十作、ピアノ、オーケストラ、及び合唱のためのファンタジー』に現はれ、又一八一〇年に『ゲーテの言葉 Kleine Klumen, Klaine Klaetter（小さき

花、小さき葉）に附した歌』に現はれた。自分はボンのエリッヒ・ブリーゲル博士所有に掛かる一八一二年の雜記帳中で、『第七シンフォニー』のスケッチと、「マタベス」へのオーヴアチュアの計劃との間に、彼が彼に『第百十五作、オーヴアチュア』（名づけ日の祝ひ）で使つた樂想にあるシルレルの言葉を採用しようとしてゐる企てを見た。『第九シンフォニー』中の數箇の器樂的導因は一八一五年以前に方つて現はれた。かうしてはつきりした『歡喜 の樂想は、一八二三年に雜記帳に書き記された。やゝ後に出來た三部合奏曲と、それからアンダンテ・モデラトーと、及び最後に現はれたアダジオとを除いては、『シンフォニー』の他の一切の曲調も亦さうである。シルレルの詩に關してと、現今『歡喜』といふ言葉を『自由』といふ言葉に代へて說かれる嘘の解釋に關してとは、『自由雜誌』（一九〇五年七月八日號）所載シャルル・アンドレの輿論を見よ。

ベートーヴェンの雜記帳と、彼が作品の外の部分に、違つた仕方で肉聲を入れようと試みてゐる樣々の企てとで證される通り、彼はシンフォニーに合唱を挿入するには多少な技巧上の困難に出過つた。アダヂクの第二の主題 1 のために描いたスケッチの中で彼は書いた。『合唱はこゝに入れるとよさゝうである。』けれども彼はその忠實なオーケストラに別れる決心が着かなかつた。

『觀念が自分に泛ぶ時には。』と彼はいつた。『自分は肉聲でなしに、器樂でそれを聞く。』そこで彼は肉聲を使ふ部分を出來るだけ彼に延ばした。初めに彼はフィナーレの吟誦調部にのみならず、歡喜の樂想そのものをさへも器樂に上さうと欲した。[2]

1 伯林圖書館。

2 まさしく言葉が下にひそんでゐるかのやうに。

然し我々はこれらの躊躇と遷延との理由を見るには、更に一歩を進めなければならない。意味は極めて深遠である。この不幸な人は絶えず悲哀に惱みながらも、常に歡喜の美を歌ふことに憧れてゐた。そして年は、不斷に彼はその情熱と悲哀との施夙に吹きまくられて、仕事を延ばしてゐた。たゞ最後に至つて漸く彼は仕遂げたのである。然し何たる成功を以てゞあらう！

初めて歡喜の樂想が現れるや、オーケストラはぱたと止る。かくて歌の始めに俄かな、思ひ掛けない物質が與へられる。そしてこれこそ眞の感動である。この樂想こそまさしく靈妙である。歡喜は空上の靜寂に包まれて天から降る。それは冷氣を以て惱みを靜める。そしてそれが與へる第一の印象は、それが悲しみ惱む胸に泌み入る時に方つて、あるベートーヴェンの友が『人は彼

のあの柔しい、靜かな眼を見てゐると、何だか泣きたくなつて來る』といつたやうに柔しいものである。樂想が先づ肉聲に入る時には、嚴肅な、寧ろ重々しい物質をなして現はれるべースである。然し、次第に、歡喜が我々の心を捕へる。それは眞の戰ひである。悲哀との戰爭である。我々は行進する軍隊のリズムを聽き取ることが出來る。テノルの熱切に嚙ぐ歌にも、打ち震ふこの全頁にも我々はベートーヴェンその人の息使ひを殆んど感じることが出來る。彼が嵐のさ中にあるリヤ王のやうに狂憤に我れを忘れつゝ、作品を構成しながら、野をさまよつた時の息使ひのリズムと靈感を得た叫びとを殆んど感じることが出來る。この戰鬪的な歡喜に次いで來るものは宗教的な法悅である。それから神聖な躁宴が次ぎ、戀のまことの忘我が次ぐ。打ち震へる全人類は腕を空に上げ、この喜びに向つて驅け寄り、この喜びを胸に抱く。

この偉大なる作品は公衆の無關心を征服した。維也納の不眞面目な群衆は一時心を動かされた。が彼等は尙ロッシニと、その伊太利歌劇とを喜んだ。ベートーヴェンは屈辱と、悲哀を感じて、ロンドンに行つて住むばかりになつた。そして彼の『第九シンフォニー』をその地に與へようと思つた。と再び、一八〇九年にしたやうに、ある高貴な友等が年金を彼に送つて、その國を離れないやうに乞はれた。彼等はいつた。『我々はあなたが深いあなたの信仰に鼓吹された情操を表現さ

れた尊い音樂の新作Ⅰをお書きになつたことを知つてゐます。あなたの偉大な靈魂に透徹する超自然な尖りが作品を輝やかしてゐます。尙我々はあなたの靈感を得られたシンフォニーの花冠が不朽な花を增されたことも知つてゐます……この數年あなたを失つてゐたことは、眼をあなたに向けてゐるものを悉く苦しめました。[2] 誰れも生きてゐる人のうちでこれほど高いところにゐられる天才の方が沈默してゐられた間に、他の外國藝術が我が國に根を下ろして、獨逸藝術の作品を忘れしめようとしたといふことを思つて悲しまなかつたものはありません……たとへ流行はどうあらうとも、あなたからのみ、國民は新生命を期待してゐます。新たな月桂冠と、新たな眞と美との時代を期待してゐます……我々の願ひが直きに果たされるといふ希望をどうか與へて下さい。さうすればあなたが我々と、世界とに授けて下さる賜物のお蔭けに依つて、來るべき春は再び倍も花が咲き揃ふでせう！』[3] この貴い請願はベートーヴェンが、單に藝術上のみにとゞまらず道德上に又、どれほどの力を獨逸の選良に及ぼしたかといふことを示してゐる。彼の天才を讃美しようと欲した彼の追隨者等に先づ浮んだ言葉は、科學でも、藝術でもない。信仰である。[4]

1 『第百二十三作、ハ調彌撒曲』

2 ベートーヴェンは家庭の爭ひや、窮乏や、その他百般の心遣ひに煩はされて、一八一六年から一八二一年までの五年間に、ピアノの作品三篇（第百一作、第百二作、第百六作）を書いたのみにとゞまつてゐた。彼の敵は彼を疲れたのだといつた。彼は一八二一年に再び書き出した。

3 一八二四年二月。署名したのはツエー・リヒノフスキー公、モーリス・リヒノフスキー伯、モーリス・ド・フリース伯、エム・ド・ディートリヒシユタイン伯、エフ・ド・パルフイー伯、ツエルニン伯、イグナーツエ・エドレル・ド・モゼル、カール・ツエルニー、アツペ・シユダツトレル、アー・デイアベルリ、アルタリ商會、シユタイネル商會、アー・シユトライヘル、ズメスカル、キーゼウエツテル等。

4 『自分の道德的性格は世に認められてゐる。』とベートーヴェンは甥の後見に對する權利を主張するために、（一八一九年二月一日）維也納市廳に向つて昂然としていつた。ワイセンバツハの如き高名な作家等すら、その作品を彼に捧げるに足ると見做した。

ベートーヴェンは深くこれらの言葉に感動した。彼はとゞまつた。一八二四年五月七日に、『ニ調彌撒曲』と、『第九シンフォニー』との維也納に於ける最初の演奏が行はれた。成功は驚ろくばかりであつた。そして彼の族接は殆んど騷動にも近かつた。ベートーヴェンは現はれると、五回の拍手を浴びせられた。然るに市の嚴格な儀式に依れば、皇室の入御に方つても三回の拍手しか

行はれない習慣になつてゐた。警官がその表現を制止せざるを得なかつた。シンフォニーは氣が狂つたやうな熱狂を惹き起した。泣くものが澤山あつた。ベートーヴェンは演奏會が終ると、感動して失神した。彼はシンドレルの家に運ばれて、そこで夜一夜翌る朝までも、盛裝したなり、飲みも食ひもせずに、眠り通した。とはいへ、勝利は束の間であつた。演奏會はベートーヴェンに何物をも齎らさなかつた。彼の生活の物質的狀態はこれで少しも變らなかつた。彼は貧しく、病んで、1 孤獨に陷つてゐた。彼は勝利者ではあつたけれども。2 人間の凡庸に對する勝利者、彼の運命に對する勝利者、彼の苦惱に對する勝利者ではあつたけれども。『捧げよ、常に人生の些事を藝術のために捧げよ！ 神は總べてに優り給ふ！』

1 一八二四年八月に、彼は頓死の恐怖に襲はれた。卽ち『自分が實によく似る祖父のやうに』と彼は一八二四年八月十六日、ベッハ博士に宛てゝ書いた。

2 『第九シンフォニー』の初演は、獨逸では一八二五年八月一日にフランクフルトで、倫敦では一八二五年三月二十五日に、巴里では一八三一年三月二十七日に音樂學校で行はれた。一八二六年十一月十四日に、メンデルスゾーンは十七歲で、伯林のイエーゲルハルレに於てピアノでそれを演奏した。ワグネルはライプチッヒの學生であつた時、その全部を手寫した。そして一八三〇年十月六日附、出

版者ジョット宛 手紙のうちで、そのシンフォニーをピアノの二部曲に縮めることをいひ出してゐる。『第九シンフォニー』はワグネル一生の行路を定めたといつていゝ。

結語

彼はかくてこの全生涯の目的を果した。彼は嵐を支配したこの靈魂の勝利の上にとゞまり得たであらうか。確かに彼は、この過去の惱みの日からの休らひを當然感ずべきであつた。實際彼の最後の四部合奏は不思議な前兆に充ち渡つてゐる。然し『第九シンフォニー』の勝利はそれの性質中にその光榮ある跡を殘したやうに見える。彼が未來に對し、懷いた計劃1、卽ち『第十シンフォニー』や2 バッハの名に於けるオーヴァチュアや、グリルパルツェルの『メルシナ』3、キヨルネルの『オデッセー』、ゲーテの『フアスト』4 の音樂や、『サウルとダビヴとの聖樂』やは、總べて皆彼が獨逸の古大家——バッハとヘンデルと——の力强い靜平に惹かれ、又一層南方——彼が旅することを望んだ伊太利或ひは佛蘭西南方の光りに惹かされてゐたことを示した。

1 「アポロとアポロの詩神とは、まだ自分を死に引き渡さうとは欲してゐないであらう。何故なら自分は彼等に多くの負債を負つてゐるからである。自分は極樂に行くに先立つて、精靈が自分に完成せよと劇まし告げるところのものを後に殘さなければならない、自分は殆んど何にも書いてゐないやうな氣がする。」(一八二九年七月十七日、弟のショットに宛て)

2 ベートーヴェンは一八二七年三月十八日、モシエレスに宛て書いた。「あるシンフォニーの完全なスケッチが、新らしいオーヴァチュアを具へて自分の机上に載つてゐる。」このスケッチは遂に發見されなかつた。たゞ彼の雜記帳にかうあるばかりである。

「アダヂオ・カンチク」古體のシンフォニーに使ふ宗教歌(Hell (Gott dich loben wir. —Allenlja)。獨立な體裁でもよく、走法の序としてもよい。このシンフォニーはフィナーレにでも、アダジオにでも肉聲を入れて獨特なものに出來る。

オーケストラにヴァイオリンを入れたりして、最後の奏部を十倍も增す。肉聲は代る〳〵這入ること。或ひは最後の奏部に何とかしてアダジオを繰り返すこと。アダジオの言葉には希臘神話か敎會の歌を取り、アレグロにはバッカスの祝宴を取る(一八一八年)。既にいつたやうに、合唱の結末は「第九シンフニー」にでなく「第十シンフォニー」に取つて置かうとされたのである。

後に彼はその『第十シンフォニー』に於て「ゲーテが「ファウスト」第二部で企てたやうな、近代世界

と古代世界との調和」を完成したいといつた。

3 主題は妖女に愛されて、捕はれながら、郷愁と、自由の缺乏とに惱む騎士の傳說である。この詩とタンホイゼルのそれとの間には類似がある。ベートーヴェンはそれに一八二三年から一八二六年まで掛つた。(アー・エルハール著)フランツ・グリルパルツエル』(一九〇〇年參照)

4 一八〇八以來、ベートーヴェンは「ファウスト」に音樂を作曲する計劃をしてゐた。(『ファウスト』第一部は一八〇七年の秋に、悲劇と題されて現はれた。彼の最も愛した計劃が出來たのはその時である。

5 「佛蘭西の南! あすこだ、あすこだ!」(伯林圖書館にある雜記帳から)。『こゝから去ること。お前はたゞここの條件でのみお前の藝術の高みに登ることが出來るだらう……シンフォニー一篇、それから行くことだ、行くことだ、行くことだ。夏は航海中仕事をして……それから誰れか他の藝術家と一緒に伊太利とシシリーを旅行しよう。』

シュビケル博士は、一八二六年に彼を見て、彼の顏は微笑んで快活になつて來たといつた。同年、グリルパルツエルが最後に彼と語つた際には、ベートーヴェンの方が疲れ果てた詩人より元氣であつた。『あゝ!』と後者はいつた。『僕に君の力と決斷の千分の一でもあつたら。』時は非であつ

た。王黨的反動が彼等の精神を壓迫した。『檢閲官が僕を殺した。』とグリルドルツエルはつぶやいた。『誰れでも自由に語らうと思ふなら、北亞米利加へ行かなければならない。』然し如何なる權力もベートーヴエンの思想を抑壓し得なかつた。「言葉は鎖に繫がれてゐる。然し、幸ひにして、音樂は尙自由だ。』と彼は詩人リツフネルに宛てゝ書いた。ベートヴエンのは自由の大聲であつた。恐らく當時の獨逸思想中唯一のものであつたらう。彼はそれを感じた。屢々彼はその藝術を以て『哀れな人類のため、來るべき人類のために、その勇氣を恢復させ、その疲勞と卑怯とを振ひ落させよ。』彼を立たしめた義務に就いて語つてゐる。『現在では。』と彼は甥に宛てゝ書いた。これらの慘めな反抗的な人心を鞭つて活動させる强大な精神の必要があるのだ。』ミユルレル博士は一八二七年にいつた。『ベートヴエンは政府や、警官や、貴族のことに關して自由に、公然とより說を吐いた。警官はこれを知つてゐたが、その批評や諷刺を無害な空想として目した。そして彼等はその天才がかくも異常な聲名を持つた人に干涉しようとしなかつた。』と。1 かくてこの不撓な意志を抑ゆ得るものは何もなかつた。その意志はさながらにや悲哀を弄ぶかのやうに見えた。これらの晩年に書かれた音樂は、それが作曲された境遇は痛ましかつたに拘はらず2 ヒロイツクな。樂しげな輕蔑の全然新たな、皮肉な特性を屢々與へてゐた。彼が仕上げた極めての最後の作品たる、

『第百三十作、四部合奏曲』の新らしいフィナーレは、非常に快活である。これは彼の死に先立つこと四月なる、一八二六年十一月の作であつた。事實この快活さは並々のものではない。といふのにモシエレスがいつてゐる、その當時の快活さは耳に快くない、痙攣性の笑ひである。屢々それは苦しみに打ち克つた結果たる、不自然な微笑みである。が何れにしても、彼は勝利者である。彼は死を信じてゐない。

1 一八一九年に、彼は『結局、基督だつて十字架に掛けられた猶太人に過ぎない。』と高聲でいつたゝめに警官に尾行された。彼はその時『二調彌撒曲』を書いてゐた。彼の宗教的感感の自由さを十分に示すのはその作品があるのみである。(ベートーヴエンの宗教觀に就いては、テオドル・フオン・フリンメルの『ベートーヴエン』第三版、ヴエルラツハ・ハルモニエ出版と、ゲオルヒ・ミンルレル編『ベートーヴエン第二卷、ブリヨツヒンゲル出版參照) 政治に於ても劣らず自由に、ベートーヴエンは政府の罪を攻擊して憚るところがなかつた。彼はいろ〳〵攻擊した中に、その手續きの遲延に妨げられる裁判の執行や、愚劣な警察法や、あらゆゝ個人の創意を殺して、あらゆる行爲を麻痺させる官廳の無作法な怠惰な吏員や、墮落した貴族の不公平な特權や、多額な稅金等を攻擊した。彼の政治的同情は當時英吉利に注がれてゐたやうに見えた。

2　甥の自殺。

けれども、死は來た。一八二六年十一月の末つ方に、彼は風邪から肋膜炎に變化した。彼は甥の未來を調定するために各企てた旅から歸ると、維也納で病みついた。[1] 彼は友から離れてゐた。彼は甥に醫者に行くやうにいつた。不德漢は彼の委任を忘れ去つた。そして漸く二日後に思ひ出した。醫者は遲れて來過ぎて、拙劣にベートーヴェンを取り扱つた。三箇月間、彼の逞ましい體格は病ひと戰つた。一八二七年一月三日に、彼はその愛する甥を主な指定遺言執行者とした。彼はラインのほとりなる親しい友等の上を思つた。彼はウネゲレルに宛てゝ書いた。『自分はどんなに君と話がしたいだらう！　けれども自分は弱り過ぎてゐる。自分は心に君が抱けるばかりである。君と、君のロールヘンとを。』ある英吉利の友等の義俠がなかつたら、貧は彼の最後の瞬間を更に暗くしたことであつたらう。[2] 彼は非常に柔しく、辛抱强くなつた。[3] 一八二七年二月十七日臨終の床で、彼は三回目の手術を終り、四回目のを待つ間に、[4] 全然の落着きを以て書いた。『自分は耐え忍んでゐる。それで自分はあらゆる不幸がある惠みを一緒に持つて來るものだといふことを考へてゐる。』この恩惠とは釋放であつた。――彼が死ぬ時いつたやうに、『喜劇の大詰』であつた。我々は寧ろ悲劇の大詰といつてよからう……彼は恐ろしい雷鳴か鳴りしきる激しい大風と、吹雪との荒れ狂ふ絶頂に世を去つた。一八二七年三月二十六日に、ある豫期しない人の手が彼の眼を閉じた。

1　一九〇六年四月一日、及び十五日號の『醫學時報』に載せられたクロッツ・フォレスト博士のベートーヴェンの最後の疾患と、死とに關する論文參照。尙醫師の質問が記されてゐる會話帖にも、一八四二年の『維也納新聞』に出た醫師その人ワウルフ博士の記事にも詳細な記載がある。

2　英吉利のフィルハーモニー協會は彼に百磅と、ヘンデルの立派な刊本とを送つた。ベートーヴェンはその最後の日に方つて、それをこの上もなく喜んだ。

3　歌手、ルドウイッヒ・クラモリニが公けにした回想記は、ベートーヴェンをその最後の疾患中に訪れた感動すべき話が傳へられてゐる。彼はベートーヴェンが靜かな落着きと、心を動かす柔しさとを持つてゐるのを見た。（一九〇七年九月二十七日『フランクフルテル・ツアイトング』參照）

4　手術は十二月二十日と、一月八日と、二月二日と、それから二月二十七日とに行はれた。

5　若い音樂家、アンセルム・フッテンブレンネル。『神は頌むべきかな』とブロイニングはいつた。『我々をして神がこの長い、痛ましい殉教を終らしめたことを感謝せしめよ。』

ベートーヴェンの稿本と家具とが全部、千五百七十五フロリンで競賣された。目錄には二百五十二枚の原稿と、音樂の本とが含まれてゐて、それが九百八十二フロリン三十七クロイツェルの額を越さなかつた。會話帖と、ターゲブツヘルとは一フロリン二十クロイツェルで賣られた。本の中には、ベートーヴェンはカントの『自然科學と天文學』だの、ロードの『天の智識』だの、トーマス・ア・ケンピスの『基督の摸倣』だのを持つてゐた。檢閲官はソイムの『シラキュース廻り』と、コツツエブーの『アデル越え』と、エスレルの『宗教及び神學觀』とを沒收した。

＊＊＊

愛すべきベートーヴェン！　多くのものが彼の藝術的偉大さを讃美した。けれども彼が音樂家中の第一人者であることはいふまでもない。彼は近代藝術中の最もヒロイックな人物であつた彼は惱んで戰つたものゝうちの最も偉大なもので、且つその最善の友である。我々が世の艱難に悲しまされる時、我々の傍はらに來るものは彼である。恰かも彼がある悲しむ母の許に行つて、彈奏して聞かせて、一言も物いはずして彼自身の悲しい諦めの歌に依つてその母を慰めるのを常としたやうに。そして我々が德不德となき凡庸と空しく行ふ永遠の爭鬪に疲れ果てる時、この強い意

志と信仰との大海潮中に新たな力を見出すのはいひ難い惠みである。勇氣の大氣が彼の人格と、鬪爭を發することゝ、1　內なる神を意識して感ずる高揚とから發散する。彼は自然と不斷に交通するうち、2　遂にその深い強い力を同化したやうに見える。グリルパルツエルは、一種の恐れを以てベートーヴェンを愛してゐたが、彼に就いてはかういつた。『彼は藝術が溶け去つて、粗剛な我儘な本質と一致する境まで入り込んだ。』と。シューマンは、彼の『短ハ調シンフォニー』に就いて同樣にかう書いた。『それは演奏される度毎に、恰かも起る度に我々を恐れと驚ろきとを充たす自然の現象のやうに　不變な力を我々の上に振ふ。』と。そして、彼の信友たるシンドレルも『彼は自然の精神を持つてゐた。』といつてゐる。實際『ベートーヴェンは自然の力である。餘の自然に對するこの本質力の爭鬪は、眞にホメロス風の偉大さをなす觀物である。』

1　『自分はある困難を支配しなければならない時には、常に幸福である。』（永遠なる愛人への手紙）

『自分は千百の生活を生きたく思ふ……自分は靜かな生活には適してゐない。』（一八〇一年十一月十六日附、ヴエゲレル宛）

2　『ベートーヴェンは自分に自然の科學に就いて語つて、この研究でも又音樂でのやうに自分を助けた。彼の心を惹いたのは自然の方則ではなくして、その本質的な力であつた。』（シンドレル）

彼の全生涯は荒れる日のやうである。初めには――軟やかな晴れた朝で、微風はあるかも知れないけれども、殆んど靜まり直つてゐる。だが靜かな空氣の中にも既にこそかな囁やかしと、暗い前兆がある。大きな影が現はれて、通り過ぎる。悲痛な雷鳴。さはめく怒るべき沈默。エロイカ』と『短ハ調』との猛り立つ疾風。とはいへ、日のうらゝかさは尙去らない。喜びが尙喜びでゐる。空の輝やきが蔽はれてゐない。悲哀か一閃の希望をとゞめてゐる。が一八一〇年以後には、靈の靜平が亂されてゐる。不思議な光りが輝やいてゐる。霧が彼の最も深い思想を籠める。より明らかなある思想が氣の立ち昇るやうに現はれる。それが消え去る。吹き散らされる。が又もや新たに形成される。それは憂鬱な、氣儘な陰晴を以て心を暗くする。屢々音樂的思思が全く消え去るやうに見えることがある。沈み去るやうに見えることがある。がそれは作品の最後に於てメロディの眞の嵐のうちに再び現はれるがために過ぎない。喜びでさへも荒々しい。騷立つ特性を帶びた。苦い感情が彼のあゆる情操中に打ち混つて來る。1 嵐の夜が來るやうに集る。濃い雲が嵐を胎んで大きくなる。電光が夜の黑暗々たる上に閃く。颶風の頂上が近づいてゐる。と俄かに、嵐のさ中に、暗が掻き消される。夜が驅逐されて、明らかな、穩やかな大氣が意力の活動のみで

回復される。これは何たる勝利であらう！ 如何なるナポレオンの戰鬪がこれに比較し得られやう？ この超人的な努力の光輝、この病ひに惱む孤獨な精神が嘗て得たうち最も顯著な勝利に比すれば、アウステルリッツの光榮が何であらう？ 世界に歡喜を拒まれた悲哀の化身は 自ら世界に與へるために歡喜を創造した。彼は自らその生涯を回顧して昂然としていつたやうに、歡喜を自己の慘苦から鍛錬した。でこの言葉こそ實に彼のヒロイックな全靈魂の標語をなしてゐるものであつた。卽ち

苦惱を經たる歡喜

（一八一五年十月十九日、エルデディ伯爵夫人へ）

＊＊＊

1『おゝ、人生とは何に善いものだらう。だが自分の生活は永久に苦くされてゐる。』（一八一〇年五月二日、附ウエゲレル宛の手紙）

٣ ٢ ١

一

ミレーとその作品との道德的特質——その佛蘭西藝術に於ける地位

ミレーの人格は十九世紀の佛蘭西藝術中での驚るべきものである。彼は他の時代、他の民族に屬し、別樣な、思想の形式に屬する人なのかとも思はれる。彼は佛蘭西藝術中で孤獨である。殆んど他國人だともいへる。彼はその讃美者にも、非難者にも同樣に誤解された。前者は新らしい民主々義の大膽で、誠實な解明者だとして彼を揚げた。彼者は苦しんでゐる勞働者のメロドラマ式な畫を中流支配階級の前に示した演說口調の社會主義者だと彼を目した。批評が彼の全作品中に政治的諷刺を認めた。『種蒔き』の姿勢は『極幾みかの葡萄彈』を投げて、人民を威嚇してゐるやうに見えた。『落穗拾ひ』はポール・ド・サン・ヴィリトルに依つて『赤貧の三運命』と呼ばれた。ボドレールとユイスマンスとは、彼の農夫に革命的演說家の精神があるとしてゐる。彼等が總べ

て彼の畫に政治的及び社會的題目を求めるか、或ひは戯曲的効果を求めるかしてゐる。然し、これほどミレーの心に遠いことはない。彼は感傷的、メロドラマ式な畫を嫌つた。彼は政治に冷淡であつた。彼は社會主義を認めなかつた。

ミレーはその批評家等に彼が現はしてゐるといはれた演說風の意味なるものを理解し得なかつた。彼はいつた。『思ふに、自分の批評家等は趣味も教養もある人々である。だが自分は彼等の身にはなれない。そして自分は生涯のうちに野原以外のものを見たことがないから、この見たものを率直に、出來るだけよく語らうと勉めるのである。』ある人が彼の『野に生れた小牛を持ち歸る農夫等』の表現を極めて文學的に、巧みに說明する勞を取つた時に、彼は皮肉な常識を以てかう答へた。『二人の男が擔架で物を運ぶ表現は、その腕の先きに懸る重さの如何に依つて決る……重さが同じければ、寺院の櫃を運ぶのでも、小牛を運ぶのでも、金塊を運ぶのでも、石を運ぶのでも、重力の法則に從つて、その表現は重さのみしか別に現はさない筈である。』彼は幾度か激しい言葉で同時代の藝術の演劇的な傾向や、又演劇そのものに對してすら懷く嫌惡を口にした。彼はいつた。『リユクサンブール美術館は、自分に演劇に對する嫌惡を懷かしめた。自分は男女優の誇張や、嘘僞や、作り笑ひをいつも非常に嫌つてゐた。自分はこの特殊な範圍に屬するものを少

し見て、彼等が他人の人格に扮することに勉める結果、自己の人格を知らうとしなくなつてゐるのだと固く信ずるやうになつた。で彼等はこの役割につれてのみたゞ物をいふやうになつたので、眞理も、常識も、造形美術の單純な感情も失つてしまつてゐるのだと。人は眞の自然な藝術を作らうと思ふなら、演劇を避けなければならない。』

彼はこの味方や、敵が彼を社會主義の徒として主張したことに對しては、更に激しく反對した。一八四八年の革命當時に生作した多くの佛蘭西藝術家と同樣に、彼は當然、民衆に惹きつけられる友愛的な同情を感じた。然しクルベーを除いては、ミレーも、これらの畫家の最大な人々も、皆一般古人の要求に同じなかつたことは注意すべきである。コローは周圍に何が行はれるかも知らずに、靜かに、穩やかに、革命を憎んで『藝術は愛だ』といつて、全く政治の外に生きた。テオドル・ルソーは孤獨を渴望すると共にあらゆる政治的若しくは藝術的の徒黨を輕蔑していつた。『藝術はそんなものと何の關係があるのだ？　藝術はある孤獨な人が、その得て自分のためになる答へがその後幾時代に及んでも、人類のためにもなるといふことを確信して、自然の神祕を研究してゐるあのさゝやかな、捨てゝ顧みられない幽處からでなければ出ては來るものでない。』

曾に風景畫家であつたのみにとゞまらず、又、特に露骨な寫實で描いた農民畫家であつたところ

から、人より以上に社會主義者の名を得たミレーは、自分にかうしてつけられた貼紙に一生抗議を唱へ通した。自分は倶樂部言葉でいはれるやうなデモリヘ（デモリラチック）な方面を全力を擧げて否認する。』と彼は一八六七年四月二十三日に書いた。『自分は農夫の中の農夫だ。』彼はコローと共に『藝術の使命は愛の使命であつて、憎みの使命ではない。それで貧者の苦しみを描く時にも、藝術は富裕な階級に對する嫉妬を刺戟することを目的とすべきでない』と考へた。彼は富者に對しては何等の怨恨も懷かなかつた。寧ろ憐憫を懷いた。『哀れな年端の行かない皇子！』とある日皇太子洗禮式の壯觀が告げられると、彼は憐んでいつた。又田舍に對する彼の愛も、農夫の缺點に盲彼に目を塞がしめなかつた。解放と進歩とに向つて進む反逆を行ふ人々を描くのを欲しなかつたばかりでなく、彼は『彼の描くものがその位置に縛されてゐる外觀を表はして、それ以外の觀念を持つとはとても思はれないやうに』したいと書いた。彼は進歩を信じない。といふか或ひは、社會的、及道德的進歩といはれるものを全然交渉するところがない。藝術の進歩を信ずるのみである。『各人がなすべきことは』と彼は一八五四年にいつてゐる。『自己の專門職業中で、進歩を求めることにある。自分にはそれが唯一の道である。これ以外のことは總べて夢想か計劃かである。物の永遠と不動と、觀念は、深く彼の靈魂に刻み込まれた。何物もこれに優つて革命

的觀念に反對したものはない。又實に如何なる政治的觀念にもこれ以上に反對し得るものはない。ではかういふ觀念が彼にあるといはれるやうになつたのは何故だらうか。

この誤謬の原因は、ミレーのうちに異常な悲觀の力があるといふことである。異常な悲哀の激しさがあるといふことである。總べてのものがそれを見た。總べてのものがそれに打たれた。然し何人もそれを誤解した。何人もその中に一種の苦い批評を讀んだ。一種の社會に對しての悲難を讀んだ。一人の佛蘭西作家にも、藝術家にも、この悲觀、この悲哀が激動した反抗の狀態でなく、誰れもがさうあるべきだと思ふほど深くこの悲觀と悲哀との印象を受けた人の自然で、普通な狀態だといふことが認められなかつた。あらゆる佛蘭西藝術は、殆んど一世紀間基督敎とかけ離れてゐた——それは全體として、反基督敎的だともいふことが出來る——かくて苦難を一つの法則として見、一つの善として見る基督敎の見解が殆んど理解し難くなつた。あるものは苦難をまのあたりに見て　それと戰つて、それを呪ふ。又あるものは醜い、不快なさまとし、それから眼を反ける。そして忘れ去らうと勉める。そして歡喜の追及、獲得、或ひは想像に身を捧げる。彼等のうちの何人もミレーが苦難のうちに嚴肅な、宗敎的な歡喜を見たといふことを理解し得なかつた。その何人も疲勞に壓倒されて、軛の下にある獸のやうに地上に屈む『落穗拾ひ』や、『獄

を持つ男』を見て、それを描いた藝術家が苦痛は道徳的であるが故に自然であり、善であり、又善であるが故に美であると考へたといふことを悟らなかつた。

『君は恐らく享有し得る限りの安易と、平靜とを感じながら、木蔭に座つてゐる。』と彼は一八五一年に書いた。『君は薪を脊負ふ憐れな人物が、ある小徑から出て來るものを見る。この人物が君の前に現れる突然さと、その眼につき刀とは、直ちに君の心を人生の悲哀に誘ふ……

Quel plaisir a-t-il eu depuis qu'il eitan monde ?
En est-il un plus pauvre en la machine ronde ?

(彼はこの世に如何なる快樂を見たらう?)
(これより貧しいものが地球の上にはゐるであらうか)

ラ・フォンテーヌ『死と木樵り』……君は耕やされた土地で、かういふ人物が土を堀り返してゐるのを見る。時々一人が腰を延ばして、その手の甲で額の汗を拭ふのを見る。これはあの人々が我々に信ぜしめようとするやうに、愉快な樂しい勞働であらうか。だがこゝにこそ自分には眞の人生があるのだ。偉大なる詩があるのだ。』

かうして、勞働の苦痛を現はすことゝ、又同時にこれらの苦痛のうちのあらゆる人生の詩と美

とを現はすことゝが、ミレーの思想と藝術との究極の目的である。『自分の綱領は勞働である。あらゆる人が肉體の刑罰を課せられてゐる。「汝は額に汗してパンを食はん」と昔から書かれてゐる。それは決して變らない不動の運命である』(一八五四年)。我々はこゝに何等の反抗も見ない人生を更に善くしようといふ願ひを見ない。人生は悲しい。がミレーはそれをあるがまゝに愛する。もし悲哀がなかつたら、ミレーはそれを新たに作つたらうともいつていいほどである。それほど悲哀が彼に與へた魅力は異常なものであつた。『自分は名を奪はれたくない。』と彼はいつたことがある。『おゝ! 野と森の悲しみよ。お前を見なかつたら喪心が實に大きいに違ひあるまい!』(一八六六年)。彼に取つてはそれは深い、生れながらの要求であるのである。『自分が立つ憂鬱の土臺』と彼は一八七二年十一月二十五日に書いてゐる。彼を知るものは、子供の時から、その憂鬱な氣質に打たれた。『あゝ、哀れな子よ。』と彼の村の老僧はいつた。『お前は苦痛を澤山お前に掛けるに違ひない心を持つてゐる。お前はどんなにお前が苦しむやうになるだらうかといふことを知らない。人の誕生日は歡びの日と認めらるべきでなく、憂ひの日と認めらるべきだ』といつた。老ミケランジェロの樣に、ミレーは新年とか歳末とかいふ樣な、多數の人に善ばしく見えた日程悲しんだことがなかつた。といふのに彼の追想の悲哀が豫感の悲哀と混り合つたからである。『今夜も一年が

又終るのだ。』と彼は叫ぶのである。『何といふ悲しさだろう！　俺はお前達の年が出來る丈け少なければいゝと思ふ。』彼は歡びを知らなかつた。と自らいつてゐる。『自分には歡ばしい方面の現はれたことがない。自分は歡びとは何だか知らない、自分はそれを見たことがない。自分が知る一番喜ばしいとは靜寂と沈默とである――』（一八五一年）。とはいへ、彼は不安の徵候も、喪心の徵候も現はさない。彼のは眞面目な、平和な憂鬱で、彼の樣なものゝ靈魂にひそやかな快味を與へる。――ラ・フォンテーヌのいふ『憂鬱な心の秘密な快樂である。』然しラ・フォンテーヌに取つては、この感情にはヂレッタントの調子がある。ミレーに取つてはまるでさういふものがなかつた。彼は己れを愼重に匿しながら、遠くから、他人のうちに貧困を觀察する藝術家ではなかつた。彼は自分の身に貧困を知つてゐた。そして驚きもせず、逆らひもせずにそれを迎へた。

彼の時代の主な佛蘭西畫家、分けても偉大な風景畫家の生涯は、悲しむべき殉教錄を編んでゐる。コローやジュール・デンブレの如き、極めて僅かな例外を除いては、殆んど總べてが窮乏と、赤貧と、飢餓と、病苦とあらゆる不運と冷酷とに惱まされた。偉大なテオドル・ルソーは、その生涯の大半を恐るべき貧窮と孤獨とのうちに送つて、狂氣した妻の傍らで、中風に襲はれて、死んだ。トロワイヨンは發狂して死んだ。ラリラも發狂して死んだ。デュカンは長い一生自らを苦し

め通して、友もなく生き、悲慘に死んだ。ボール・ユエーは文字通りに殆んど餓えて死んだ。困苦のために健康を害はれた。ヂアズですら極貧と肉體苦の惱とを知つてゐた。だからミレーは運命に格段に取り扱はれたのだとはいへない。又彼自らもさう思つてゐない。『自分に多くの他人より不幸であるやうな振りはしない。』（一八五九年）。『自分は多くの人々よりひどい犧牲に自分がなつてゐるとも思はず、別に誰れをも恨まない。』（一八五七年）。彼は共通な運命を分つたのである。彼は他人と同じく貧困と、孤獨と、無關心とに苦しめられたのである。けれども彼は特殊で、他人と異るのは、彼が必然の事として、優れた惠みある運命としてその不幸を迎へた安靜にある。人間の愚や、怨恨や自利は彼の讃美すべき靜平を亂さなかつた。『さうだ、世には惡人がゐる。』と彼は率直にいつてゐる。『だが善人もゐる。そこで一人の善人は我々に多くの惡人の償ひをする……自分は愚痴はこぼさない。』（一八四四年）。彼はその供給の絶えたことが幾度あつたらう？……麵麭屋は彼に麵麭を斷つた。商人が執達吏を差し向けた。一八五三年のある時には、彼には二フランしか手に殘らなかつた。再三彼の手紙の文句にはかうある。『自分はこの日の家賃をどうしたら拂へよう？　先づ何より先きに子供に食はせなければならない。』（一八五六年）。『落穗拾ひ』を描いた一八五七年には、良心さへその考へから恐れて後込みしなかつたら、貧窮が彼を自殺に計

り兼ねなかつた。『晩鐘』を描いた一八五九年には、彼は冬のさ中にかう書いてゐる。『薪が二三日分しかない。その上にはどうして手に入れたならよいか解らない。妻は來月分娩するのに、自分は何もなしで行かなければなるまい。』

この總べてにかて〻加へて、彼は逞ましい農夫のやうな體格をしてゐたにも拘はらず、その送らされた艱難な生活のために疲れ集て〻、よく病氣に罹つた。幾たびか彼は死に掛けた。一八三八年には彼は危篤に陷つた。一八四八年には一箇月も人事を辨へずにゐて、一文もなく、望みが絶え果て〻しまつてゐた。一八五九年には眼が殆んど潰れ掛けて、それから吐血した。剩へ、彼は不斷に惱んでゐて、時としては數週間もひどい頭痛と、眼の痛みとに苦しめられた。けれども彼はその運命の堪え難さに不平を洩らしたことが殆んどなく、決して怒つたことがなく、又驚いたこともない。ある日、手段が全く盡きてゐると、一人の友達が攻府の支出に懸る少額の救恤金を彼に屆けた。とその友はミレーが火の燈りもない家で、寒さに惱む人のやうに、肩を屈めながら、鞄に腰掛けてゐるのを見た。ミレーは率直にかういつた。『ありがたう。善い時に來た。僕等物は二日も物を食はない。だが善い時に來た僕等は二日も物を食はない。だが善よかつたのは子供が苦しまなかつたことだ。今日まで子供には食物があつたのだ。』彼は妻を呼んだ。『さあ、俺は行

つて、薪を買つて來る。實に寒くつて堪らない。』と彼はいつた。彼はその外には一言もいはなかつた。又その事態に就いてももう何もいはなかつた。1（一八四八年）悲哀は彼の最良の友で、嚴肅な喜びを彼に與へたのだといつてもよい。『藝術は慰みではない。』と彼は嘗て書いたことがある。『藝術は戰ひである。人が紛碎される入り組んだ車の輪である。自分は哲學者ではない。自分は苦痛をなさうとは思はない。又自分に苦樂を意としないで。物に恬澹ならしめる定形を發見しようとも思はない。苦痛とは恐らく藝術に最も強い表現力を與へるものである。』（一八四七年）。で事實彼は苦痛の表現に心を惹かれて、魅惑された。彼がその愛する大家等の作品中に求めたものもこれであつた。それはさながら魔法をでも彼に施すやうに見える。『自分はマンテニヤの殉教者を見て、サン・セバスチャンの矢に貫かれるのは自分なのかと思ふ刹那が時々ある。かういふ大家等は催眠術者のやうである。』國外ではかういつてゐる。『自分は失神した男を描いたミケランジエロの素畫を見た時、その緩んだ筋肉の表現や、肉體の苦痛に痩せ細つた顏の面と輪廓との表現やに依つて、長く引き續く感動を惹き起された。自分は自分が苦痛に惱むその男でもあるやうな氣がした。自分は彼を憐れんだ。自分は同じ肉體となり、同じ手や足となつて苦しんだ。』これは十字架に掛けられた基督の幻覺を見て、その傷を聖痕とを己れの肉體の上に受けた聖フランシ

スや、シエナの聖カテリナが味つた法悦の陶醉に近いものである。

1　アー・サンシエ著、『ジー・エフ・ミレーの生涯と作品』一八八一年。自分はこの書にこれからも度々據るだらう。これはミレーに關しては最も貴重なる書（手紙と會話とのの蒐集である。アルフレッド・サンシエ（一八一五――一八七七年）はミレーとルソーとの親友で、彼等を献身的に助けた人で、内務大臣の二等書記官であつた。彼の名はその偉大な友人等の名と共に長く傳へられてゐる。彼は友人等の生前彼等のために大いに計ると共に、又彼等の姿を精神とを後世に書き殘したのである。

このことの中には單なる類推以上のものがある。「フランソワ・ミレーの守護聖徒がアシシの「フランシスであつたといふことは徒らではなかつた。自分は彼の不思議な禁慾主義のうちに、彼に惱みが及ぼした魅力のうちに、強い基督教思想の印象があることを認める。ミレーはその精神が宗教的であつた（でこれこそ同時代者の間に於ける彼の道德的獨創の根本的な理由をなしてゐるものである）。我々は後で、彼の生れた周圍が如何に熱烈な基督教徒であつたか、又彼の性格が作られた零圍氣が如何にジャンセン教義の信奉者で、且つ殆んど清教徒的であつたかといふことを見よう。彼が巴里へ立つために、家を愈々去ることになつた時、彼の心に大きな感化を與へてゐ

た祖母が。『私はお前が神樣のおいひつけに背いたり、不忠實になつたりするのを見る位なら、いつそお前が死ぬのを見る方がいゝと思ふ。』その後彼が巴里で成功し始めた時祖母は又彼に注意した。『フランソワ、お前は畫描きになる前から基督教徒だつたといふことをよく覺えておゐで。淫らな物事に身を賣つてはいけない……永遠のためにお描き。そして審判に呼ぶ喇叭が今にも鳴ることを考へたがいゝ。』これらの宗教的訓誡は全然ミレーの感情と一致してゐた。彼は幼い頃からして敬虔な書物や、教會の教父等や、十七世紀の教會說教者等や、又分けても彼が『畫描きの本』と呼んだ聖書やに依つて養はれた。彼の最初の試作は聖書に鼓吹された。『ある古い聖書の版畫が、彼にそれを模倣する念を起さしめた。』とサンシエがいつてゐる。彼が初めて弟子になつてある畫家の前に出た時、携へて行つた素畫の主題は『路加傳』から取つたものであつた。彼は己れの思想や心狀を暗示するものを絕えず聖典に求めた。そしてこれを畫に飜譯した。一八四六年に、彼は巴里の害惡がある魅力を「聖ジエロームの誘惑」中に現はした。一八四八年には、母や近親から遠くさすらつてゐることからして『バビロンの俘虜』と、『荒野にあるハガルとイシユマエル』とを思ひついた。又一八五一年には、『どう生きて行つたらよいか。どう死んだらよいかも解らないほど、彼に再び會ひたがつて』、病みながら、遠く離れてゐるのに、彼に巴里からノルマ

ンヂーのグレヴィルまで行く金がなかつたゝめに彼と會へずに死なうとしてゐた母を思ふ情に堪えないで、『子の歸りを待ち詫びるトビアスとその妻』を描いた。かうして彼はその生活をいつも聖典と結合させた。ビユルチーに依れば、彼は『レンブラントのやうに、但し佛蘭西的見致からして、聖書の註釋を試みる』計劃を立てゝゐたといふ。この部門では彼は『ルスとボアズ』の如き、ある試みをするだけにとゞまつてゐた。そしてこれらに彼が格別成功しなかつたといふ理由は、彼の寫實的天才が光景を喚び起すに必要な詩的構想を缺除してゐたからであつた。自然は彼にその光景のモデルを供さなかつたのであつた。彼は見たものに固く囚はれてゐた。がその見たあらゆるものゝうちに、彼は聖典の精神を吹き込んだ。彼の心はそれに充ちてゐた。彼は屢々(そのある友の趣味に對してはやゝ屢々過ぎるほどまでに)それを引用した。晩年には彼は夕方家族にそれを讀んで聞かすのがよく例になつてゐた。その中には彼の畫の說明があり、不斷な人と大地との爭鬪の說明がある。でこの爭鬪は彼が描くに決して倦まなかつたものである。そして意義が政治的乃至社會的にではなく、宗教的にあつて、あのカミーが屢々繰り返した『創世紀』の句 即ち彼の生涯と作品との標語をなす句に依つて現はされるものである。

『土は詛はる……土は棘と蓟とを汝のために生ずべし。また汝は野の草を食ふべし。汝は面

に汗して食物を食はん!』

この研究の初めに方つては、先づかゝる異例な宗教的及び道德的獨創に對して注意を促がすことが緊要であつた。これは藝術家としてのその天才ばかりか、十九世紀の佛蘭西藝術中——には、その藝術以外のともいつていゝ——に於ける特別な位置をミレーに與へるのである。このことを完全に感知したものは少ない。それを理解するのには宗教的な心が要る。だからそれがトルストイを感動せしめたのは怪しむに足りない。トルストイはその著書『藝術論』に於て、文明を峻嚴に非難した後、ミレーだけを除いて、その『晩鐘』と、更に一層『鍬を持つ男』を以て、『神と隣人とに對する愛の、基督教的感情を傳へる』僅かな畫の中に入れ、『宗教的』と呼んでいゝ、約翰が『神と人との合體、及び人々相互の結合』といつた言葉を果す藝術作品中に入れた。

かういふ見解が佛蘭西の選良の心に起らなかつたことは賭易い理である。然しミレーを選良から隔たらしめた同じ理由は、彼を民衆に近づかしめた。彼は殆んど唯一の民衆の解明者である。

依然として佛蘭西の藝術は十七世紀に於けると劣らず貴族的だといつていゝ。それを國民の本體に結びつけるものは皆無だといつていゝ。それは特に巴里の藝術である。かくて數百のヂレッタントや、俗人やが佛蘭西を――事實は、さうでないのに――快樂と自由思想との國土として描いてゐる間に、ミレーは獨自の興味を懷いた。即ち彼は多數の、多忙な故に語らないものゝ聲であつた。隱れて宗教的な生活を送りながら、悲哀に無情にも囚はれてゐて、事實、巴里を敵視して、近年まで表面の社會進化に冷淡に遠ざかつてゐた幾百萬の地方人等の聲であつた。ビュルチーが適切にいつた通りに、ミレーは『農民の受動的な德を描く』に足る天才を有してゐた。その理由は彼が農民に屬してゐたからである。幼年時代から死に至るまでの、彼の全世涯は農民等の勞働の間にあつて過された。彼はあらゆる農民の情熱と、偏見とを持ち、巴里と巴里の精神とに對する反感と、土地に對する熱烈な愛とを持つてゐた。彼は地を描くことを知つたばかりでなく　それを耕やすことをも知つてゐた。彼は上手な農夫で、それを誇りとしてゐた。時々彼はバルビゾンを散歩しながら、鍬を手にして、野原に長い眞直ぐな畦を作つたことがよくあつた。ある友は、彼が壁に凭り掛つて立つて、頭を上げ、手に帽子を提げて、髮を後ろに捲き上げて、足に重たい木靴を穿いてゐる、一八六一年頃に取られた寫眞に就いて語りながら、彼を「銃殺され掛けてゐる百姓の頭」に比した。彼は最後に至るまで、その巴里と反對な田舍出であることを激しく主張した。『自分は頭を下げさせられなぞはしない。自分に强ひられた巴里の客間藝術なぞは作らない。自分は百姓として生れたし、百姓として死ぬつもりだ。自分は木靴のすたりとも身を引かずに自分の土地にとゞまる。』

最後に、ミレーの生涯と作品との研究を始める前に、自分は特に英吉利の公衆に關する一の觀察をしなければならない。それはこの偉大な農民畫家、この現代美術に於ける佛蘭西民衆の忠實な代表者が、その氣質と聖書の精神とに依つて佛蘭西よりも英米の少數識者の方に近いといふことである。實際（これから解るやうに）彼が最も早く理解されたのは亞米利加人と、英吉利人とに依つてゞあつた。彼等の間に、彼は直ちに最初の購買者と、最初の弟子とを見出した。それで彼の作品に對する道德的理解と愛とが最も純潔に維持されるのは彼等の國に於てゞあらうと自分は固く信じてゐる。この論文の一つの目的は、この偉大な人が――その精神と樣式とでは實に佛蘭西的であるにせよ――英吉利と如何に多くの類似を持つてゐるかを示して、一層若く英吉利にミレーが知られて愛されるやうにしようとするのにある。

二

パルビゾンに落着くまでの
ミレーの生活

ミレーはノルマン人であつた。彼は一八一四年十月四日に、コータンタンの北方、ラ・マンシュ縣、ボーモン郡、グレヴィル區の小村グリユシーに生れた。この地方は堅實な常識と、荒凉たる國とを以て聞えてゐる。彼は八人の子のうちの二男であつた。ジャンの名は父の名を取り、フランソワの名はアシシの聖フランシスを尊崇して付けられたのであつた。

彼の家族は、人並以上に貧しい佛蘭西人のうちによくある、道德的な力と高貴な思想とをとゞめてゐる立派な一例をなすものであつた。トルストイは、過ぐる二十年間に佛蘭西に現はれたうちで最も名高かつた寫實小說中の一篇に就いてかういつた。『もし佛蘭西人がこの本に描かれてゐ

る通りだとすると、自分には佛蘭西の歴史全體が解らなくなる。」實際、何等の理想も持たないものにどうしてかくも屢々、かくも著しく理想に充ちる歴史を説明することが出來たらう？　ミレーの生活はトルストイを遥かに滿足せしめたに違ひない。その中に、彼は國民の眞の偉大をなしてゐて、且つ屢々その行爲にヒロイズムの特性を與へるある人々の典型を認めたに違ひない。

強い肉體的、道德的な健康と、行爲の絶對的な純潔と、強い宗教的信仰と、心の眞面目さとがミレー一家には著しかつた。彼の父、ジャン・ルイ・ニコラは敎念の唱首であつた。彼は音樂に就いてのある智識を持つてゐて、村の唱歌隊を指揮した。時々自然は子に實現される天才を發展させる前に方つて、父をどんな風に試みるかといふことに注意をすると不思議である。ジャン・ルイ・ニコラは靜かな、瞑想的な人、で漠然とした藝術的本能を懷いてゐた。彼は粘土で型を取つたり、木に彫刻をしたりして見た。彼は好んで動物や、植物や、人間を觀察した。で初めてフランソワに野の美を示したのは彼であつた。彼は又その道德的峻嚴と、心の純潔と、放肆な話や冗談に對する嫌惡とをも傳へた。

デュ・ペロンと呼ばれた、ミレーの母、エーメ・アンリエット・アデライド・アンリーは門閥家に數へられた富祐な農家の出であつた。その大伯父の一人は革命の期間に方つて、生命を賭して、

傲然として憲法に誓ひを立てることを拒んで、その信仰の曲げ難いことを主張した敎師であつた。この人は身自ら一個のヘルクレスであつた。そして畑の仕事を好んだ。他の大伯父は化學を學んでゐた。又もう一人の工場主だつた大伯父はパスカルや、ニコルや、モステスキューや、シャロンを讀むのを常としてゐた。然し家族のうちで最も獨創的な、ミレーに最も感化を與へた人は、祖母のルイズ・ジュムランであつた。彼女は信心深い最寄りの田舍女で、さながらボール・ロワイヤルの婦人のやうに神のうちに住んで、『あらゆるものを神のうちに見、あらゆる自然の有樣とあらゆる人事とのうちに神を混じたカトリック的淸敎徒であつた。ミレーの最も幼い頃の記憶の一つは、彼がまだ極く子供の時分に祖母に起されて、かういはれたといふことであつた。『お起き、フランソワや！　もう先刻から馬が神樣の榮光を歌つてるぢやないか。』

この稀れに見る貴族的な農夫等は驚くべき藏書を持つてゐた。ボール・ロワイヤルの本や、ボッシュエや、フェネロンや、サールの聖フランシスや、聖ジェロームや、聖オーギュスタンやがその中にあつた。少年のミレーはこの顯著な智識的食物を貪つた。分けても彼は羅典語で讀んだ聖書と、同時代の多くの他の偉大なる佛蘭西畫家等、ドラクロワや、コローや、ルソーの好んだヴィルギリウスやを愛好した。ビュコリックと、ジョルジックとが彼を魅した。彼は自らかういつて

ゐる。』『それは大きな影が平野を求める時である。』

Et jam summa procul villarum culmina fumant Majoresque cadunt altes de montibus umbrae,

（そして今や農家の屋根から煙りがあたりと遙かな彼方とに立ち昇つて、高い山々から大いなる影が落ちる）

といふ行まで讀んで行くと、全く心を搔き亂されて、感動に挿へられたと。聖書を就いては、その古い讃入りの版が彼に藝術で自己を表現する氣を初めて起させたことを前にいつた。この彼に知らない間に十七世紀の佛蘭西人の精神を授けた幼時の讀書の上に、彼は外にも多くの本を次第に加つた。ミレーは一生涯非常な讀書家であつた。二十歳の時に彼はホメロスや。シエクスピヤや、バイロンや、ウオルター・スコット1や、ゲーテの『ファウスト』やを發見した。ヴイクトル・ユーゴーと、シヤトーブリアンとも彼に大きな印象を與へた。とはいへ、ロマンチンズムが同時代の青年に及ぼした魅惑を彼は嘗て受けたことがなかつたやうに思はれる。彼は實にミユッセの如き、ロマンチツク作家中最も魅力があつて、最も愛されてゐるものゝ持つ病的な、激した感じに對して私かな嫌惡を常に懷いてゐた。『ミユッセは人に熱を與へる。』と彼は後にその友のマロールにいつた。『ミユッセに出來るのはそれだけである。彼は魅力のある、氣紛れに、深く毒さ

れた心をしてゐる。彼には迷ひを醒ましたり、希望を奪つたり、腐敗させたりすることばかりしか出來ない。一反熱が過ぎると、人をまるで新鮮な空氣や、日光や、星が要る病氣あがりのものと同じに衰弱させる。』彼は自分では、聖書や、ホメロスや、ヴイルギリウスやの新鮮に空氣と、日光との許に歸つた。尙彼はこれらにテオクリツスをも加へて、それを善んだ。ビエグニエルに據れば、彼は愛するヴイルギリウスよりこの方を遂には選ぶに至つたといふ。それからダンテと、彼に深い反響を起させた間があつたミルトンと。彼が親しい同感を懷いたロバート・バーンスと——モンテーニンと、ベルナール・バリツシーと、オー・ド・セルと、ブーサンの手紙と、ベルナルダン・ド・サン・ピエール2と。かくの如く彼の文學的智識は賢實で、根柢から古典的であつた。彼はそれから彼の心の健全さと、彼の平衡と、又かのセンチメンタリテーや、えせ笑ひや、誇張を嫌つて、率直に、眞面目に、力强く語る靜平な男らしさとを授かつた。

1　彼はスコットを再讀して、彼はその作品にもう興味を懷かないことを知つた。

2　これに反して彼の科學的智識は非常に乏しかつた。實際まるでないともいつてよいほどであつた。數學では、彼は寄せ算より先きに進んだことがなかつたと自分でいつてゐる。『自分は引き算或ひはそれとり先きの規則に就いてはまるで解らない。』

本から受けたよりも遙かに深い印象を、少年のミレーは自然から與へられたに違ひなかつた。彼は廻はる糸車の音や、鵝鳥や鷄の騒ぐ聲や、穀物の中で響く連枷の音や、教會の鐘や、幽靈の話に養はれたずつと幼い頃の追想を記してゐる。一八六六年のサロンに出品した畫にある彼の家は、とある崖の端に、古いいぢけた一本の楡の木と並んで、吹き晒らしになつて立つ粗末な石造の大きな草葺の家であつた。海が村から近かつた。それが水平線を限つてゐて、少年を一種の恐怖を以て充たした。彼は五六艘の船が難破して、岸に大きな帆の下になつて死骸が積み重なるのを見た時の嵐のことを一生忘れずに覺えてゐた。彼は父母が助けられる年になると、直ぐさま一緒に畑へ出て働らいて、草を刈つたり、乾草を作つたり、穀粒を篩たり、畑を鋤いたり、肥料を施したり、種子を蒔いたりして、彼が後年その詩的な、神祕な偉力を表現するに至つた、あらゆる田園生活中の行事に親しく携はつた。それらを通じて、彼は土地に、分けても彼が決して愛することを止めなかつたかのノルマンの土地に、だん〴〵深く愛着して行つた。彼は故國を決して忘れたことがなかつた。『おゝ、どんなに自分は自分の土地のものだらう！』彼はその死に數年先立つ、一八七一年八月十二日に、そこを再び眼にして書いた。

彼の藝術的傾向は非常に早くから現はれた。幼い頃、その身内のもの等が午睡してゐる間に、彼はよく畑を描いた。父は、それを知つて彼の天職を悟つた。けれども家が貧しくつて、土地が耕されなければならなかつた。幼いフランソワは呟きもせず、逆らひもせずに服從した。そして前の利己的野心を全然持たない態度と、例の一生を通じて示した生れながらの堅忍とを以て、極めて眞率に、彼は周圍のものに對する義務を果すためにその趣味を犧牲とした。ある日フランソワが記憶で描いた、腰の曲つた老人の木炭畫の肖像を見せると、父はかういつた。『可哀さうにな あ、フランソワ、俺にはお前がその考へに惱まされることがよく解つてゐる。立派なことだといふ畫を描く仕事を習ひにお前がやれたら俺も實に嬉しかつたのだが。だかさうは行かなかつたのだ。お前はみんなの長男で、全くお前がゐなくては困つたのだ。だが弟達ももう大きくなつたことだから、俺はお前がそんなに習ひたがつてゐることを習ふことはいはない。』彼等は連れ立つて、ムーシエルといふ、名の大してない藝術家で、心底からの農夫である、ダヴィッド派の一畫家に會ひにシエルブールへ行つた。ミレーは自己の創意に成る二枚の素畫を彼に示した。一つは二人の羊飼ひを描いたもので、一つは『路加傳』の "Et si non dabit illi surgens et quod amicus ejus dabit illi quot-quot habet necessarios" (『その友なるに

一八三七年一月ミレーは、巴里へ立つた。彼の家族は、彼が滅亡の市に、バビロンに去るのを見て非常な不安に驅られた。彼自らも、母と祖母とに別れる悲嘆の思ひに暮れた。悲しい旅であつた。巴里の周圍の國が彼には『舞臺の書割り』のやうに見えた。彼は雪の降りしきる一月のある土曜日の晩に、『黑く、泥塗れで、煤煙に蔽はれてゐる巴里』に着いた。彼はその靈魂のあらゆる暗い悲哀と、嚴肅な偉力とを描き、又健全な、宗教的な、心の清い、謙遜な農夫の彼が大都市の腐敗した文明に初めて接觸して味はつた苦惱を描いてゐる立派な頁の中で語つてゐる。

『半ば霧に搔き消される街燈の光りと、擦れ違ひ行き違ふ澤山の馬や、馬車と、狹い通りと、巴里の臭氣と空氣とは、自分の頭と心とをさながら自分を窒息させようとするやうに冒した。自分はせぐり上げる啜り泣きに襲はれて、それを制止すること出來なかつた。自分は自分の感情よりも強くなりたいと思つた。がその感情は全力を以て自分を壓倒した。自分は町の噴水から汲んだ水を手に一杯顏に濺いで、漸く涙をせき止めた。そこには繪双紙賣りがゐた。で自分は家から持つて來た最好の林檎を嚙りながらその畫を眺めた。自分は石版畫を實に不愉快に思つた。それは卑しい服裝の女賣子や、入浴してゐる女や、着物を着てゐる女の畫であつた。巴里が自分には陰

氣で、無氣力に思はれた。自分は宿屋へ行つたが、そこでは一種の絶え間ない惡夢のやうなものに襲はれて第一の夜を過した。自分の部屋は日の光りの差し込まない、惡臭を放つ巢窟に過ぎなかつた。夜明けに自分は起きて、空氣の中に走り出た。すると光線が來て、自分は平靜と決斷とがやゝ恢復した。悲哀はいつまでも去らなかつた。で自分はヨブのかういふ悲嘆を思ひ出した。

「我が生れし日亡び失せよ。男子胎に宿れりといひし夜も亦然あれ。」かくて自分は呪ひこそしなかつたれ、その物質的及び精神的生活の何物をも理解しないことを恐れつゝ、さう巴里に向つて挨拶した。

彼は幾多の苦しみを巴里より受けた。それは彼を肉體的にも、精神的にも窒息させた。彼は呼吸することが出來なかつた。彼の多い田舍者の食慾が充たされないで弱つた。彼は馭者と共に彼の國の方から宿屋に食物を取り寄せるのを常とした。彼は紹介狀を携へて來てゐたが、それを役に立てないでしまつた。彼は病的に短氣であつた。そして巴里人の嘲りを恐れて、誰れにも物も語らなければ、物を問ひもせず、甚しきに至つては『古美術館』、卽ちルーヴルに行く道を聞かうともしなかつた。隨つてそのために彼は巴里を出鱈目に探しながら、歩き廻はつて數日間を過した。彼は獨立を維持することに氣を揉んだ。そして規律を厭つて美術學校に入ることを欲しなか

つた。學生等の娯樂と舞踏等とを彼は嫌つた。彼は全く孤りつ切りで、倦怠に弱り果てた。彼は生命を危くしたほどの熱病に罹つた。彼はルーヴルさへなかつたら再び歸國し兼ねなかつた。彼に己れを眞に忘れさせたそこの彩畫と素畫（その中でも初期の伊太利人のや、ミケランジエロのやブーサンのやが）なかつたら。我々は最後の章で、彼がそれらに就いて懷いた評價と、彼が愛する大家等を批判しながら、無意識に自己を語つた評價とに又立ち返つて述べよう。だが、こゝに注意すべきは、彼がこれらの作品の模寫ともいふべきものを一つもしなかつたといふことである。

彼は遂にドラローシュの研究所に入る決心をした。そこで彼はクーチユールや、エベールや、イヴオンや、フエーヤン・ベランやを仲間に持つた。彼は他人と離れてゐた。『意味の解らない、退屈な研究所詰りと、酒落とが彼を惱ましぬいた。』彼は短氣で、（子供の時學校の試合で筋肉を鍛えてゐて）、強い力があつたので、誰れもさう彼にからかふものはなかつた。彼は『森男』といふ渾名をつけられた。ドラローシュは結局天才ではなかつたが、多量の智力と、天才の直覺とを持つてゐて、彼を敬意と敵意との混合を以て過した。時とすると彼はミレーを鐵の棒で御す」必要があると叱るかと思へば、又時としてはその作品を見て、溜息しながら、何もいはずに、何の忠言をも與へずに去ることなどがよくあつた。然しミレーがその研究所を去ると、彼は『君は外のも

より起きゝ與へざれざれども、ひたすら請ふが故にその需めに從ひ起きて與ふべし』路加傳、十一章、八節）といふ言葉を誌した。住家を出て、麵包を分つてゐる人物を描いたものであつた。茫然として驚いた畫家は父にいつた。『あなたはこの人をこんなに引き留めて置いた罰を受けるに違ひありませんよ。大藝術家になれる素質がお子さんにはあるのですからな。』ミレーの藝術的教育が始められたのは漸くこの日からであつた。彼はその時二十歳を越してゐた。

彼がシエブールに落着くか落着かない間に、父は腦膜炎に罹つた。彼は急いで村に歸つた。と彼は父の臨終に間に合つたが、父は彼を認めずに死んで行つた（一八三五年十一月）。ミレーはグリユシーにとゞまつて、家族に己れを捧げて、家長となるために、又もう一度畫を棄てようと欲した。すると彼に『神様の御心はお受けしなければならない』といつて、強ひてシエルブールへ彼を歸したのはその祖母であつた。彼はその地に於てグロの弟子で、附近に偉大な人物として認められてゐた。ラングロワの研究所に入つた。とラングロワは彼の進歩に驚嘆して、ミレーを巴里へやつて研究させるために町からの給與を乞ふた。それで四百フランが彼に與へられた。

のとは違ふ』といつて、ミレーを引き戻すことに勉めた。ミレーは全力を擧げて働らいた。そして唯々として古代作品の模寫をやつた。彼にミレーは友に語つて、ドラローシュは二週に一度その弟子達に、『もう澤山になる』ゲルマニクスの像を描かすのが常であつたといつた。とうゝ彼にはそれが忍べなくなつた。ドラローシュのいつたやうに。これらのアカデミックな教課に從ふには『彼はあまりに知り過ぎてゐて、而も足らないところがあつた』のであつた。彼は研究所を去つて、一友とヴアル・ド・グラース區に部屋を一間借りた。彼はレオナル・ド・ダヴインチやヂユーレルや、ジヤンクーサンや、ミケランジエロや、ブーサンの作や、ヴアサリの「畫人傳」や、又その偉大な過去の友等と親しまずに足る一切のものを研めにサン・ジユヌヴイエーヴ圖書館へ通つた。

この頃は甚しい貧窮の時代であつた。ミレーは生きたるため、その好まなかつたワトーや、厭つたブーシエやの模寫を描かなければならなかつた。彼は久しくこの屈辱を斥けたが、その仲間が彼を說得した。時には彼は聖書に歸つて、『ラバンの天幕にあるヤコブ』や、『ルスとボアズ』やを描いたりした。彼はこれらの作品を一枚五フラン乃至ナプランで賣つた。一八三八年から一八四十年に掛けては毎年、彼はグリユシーで幾週か過した。そして近親の肖像を描いた。彼は近

くに世を去つた市長をあまり寫實的に似せて描いたので、敬意が足らないと認められて、シエルブール市廳から不規則に拂はれてゐた不十分なかの三百フランの年金をやがて失ふことになつた。が一方には、この事件で起つた騷ぎと、一八四〇年のサロンに初めての出品が出て、肖像がそこに掲げられた成功とで、その鄕里の青年男女の同情が彼に集つた。あの娘が彼を戀ひして、二人は一八四一年十一月に結婚した。この幸福はミレーに取つては更に新たな、無情な悲しみの元であつた。彼の妻はか弱かつた。彼女は彼の傍はらで過した數年を、絶え間なく病み通した。彼等の生活は艱難を極めた。一八四二年には彼の畫がサロンで跳ねられた。それは生存に對する日毎の爭鬪であつた。憐れな妻は抵抗するにはあまりに弱過ぎた。彼女は久しく惱んだ擧句、一八四四年四月に死んだ。ミレーは又孤りつ切りになつた。が彼は長くはこうしてゐなかつた。又シエルブールへ旅した、彼は人知れず彼を戀してゐた、ロリアンのカテリヌ・ルメールといふ娘と知つた。彼は一八四八年に彼女と結婚した。彼女は彼の一生の忠實な配偶者となり、彼と共に、彼と同じく、忍耐强く苦樂を凌いで、彼の試練を分つ確乎たる友となつた試練は至らざるところがなかつた。

試練は至らざるところがなかつた。ミレーは一たび妻を伴つて巴里に歸ると、もう母に會ひにそこを離れる手段がなかつた。『自分は岩に釘附けにされてしまつた。』と彼はいつた。『そして果しなく苦役に從ふことを宣告されてゐる。』彼は『聖ジエローム』を描いたが、それは一八四六年のサロンに跳ねられた。他に畫布を買ふだけの金がなかつたので、彼は同じ畫布を塗り潰して『木から解き放されたエヂプスを描いた。彼はその頃、形式に細心な注意を拂つて審査員の反感に打ち克たうとする目に見える努力をした。それがその個人的思想を表現することには尙心を須ひてゐなかつた。これらの努力は一般公衆に對しては成功しなかつたが、尠くともチオフィル・ゴームエや、トーレの如き批評家や、ヂアスや、クーテエールや、トロワイヨンの如き畫描きの注意を惹いた。彼がアルフレッド・サンシエと知つたのも亦この頃であつた。かくてサンシエの美しい本は實に忠實に、又敬虔にミレーの姿を我々に殘すことになつた。幾人かの子が生れた。彼の貧窮は極度に陷つた。妻と彼とは健氣にそれを隱蔽してゐた。然し巴里の生活が彼には益々堪え難

くなつた。彼はそのどの部分をも好いてゐなかつた。彼はその藝術的、文學的、及び哲學的運動にも、又終に一八四八年の革命を惹き起した政治的騷擾にも反對するその心の奥で冷淡に、他人のやうに構へてゐた。

とはいへ、革命が彼に取つては無用ではなかつた。それが勃發した時、ミレーは資力に盡きて、重病を煩つてゐた。一八四八年のサロンは誰れにも自由に公開された。共和政府は審査委員を廢止した。既に暫らく職工だの、石切だの、工夫だの、貧苦の底に陷つてゐる乞食だのゝ國民的典型を描きならしてゐるミレーは、彼の民衆生活の最初の大作——『穀粉を篩る人』1を出した。これは佛蘭西藝術に一つの時期を劃するもので、それが一般的革命にかうも正確に符合してゐることは、注目すべきである。テオフィル・ゴーチエは『穀粒を篩る人』に非常に感動した。あらゆる革新者に興味を寄せて、テオドル・ルソーとデユブレとに特殊の恩顧をその時垂れてゐた新政府は、ミレーにその畫に對して五百フランを授けた。そしてルドリユ・ロランが千二百フランで仕事を彼に囑託した。この藝術家等に向つて示した共和政府の厚意の印は、疑ひもなく、ミレーをその時政治に惹きつけた。といふのに彼が——成功こそしなかつたれ——共和政府の募集した彫像の懸賞に應じたのを我々は見るのである。彼は共和に赤い帽子を被らせないで、麥の穂を戴

かせ、片手に密菓子を、片手にはパレットと畫筆とを持たせて――一語でいへば、如何にも彼の想像が描いたやうな、農民と藝術家との女神を作つた。彼は又一對のチョーク畫をも描いた。それには情操が更に高まつて漲れてゐて、今もその畫が尙存在してゐる。その一つでは自由が王の髪を摑んで引き立てゝ行つてゐて、又一つでは凱歌を奏して槍を揮つてゐる。

1　ミレーはサロンへ同時に『バビロンの俘虜』を送つた。その畫布を彼は後に(『聖ジエローム』を塗り潰したと同じく)『羊の毛を刈る女』を書くのに塗り潰して、使つた。

ジャコベン主義のこの攻擊は永續しなかつた。七月の暴動が勃發した。貧が戻つて來た。ミレーは小歌の表紙を描いたが、その描き賃も得られなかつた。彼は素畫を絋た代へたり、油畫を寢臺と代へたりする羽目にまで陷つた。すると彼が貧の極に達した時、幸ひにも看板を欲しがつてゐた產婆から三フランの爲替が屆いた。彼の政治を厭ふ念は、彼が暴徒に對して議會を守らしめられ、ロシュシュアール區の防塞占領に加はらしめるに及んで、遂に極度に達した。これらの光景は彼に戰爭に對する恐怖を懷かしめた。これらの悲しい印象を避けるために、彼は出來るだけ巴里を去つた。彼はモンマントルの野や、サン・トウアンによく出懸けては、日常の田舍の景色に

その眼と記憶とを充たして來た。そして歸るとその印象をよく描き／＼した。水槽に向つてゐる馬だの、屠殺場に曳かれて行く牡牛だのを。かうして、彼はその天才を完全に會得して、巴里藝術とのあらゆる絆を打ち破る決定的な時期に向つてその歩を知らずに進めてゐた。

彼は自己を主張するのをためらつて、同時に農民生活の畫とアカデミックな畫とを描き續けて來てゐながらも、幾年か既に己れの道を感じてゐた。ふと立話をする誰れとも知らない人の言葉でその峠が來た。ある日巴里を歩いてゐながら、ミレーはとある店の窓にある彼の作品の復製を立ち止つて見てゐた。すると通行人が友に向つて、『その畫はミレーのだ。裸體婦人の外には何にも描かない男のだ。』といふのを聞いた。彼に取つてはかういふ言葉が痛切な悔辱であつた。彼は歸つて、妻にいつた。『お前がよければ、俺はこんな畫はもう決して描かない。俺達の生活は前よりもひどくなるだらう。そしてお前は苦しまなければならなくなるだらう。けれども俺は自由になる。そして俺の心にずつと一杯になつてゐたことが果せる。』と言下にミレー夫人は健氣にも答へた。『私は覺悟をしてゐます。お好きなやうになさいまし。』でこれからしてミレーは農民畫家のミレーになつた。

三

バルビゾンに於けるミレー

一八四九年に、ミレーはバルビゾンに行つた。テオドル・ルソーは一八三三年に早くもそこに行つたことがあつた。そして一八三七年の頃には、アリニーやヂアズと詩を同じくして、そこにもうかなり落着いてゐた。

これより先き二十年間乃至はそれより以上にも、佛蘭西の畫家等は自然の中に深く潜心して、自然と親しく交通して生きる必要を感じてゐた。彼等には一八二四年の頃になつても、まだコンスタブルにかう書かれるやうなところがあつた。『佛蘭西の風景畫家等は多くのことを學ぶけれども、畢竟それは繪に過ぎない。それで彼等が自然を知らないのは、馬車馬が牧場を知らないと同然である。中でも悪いことは、彼等が普通一般に薬だとか、岩だとか、石だとかいふやうな離れ

〳〵なものを描いて、全體から引離された孤立の斷片ばかりしか見ず、自然の全面をも、その異つた効果をも疎かにすることである。』バルビゾンの大家等が十分に捕捉しようとしたのは、正しくこの風景の『全面』と、その生動する『異つた効果』とである。佛蘭西風景畫家等のその光榮ある密集隊の先鋒中でも、特にポール・ユエーは英吉利風景畫家等、その中でもコンスタブルと、ボニントンとの例に多くを負つてゐた。師は直ちに弟子に追ひ拔かれた。そして佛蘭西の風景畫はプーサン及びクロード・ロレーンこの方未だ知らなかつた偉大さに到達した。

當時のバルビゾンはヒースと森との中に埋れた小部落で、村にもなつてゐなかつた。教會もなく、墓地もなく、郵便局もなく、校舍もなく、市場も、物を賣る店もなく――宿屋すらもなく、あらゆるものが隣村のシャイイーから持つて行かなければならなかつた。そこへは當時無名であつた僅かな藝術家以外には訪れるものがなかつた。そしてそこの住民は實に貧しい木樵りと、勞働者とであつた。アルフレッド・サンシエは、ルソーが巴里にさう近いのに、而も當時はさう遠いところのやうに思はれてゐたこの田舍で送つた――半ば藝術家、半ばトラピスト修道者の――生活を我々に語つてゐる。ルソーは秋と冬とを獨りで、物憂い、低い、寒い木樵りの家で過した。そこに彼は鳥と牝牛との外に友がなくつて、心を煩はされないで、少しゝか眠らずに、常に靜思

に耽りながら　口を一言もきかないで、幾日も〳〵沈默してその神祕な生活を彼が見守つた森の木に不斷の忘我を味ひつゝ、夢想したり、又創造したりしてゐたのであつた。『自分は木々の聲を聞いた。』と彼はいつた。『木々の俄かに立てゐひびきや、形の變化や、それが光りに惹かれる不思議さやまでが、自分に森の言葉を突如として啓示した。この葉の全世界は唖の世界であつた。自分はそれの合圖を悟つた。それの情熱を發見した。』

これと同じ宗教的感動は、この流れもない、鳥の歌もない沈默の森の土に足を踏み入れた瞬間にミレーを拉へた。彼は數週間のつもりで來た。それが二十七年間――死ぬまでバルビゾンにとゞまることになつた。

***

家庭に於けるミレーの姿をこゝにスケッチして置かう。

ミレーは中脊以上の高さで、逞しい體格をして1、牡牛のやうな頸と肩と、『農夫のやうな』手を持つてゐた。彼の縮れた濃い髮は眞黑で、美しい極く眞面目な額を現はしてゐた。眉は顰み勝

ちであつた。眼は灰色か、眞青かで、瞳られてゐなかつたが、『靈魂の奥底にまで透徹した。』その表情は憂鬱で、嚴肅なことがよくあり、時にはやゝ皮肉でもあることがあつた。眉は眞直ぐで、別に特色がなかつた。濃い漆黑な頰髯が殆んど頰の全體を蔽つてゐた。顎は頑丈で、やゝ眼に立つた。そして頸が細かつた。肖像で見ると、彼の顏立には思想や、感情よりも、意志が餘計に現はれてゐる。ある容貌の優しさも亦著しくつて、その何れかといへば重々しい顏の全面容と、善良な且つ怜悧な大きい犬を思はす點と對照を示してゐる。ミレーは『下ノルマン人の遲く物をいふ癖を持つてゐて。やゝ吶つた。』それから『話をする時には少しためらつて、ゆつくりと身を動かした』とも他の著者は書いてゐる。知らない人と會ふ時には目に立つて遠慮深く、言葉を改めて、何れかといへば形式的な、然し『誠實と謹嚴との混合』を以て己れを現はした。が自分の家庭と、友の間とでは、彼は『人や物事の上に優れた批判を又加へ出して、非常な上機嫌と、自然な談話とに立ち戻つた。』ピエダニエルは、彼は繪畫的に、不意に話題を轉じて、簡略に話をしたといつてゐる。ホイールライトは、『彼の態度の威嚴と、談話の嚴肅な魅力と』に非常に打たれて、『彼は何かの氣に入つた題目に熱して來ると、一時間でも二時間でも、異常な明晰と、雄辯と、撰擇された言葉とでよく話した』といつてゐる。彼は主として聖書と、テオクリツスとヴィルギリウス

とに養はれた。著しい記憶と、純粹な博識とを持つてゐた。彼の服裝は極めて飾りがないもので、かなり無頓着であつた。サンシエが一八四七年に初めて彼と會つた時には、彼は蒼色の外套を着て、馭者のやうな羊の毛の帽子を被り、まるで中世紀の畫家のやうな樣子をしてゐたといふことである。バルビゾンでは彼は一層田舍風になつて、赤い古ジャケツか、ヅボンまでよく屆かないで、腰にシャツがちらついて見える編物のチョッキかを着て、兩に幾度か晒らされて柔らかになつてしまつてゐて、その廣い緣が頭の上に鐘のやうな恰好に垂れ下つてゐる古い麥藁帽子を被つて、足に重たい木靴を穿いてゐた。2

1　彼は年が行つてからは寧ろ肥つた　その他の點では外貌がさう變らなかつた。

2　この姿はサン・ミヒや、ピンルチーや、ホイールライトの回想と、ミレーの自畫像とから描き上げたものである。

ミレー夫人は幼時から田園生活に慣れた、簡易な習慣の婦人であつた。彼女は夫を全く優れた人物だと思ひ込んでゐた。『彼女は九人の子を生んだ。初めの子は一八四六年に生れ、末の子は一八六三年に生れた。ミレーは彼女を非常に愛した。ホイールライトはミレーが手を彼女の肩に

置いて、『おいお婆さん』と呼びつけてゐた愛情のある柔しさをいつでも思ひ出すといつてゐる。ビンルチーは一家團樂して食事をする時の彼等のさまをかう書いてゐる。『ミレーは厚い胸板と重々しい頭とをして、布れの掛らない長い食卓に座長となり、その周圍には半ダースほどの子が煙の立ち昇るスープの鉢に土器の皿を差し出してゐた。ミレー夫人はいつも赤子を膝に眠らせようとしてゐた。それで長い・默の間があつて、あたりにはストーヴの前にまろがる猫が咽喉を鳴らす以外には物音がいつもまるきりしなかつた。』

ミレーの住居はある農家で、初めには低い三つの部屋から成つてゐた。即ち畫室と、臺所と、妻と初めの三人の子で使ふ寢室と。それから、六人の子が更に生れると、二つの部屋がこの外に建て增しされた。そして畫室が庭の向ふ側に建てられた。塀には牡丹蔓や、常春藤や、茉莉が一杯に生ひ茂つてゐた。又庭には花や、野菜や、果實が所を選ばずに育つてゐた。庭の向ふには畑があつた。それから果樹園があり、又茂つた一帶の藪があつた。家から十分ばかり行くと森になつた。畫室は極めて粗末なもので、納屋のやうな作りであつた。でたゞ通りに向つて大きな窓が一つ開いてゐた。それは欲込みの床がある高い部屋で、その中には鐵のストーヴと、一方の隅に小さな鐵の寢臺と、それからバルテノン式彫刻帶の或る鑄型と、トラヤン式圓柱の浮き彫りとあ

を壁に書きつけたりしながら、頭痛がし出すと、彼はいつでも森を逍遥した。『自分は羊齒の上に寢そへつて、雲を眺めるのほど樂しいことを知らない。』と彼はいつた。森は忘我と恐怖とを以て彼を充たした。『森がどんなに美しいかといふことをもし君が見たら！　自分は日の暮れ、一日の仕事が終つて、時々そこを馳けて歩く。そしていつでも壓倒されて歸つて來る！　その靜寂と莊嚴とは、自分が實際脅やかされてゐるのだと感ずることに氣が着くほど物凄いものである。自分はその木の奴共が何をいひ合つてゐるのだか知らない。然し彼等は何かいつてゐるのである。それを自分達は同じ言葉で話をしないから、理解しないのである。それだけのことに過ぎない。でたゞ彼等は洒落をいふまいと思はれるばかりである。』晩は彼は子供達と一緒に過した。彼は笑ひながら子供達を『ひき蛙』と呼んだ。そして彼等に奇體な話をして聞かせたり、聲高に讀んで聞かせたりすることがよくあつた。近頃世に現はれたもので、疑ひもなく一八五五年か、一八五六年かに出したに違ひない、ルソーへの美しい手紙には、彼が齎く小さな群れの間で、家庭生活の親しみのうちに、高い靜かな沈默を以てその家庭を圍む八月の森の平和のさ中に、晴れやかな氣持でゐるミレーが現はされてゐる。1

1　一八九八年四月に、評論雜誌『コスモポリス』でシヤラパイが表したもの。

『ルソー兄――僕に地震をでも、複雑極まる北極光をでも、五フランの金に拂ふ毛ガンヌ（宿屋の主人）の尊敬をでも、ある到り難い山嶺に第一着に到着したいと思ひ込む英吉利人が、外の英吉利人にまのあたり行き當つた驚きをでも、その他何でも非常に描寫し難いことを描寫して見ろと要求し給へ。そのどれを完全に果すのでも僕は僕のひき蛙共があの上等な籠を開けて見た時の讃嘆と、氣が遠つたやうな熱中とを君に知らせることが出來れば、隨つて又易々たるものだ。

1　ルソーはミレーの子供に玩具と砂糖漬けとの這入つた籠を送つたのである。

『自分の舌で自分を表白する力のない、最も激しい自發的な亢奮からでもたゞ呼び聲と足踏とより外に出來ないものを想像して見給へ。それでも君はその有樣をよくは思ひ浮べられないだらう。狂喜の極まる刹那が過ぎ去ると、彼等は初めて君の名を推察し出した。それを非常な親しみで口に上した『お父さん、これ下すつたのはルソーさん？』『あゝさうだよ。』すると騷ぎが又始まつた。フランソワはその表現が弱過ぎたので、普通の言葉を用ひることを止めさせられた。そして一層力のある、隨つてその場合を描くに一層適したいひ方をした……

『僕は立派な祭典がノートル・ダムと、オテル・ド・ヴィル1とでどう行はれるか知らないが、自分のためにあるもつと愼ましいものゝ方を選ぶ。卽ち僕は木や、木の生へてゐる岩や、野に眞黑になつて鳥が舞ひ下るのや、又は煙突が烟りを空に詩的に吐いて、野から疲れて歸つて來る農夫等のために女が夕餉の支度をしてゐるのを告げる荒れ果てた屋根や、ある素晴しい入日の後の晩に見たやうな、雲間から洩れて輝やく小さな星や、高みを嚴かに進む人間の輪廓や、その他乘合馬車の車輪の響きをも、マルシヤン・ド・ロビネ（栓などを賣り歩く呼賣商人）の音樂をも世にも美しいものと思はない人々に取つて親しい多くのものゝ傍らに行つて見るものゝ方を選ぶ。たゞかういふ趣味は對手を樗はずに打ち開けてはいけない。すると非常な弱點と目されて、不愉快極まる名で呼ばれることになるからである。僕は君も同じ缺點に苦しんでゐることを知るので、それで君にだけ話をする……』

1　多分皇太子洗禮式の祝ひを差していふのであらう。

ミレーが生涯の大部分を送つたのはかういふ周圍の中でゞあつた。その主な挿話といへば、彼の作品と、不斷に起る貧との戰ひとがそれである。

一八五〇年に、ミレーは『種子蒔き』と『乾草を束ねる人』とをサロンに送つた。かのボヲヤケツと青ズボンとを着けた粗暴に見える男が、畑に舞ひ下りる白嘴鴉の群れの中で、荒々しく、種子を蒔き散らしてゐる種子蒔きの姿勢に革命的の暗示があると批評家等がいつたことは前に書いた。この畫は多少世を騒がした。がその年主な注意を集めたのはコローの『オルナンの葬式』であつた。同じ頃にミレーは『畑に働らきに行く農夫等』と、『大麻を打つ女』と、『森の木拾ひ』と、リユー・ド・ノートル・ダム・ロレツトと、リユー・サン・ラゲルの角の小間物店の看板に書いた『處女』と、『物を縫ふ若い女等』と、『肥料を施してゐる男』と、それから『四季』とを描いた。彼は又『ルスとボアズ』を描くにも忙しかつた。

一八五一年に、彼は祖母を失つた。彼女は中風に罹つてゐたが、最後まで氣がしつかりしてゐた。その死はミレーを深い絶望に投じた。彼は幾日間も頑固に默り通した。彼の母は今や彼から遠く離れて、故郷に、獨りつ切りになつた。彼女は彼に來て、自分も亦世を去らないうちに抱い

てくれといふ、痛ましい哀れな願ひを書き送つた。ミレーの心はこの切な哀訴のために寸斷された。けれども彼には金が乏しかつた。そして旅立つことが出來なかつた。『哀れな子よ。』と母は書いた。『冬にならないうちに來られるといゝのだけれども！　私は一寸でいゝからもう一度どうかしてお前に會ひたい。私は何にもなしでもう駄目になつてしまつてゐる。もう苦しむことゝ、死ぬことより外私には何にもない。私はお前が貯へもなくつて、これからどうなることかと思ふと、身も心も苦しみに責め苛まれる。私は眠りもしなければ、休みもしない。お前は來て、私に會つて、私と暫らく一緒にどうかしてゐたいといつて來た。それは私も實にさうしたい。けれどもお前には金がなさゝうだ。一體どうしてお前は暮らしてゐるのだね？　哀れな子よ、さう思ふと、私は心配で仕方がない。あゝ、ちつとも待つてゐない時に、お前が來て、私を驚ろかしてくれるやうだといゝ。私はどうして生きて行つたらいゝか、死んだらいゝかも解らない。私はそんなにもう一度お前に會ひたい。』この不幸な女は、一八五三年に、彼を再び見ずして世を去ることゝなつた。我々はこれらの年がミレーに如何に苦しい、悲しいものであつたかゞ想像出來る。

一八五三年に、ミレーはサロンで二等賞を得た。彼は『牧穫者の食事』或ひは『ストとボアズ』と、『羊飼ひ』と、『羊の毛を苅る女』との三つを送つたのであつた。これらの寫實主義の古代的な

らゆる形と色をしてゐる襤褸の蒐集品とがあつて、これをミレーは『その博物館』と稱してゐた。そこには目に止まるやうなものが一品としてなかつた。何も彼もが取り亂されてゐた。畫架はミレーの友人間に於ける一つの話柄になつた。『それは彼のどの畫を架けるにも小さ過ぎた。上に置かれた畫布が落ちはしないかと見るものが常に恐れたほど、その樅板の枠は合はせ目が綻んで、蟲に食はれてゐた。』田舍風の素朴さが家全體に行き亘つてゐた。ミレーは初めてルソーの畫室に這入つた時――それは少しも豐かな畫室ではなかつたのだが――汚れ切つたウトレヒト製天鵝絨に蔽はれたソファがある、家具の贅澤さにびつくりした。ルソーが彼を連れてコローに會ひに行つて、一緒に食事をした時には勝手がすつかり違つてゐた。『新らしい食ひ物が出る度毎に、皿と、ナイフと、フォークが一々變へられた。』と彼はサンシエに書き送つた。『自分はこんな馳走振りには喜ぶよりも當惑した。そして自分は同じやうにするために、自分の前で銘々皿に盛つてゐるものゝ方を横目で幾たびか覗いた。』

朝ミレーは庭で土を掘つたり、木を植えたり、收穫を探集したりして、働らいた。時とすると石工のやうに、石を積み上げることさへあつた。彼と弟のピエールとだけで、庭の端に小さな藁葺きの普請をした。この運動が終ると、彼は畫室で働らくのを例としてゐた。時には浮んだ考へ

威嚴は、批評家等、分けてもテオフィル・ゴームエと、ボールド・サン・ヴィクトルとを感動せしめた。然しミレーは滿足しなかつた。彼はまだその眞の樣式を發見しなかつたのであつた。

この時からして、彼の作品は巴里とバルビゾンとにゐた英米の居留民等の心を異常に惹き始めた。この人々の間に彼は、ルソーと同じく、當時最も同情者を得た。その中でも著しいのは『藝術談叢』(一八七五年)の著者たる、ボストンのダブリユー・モリス・ハントだ、彼は『羊の毛を苅る女』と『羊飼ひ』とを買つた。ミレーは嘗てこの人に就いて『彼はその有してゐたうちの最良な最親密な友であつた』といつたことがある。それから一八五五年にミレーの弟子となつて、一八七六年の『アトランチック・マンスリー』に(サンシエの大著を除けば)我々が有するうちで最も理解に富んだ研究であり、又最も興味の多い回想錄である論文を書いたエドワード・ホイールライトや、ミレーが後に『ヴォーヴィユの僧院』をこの人のために描いた亞米利加人のショーや、愛蘭人のリチャード・ハーンや、ウイリヤム・バブコック等がそれであつた。『刈り入れる人』を買つたのも亞米利加人であつた。尙外にも買つたものがあつた。この助けは、その頃(一八五三、四年に掛けては)彼は全く金がなくなつて、商人に苦しめられてゐたので、尙更貴重であつた。彼はその友に宛てゝかう書いてゐる。『サンシエ君、氣の毒だがやつて見てくれ給へ。僕の畫を金に

代へて見てくれ給へ。いくらでもいゝから賣つて、百フランでも、五十フランでもいゝから送つてくれ給へ。』彼は生活に疲れ切らされた。けれども彼は怒りもせずに、諦めた男らしい悲みを以ていつた。『人は藝術では身の皮をも剝がなければならない。』彼は家族のために働らいて自分を殺してゐた。それで次第に彼に惹きつけられて、上述の愛に溢れた手紙でも解るやうに、彼と親しくなつたルソーは、かの美しい嚴肅な——彼が描いたうちで最も清淨な畫の一つである——『木を接ぐ農夫』のうちに、この頃ミレーを取り圍んでゐた心勞の影を認めた。ルソーは涙を流すまでそれに動かされた。彼はその中に默して家族の生命のために己れを消耗しつゝある父の象徴を認めた。『さうだ、ミレーは自分のものゝために働らいてゐる。』と彼はいつた。『ミレーは花や實を餘計に結び過ぎる木のやうに自分を消耗させてゐる。彼は子を生かすために自分を疲れ果てさせてゐる。彼は開化した枝の嫩枝を丈夫な野生の幹に接いでゐる。そしてヴィルギリウスのやうに、かう考へてゐる。

Insere, Daphni, pyros; carpent tux pona nepotes.

(「ダフニよ、汝の梨の木を接げ。汝の孫等は汝の林檎を食するだらう」。)』

ミレーの貧窮は遂に二フランしか手に餘さないまでになつた。

ルソーは友をある繪畫愛好家等に知らしめることに成功した。それで彼等はミレーから素畫と彩畫を幾枚か買ひ取つた。ルソーは自分でも『肥料を施してゐる農夫』を買つた。そして感動すべき愛情から買ひ手が彼であるでいふことをミレーに隱して、それを買つたのはある亞米利加人だと思ひ込ませた。『木を接ぐ農夫』を買つたのも亦ルソーであつた。

『雛に餌をやる女』が藝術愛好家ルトローヌに二千フランで賣れた賣上、この彼には法外に思はれた金高で、ミレーは一寸した旅行をして、ラ・アークの故郷に子供と四箇月滯在することが出來た(一八五四年六月)。彼はその家族に屬したあらゆるものを、住居や、庭や、サイダー搾出器械や、廐に至るまで敬虔な精確さを以て描いた。彼は彩畫を十四枚に、素畫を二十枚と、スケッチ・ブック二冊一抔になるまで描いた。彼の母の死後に、遺産が八人の子の間に分かたれた。ミレーは自分に分けられた家と土地とを取らなかつた。彼はたゞ本と古い樫の木の戸棚とを請求した。彼は二人の弟が又畫家にならうとして、バルビゾンで彼と一緒に住むことになつたのを教育した。

これはルソーの大流行時代であつた。その家でミレーはヂアズや、バリーや、ドーミエや、ジェムや、エシュベリーやに會つた。バリエと、デユブレと、ドラクロクと、ルソーと、ドーミエと、ヂアズと、ミレーとで、一緒にラ・フオンテーヌの寓話の挿畫を描かうといふ計劃がその間